

蔵王町文化財調査報告書 第5集

中 沢 A 遺 跡

2007年（平成19年）3月

蔵王町教育委員会



1. S I 1 豎穴住居跡出土遺物



2. S I 4 豎穴住居跡出土遺物

例 言

1. 本書は、町道立目場線改良事業、及び、ふるさと緊急農道整備事業に基づく東根北部線農道改良事業の着手に先立ち、平成13・14年度（2001・2002年度）に実施した『中沢A遺跡』の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は蔵王町教育委員会が主体となり、社会教育課文化財保護係が実施した。
3. 本書の編集・執筆は教育総務課文化財保護係が実施し、鈴木 雅・小泉博明の協力を得て佐藤洋一が担当した。
4. 本遺跡の発掘調査、及び資料整理・本報告書の作成に際し、以下の方々及び機関からご指導、ご助言を賜った。記して謝意を表す（敬称略）。
吾妻俊典・山田晃弘・宮城県教育庁文化財保護課・東北歴史博物館
5. 本書の第1図は国土地理院発行の「村田」（1/25,000）の地形図を複製して使用した。
6. 本書における土色の記述については、「新版標準土色帳」（小川・竹原：1973）を参照した。
7. 本書で使用した測量原点の座標値は日本測地系（改定前）に基づいており、国家座標第X系による。各測量原点の座標値は、1区については第3図、2区については第33図、3区については第37図に明記している。
8. 本書の挿図に記した方位表示における北は磁北である。
9. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。遺構番号は遺構の種別にかかわらず発掘調査時に現場で付したものをそのまま使用している。
S I：竪穴住居跡 S D：溝跡 S K：土坑 S X：溜池状遺構
10. 遺構平面図・断面図の縮尺は原則として以下のとおりである。なお、図ごとに縮尺を明記し、スケールを付している。
第1図：1/50,000 第2図：1/15,000 調査区遺構配置図：1/400（1区）、1:200（2・3区）
竪穴住居跡平面及び断面図、土坑・溝跡・溜池状遺構断面図：1/60 土坑・溝跡平面図：1/200
11. 遺構平面図等において、焼面、柱や壁材の痕跡は網点により示した。
12. 遺物の種別において、土師器のうち製作にロクロを用いていないものを「土師器」、ロクロを用いているものを「ロクロ土師器」と分類している。
13. 遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。
土器・陶器・砥石：1/3 土製品・石製品：2/3 金属製品：1/2
14. 本書に掲載した遺構図作成、遺物実測・トレース、遺物写真撮影は、佐藤洋一・庄子善昭・小泉博明・齋藤史佳・庄子裕美・一條 隼・佐藤麻実子・鈴木里香・寺島むつみが行った。
15. 本書発行以前に公表している本発掘調査の情報について、本書の内容と齟齬が生じる場合、本書の内容が優先する。
16. 発掘調査及び整理の記録や出土遺物は蔵王町教育委員会が保管している。

目 次

カラー図版	
例 言	
目 次	
調査要項	
第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の概要	2
1. 遺跡の位置と地理的環境	2
2. 歴史的環境と周辺の遺跡	2
第Ⅲ章 発掘調査の方法と経過	6
第Ⅳ章 発見された遺構と出土遺物	7
1. 1区	7
2. 2区	38
3. 3区	42
4. その他の出土遺物	44
第Ⅴ章 考 察	46
1. 1区	46
(1) 遺物の分析	46
(2) 遺構の分析	56
2. 2区	58
第Ⅵ章 ま と め	59
引用・参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

調 査 要 項

遺 跡 名 中沢A遺跡（なかざわAいせき 宮城県遺跡登録番号：05045）
所 在 地 宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字中沢 地内
調 査 主 体 蔵王町教育委員会
調 査 担 当 者 蔵王町教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤洋一
調 査 面 積 約2,250㎡（1区：1,800㎡ 2区：700㎡ 3区：750㎡）
調 査 期 間 平成13年10月（1区）・平成14年4～9月

第 I 章 調査に至る経緯

宮城県刈田郡蔵王町は、西部に奥羽山脈、北部と東部を愛宕山丘陵によって他地域と隔てられており、古来、比較的標高の低い山間に細い峠道が発達し、他地域との往来に利用されていた。このうち、蔵王町の東側に隣接する柴田郡村田町との往来は、蔵王町北東端を通る県道岩沼蔵王線を利用する以外方法がなく、村田町東部及び大河原町中部の、いわゆる仙南中核地域への往来に不便をきたしていた。そのため、町では平成 13 年度から 2 カ年度の計画で、蔵王町東部中央区と村田町西部中央区とを接続する広域道路網整備計画の一環である「町道立目場線道路改良事業」を策定した。

一方、町北東端部の東根地区は、愛宕山丘陵麓部に開析された複数の沢ごとに数戸の屋敷が点在しているが、沢の入り口にあたる丘陵裾野部に東北自動車道が南北に縦貫しており、東の愛宕山丘陵、西の自動車道に挟まれた形となっている。東根地区の家々との往来は自動車道地下に設けられた隧道を用いているが、自動車道建設以来 30 年以上を経過した現在、車両の大型化が進んで消防自動車など緊急車両の通り抜けも不可能な状態となっていたため、町では平成 13 年度から 5 カ年度の計画で、「ふるさと緊急農道整備事業 東根北部線農道改良事業」を策定した。

これら 2 つの事業は町北東端部にあたる愛宕山丘陵に、幅員 8 m 規模の道路を東西及び南北に設置（一部拡幅）するという計画で、前者は中沢 A 遺跡が、後者は中沢 A 遺跡・屋木戸内遺跡・立目場遺跡・大橋遺跡が事業計画と係りをもつことが初期の段階で判明したため、平成 12 年度に事業担当部局である町建設課及び農林課と、宮城県教育庁文化財保護課及び町教育委員会との間で文化財保存協議を実施した。その結果、二つの事業計画を実施することによって各遺跡に与えられる影響は決して小さなものではないが、町東根地区の交通事情の実態に基づいた早急な道路拡張の必要性、及び町広域道路網整備の必要性から、事業は基本計画どおり実施するものとし、それと係りをもつ各遺跡については、町教育委員会が主体となって事業着手前の発掘調査を実施し、記録保存するという結論に達した。

町教育委員会では、協議結果に基づき平成 13 年度 9 月に町道立目場線と係りをもつ中沢 A 遺跡の遺構確認調査を実施したところ、対象範囲の中央部分にあたる丘陵斜面において竪穴住居跡数軒を確認したため、平成 13 年度及び 14 年度にこの遺構確認範囲（1 区）の発掘調査を実施し、さらに、町道立目場線と係りをもつ遺跡西端部（3 区）、東根北部地区農道と係りをもつ遺跡東端部（2 区）については平成 14 年度に遺構確認調査を実施し、遺構が確認された場合、随時事前調査に移行することとした。1 区の事前調査は平成 13 年 10 月及び 14 年 4～6 月に、2 区の遺構確認調査及び事前調査は平成 14 年 7～8 月に、3 区の遺構確認調査及び事前調査は平成 14 年 8～9 月に、それぞれ実施した。

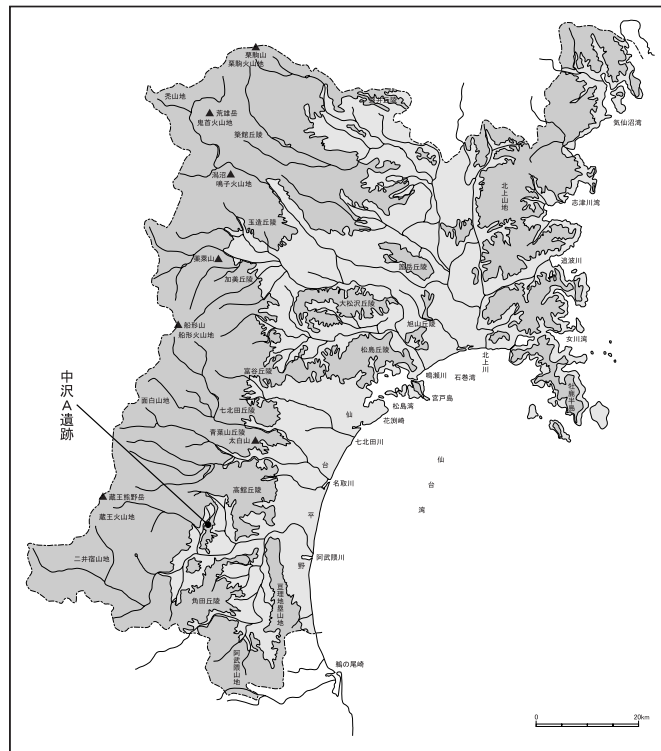
第Ⅱ章 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境（第1図）

中沢A遺跡は宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字中沢に所在する。

蔵王町は宮城県の南西部に位置する。町の西部には奥羽山脈南部を形成する蔵王連峰が位置し、その東麓を町域とする。一方、町域東部には北西から南方に流下する藪川によって形成された沖積地である円田盆地が広がる。町域内における低平地はこの円田盆地とその南方に連続する松川河岸地域だけで、大半は丘陵斜面ないしは山岳部である。

円田盆地は、東縁を奥羽山脈東麓から続く高木丘陵に、北及び東縁を愛宕山丘陵によって囲まれている。高木丘陵は広大でなだらかな丘陵で、比較的小規模な河川が数本東流し、丘陵はこれらの小河川によって隔てられたいくつかの小丘陵に分割されている。一方、愛宕山丘陵は比較的傾斜の急な丘陵で、短く深い沢状地形が数多く西流し、これらの沢状地形によって隔てられた急峻な小丘陵群が形成される。標高は盆地南端で約80m、周辺の愛宕山丘陵頂部で約170m、高木丘陵東端部で約130mである。現在、円田盆地は水田・畑地として利用されている。一方その辺縁部では、盆地の際まで進出した丘陵上が屋敷地及び畑地として利用されており、盆地を取り囲むように数戸～数十戸規模の屋敷地が点在している。中沢A遺跡は、円田盆地の東辺縁部にあたる愛宕山丘陵内の小丘陵上に立地している。



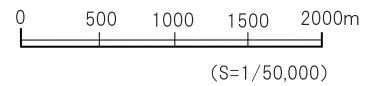
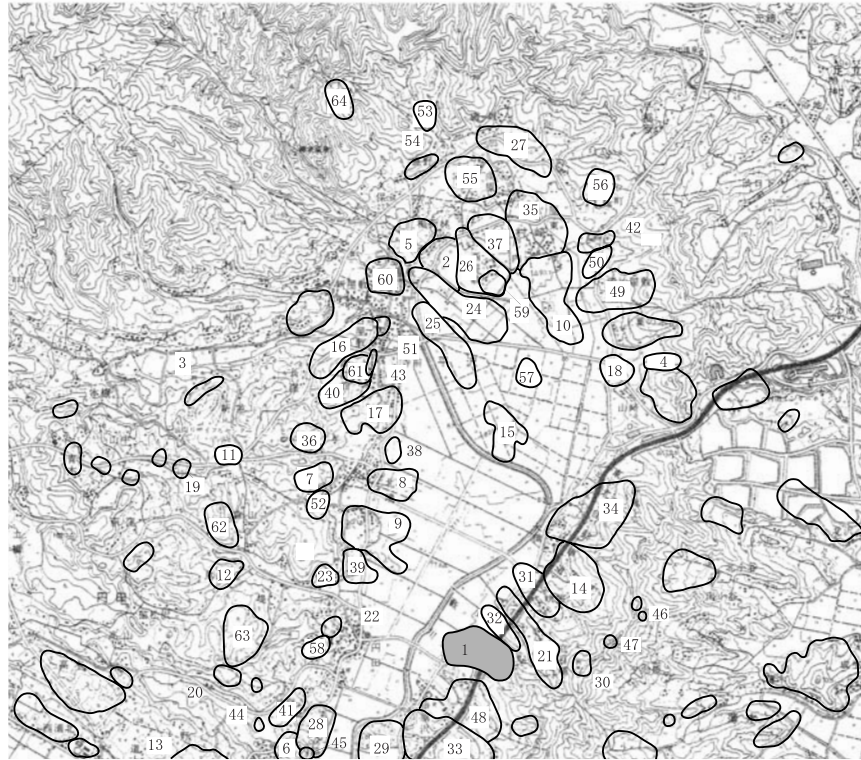
第1図 中沢A遺跡の位置

2. 歴史的環境と周辺の遺跡（第2図）

現在、蔵王町内における周知の埋蔵文化財包蔵地の数は200ヶ所を超える。そのほとんどは町域の東半部である円田盆地及びその周辺、または奥羽山脈東麓に連なる丘陵斜面に立地する。大別して、丘陵斜面においては縄文時代の、円田盆地及びその周辺部では弥生時代以降の遺跡が多く分布する。以下、各時代の代表的な遺跡を挙げるとともに、円田盆地周辺の様相について概述する。

〔旧石器時代〕

盆地北部の小村崎地区に所在する前戸内遺跡では、従来より後期旧石器時代の尖頭器とされている遺物が採集されているが、これが確実に旧石器時代のものであるか否かについての結論は未だ出され



No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	中沢 A 遺跡	集落	縄文早期・弥生・古墳～中世	33	塩沢北遺跡	集落	弥生・古墳中期・古代
2	前戸内遺跡	包含地	旧石器・縄文後・古代	34	赤鬼上遺跡	包含地	弥生・古代・中世
3	三本槻遺跡	包含地	縄文早期	35	原遺跡	水田・包含地	弥生・古代
4	山崎遺跡	包含地	縄文早期	36	大柿内遺跡	包含地	弥生
5	稻荷林遺跡	包含地	縄文早期・古代	37	戸ノ内遺跡	集落	弥生・古代・中世
6	戸の内脇遺跡	包含地	縄文早、中期・弥生・古墳～中世	38	壘の入遺跡	包含地	弥生・古代・中世
7	北境遺跡	包含地	縄文早期・弥生・古代・中世	39	白山遺跡	包含地	弥生・古墳
8	中組遺跡	集落・包含地	縄文早、中期・弥生・古代・中世	40	諏訪館遺跡	包含地	弥生・古墳
9	本宿前遺跡	集落・包含地	縄文早期・弥生・古代・中世	41	土ヶ市遺跡	包含地	弥生・古代
10	六角遺跡	集落	縄文前、後期・弥生・古墳・古代	42	三の輪遺跡	包含地	古墳・古代
11	新並遺跡	包含地	縄文中期	43	諏訪館横穴墓群	横穴墓	古墳
12	鳥山遺跡	包含地	縄文中期・古代	44	八幡山古墳群	古墳	古墳
13	上野遺跡	包含地	縄文中期・弥生・古代	45	宋膳堂古墳	古墳	古墳
14	大橋遺跡	集落・包含地	縄文後期・弥生・古墳・平安	46	夕向原古墳群	古墳	古墳
15	都遺跡	集落跡	縄文後期・弥生・古墳・古代	47	古峯神社古墳	古墳	古墳
16	諏訪館前遺跡	集落・包含地	縄文晩期・弥生・古墳前、中期・古代	48	伊原沢下遺跡	集落	古墳
17	小高遺跡	経塚・包含地	縄文・弥生・古代・中世	49	鍛冶屋敷遺跡	包含地	古代・中近世
18	中葉の木沢遺跡	包含地	縄文・弥生・古代	50	車地藏遺跡	包含地	古代・中近世
19	角山 B 遺跡	包含地	縄文	51	平沢遺跡	包含地	古代
20	見継遺跡	包含地	縄文	52	沢遺跡	包含地	古代
21	立目場遺跡	集落・包含地	縄文・弥生中、後期・古墳	53	鹿野遺跡	包含地	古代
22	堀の内遺跡	集落・包含地	縄文・弥生・古墳・古代	54	大久保遺跡	包含地	古代
23	清水遺跡	包含地	縄文・弥生・平安	55	後原遺跡	包含地	古代
24	十郎田遺跡	集落	縄文・古墳・古代	56	清上遺跡	包含地	古代
25	窪田遺跡	集落跡	縄文・古墳・古代	57	新城館遺跡	集落・城跡	古代・中世
26	西屋敷遺跡	集落・包含地	縄文・古墳～中世	58	寺坂遺跡	包含地	平安
27	磯ヶ坂遺跡	包含地	縄文・古代	59	西小屋館跡	城館	中世
28	宋膳堂遺跡	包含地	弥生・古墳・平安	60	平沢館跡	城館	中世
29	台遺跡	水田・包含地	弥生・古墳・古代・中世	61	諏訪館跡	城館	中世
30	愛宕山遺跡	包含地・古墳?	弥生・古墳	62	築館館跡	城館	中世
31	屋木戸内遺跡	包含地	弥生	63	花桶館跡	城館	中世
32	中沢 B 遺跡	包含地	弥生・古墳・古代	64	兵衛館跡	城館	中世

第 2 図 中沢 A 遺跡と周辺の遺跡

ていない。蔵王町内における明確な旧石器時代の遺跡は、町南東部の宮地区に所在する鉄砲町遺跡や持長地遺跡がある。前者からは彫刻刀形石器が採集され、後者では発掘調査時にナイフ形石器が出土している。この時代の盆地近辺の様相はほとんど解明されていないが、盆地に隣接する村田町の賀籠沢遺跡は在地産の玉髓を利用した原産地遺跡と考えられており（佐川・鈴木・安倍：2005）、本地域を含む広い範囲が当時の人々の生活の場であったことが把握できる。

〔縄文時代〕

盆地近辺においては縄文時代の遺跡は少なく、諏訪館前遺跡・都遺跡・本宿前遺跡などで若干の遺物散布が認められるに過ぎない。蔵王町内における縄文時代の遺跡には、早期のものとして宮地区沢入D遺跡・明神裏遺跡などが、前期のものとして宮地区長峰遺跡などが、中期のものとして円田地区高木遺跡・鞆堂山遺跡・湯坂山B遺跡などが、後期のものとして宮地区二屋敷遺跡・円田地区西浦遺跡などが、晩期のものとして宮地区下別当遺跡・曲竹地区鍛冶沢遺跡などが挙げられ、遺跡数・規模ともに充実している。これらは主に盆地より西方の丘陵斜面部や、その南部の青麻山東麓部など、やや標高の高い地域に集中して分布する。当時の人々の生活基盤が丘陵部～山麓部における狩猟・採集を中心としたものと考えられ、盆地近辺よりは丘陵部の方が生活適地として好まれたことが把握できる。なお、盆地内の微丘陵上に営まれた都遺跡・窪田遺跡では、縄文時代のものと考えられる落し穴状土坑が発見されている（佐藤・小泉：2005）ことから、盆地内の微丘陵も狩猟・採集地として活用されていたことが考えられる。

〔弥生時代〕

弥生時代になると、盆地近辺における遺跡数が急増する。平沢地区都遺跡・諏訪館前遺跡・東根地区大橋遺跡など、多くの遺跡から弥生時代各期の遺物の出土を見る。当時の遺構はほとんど発見されていないが、盆地近辺の遺跡の大半から弥生土器が出土することを考慮すると、この時代には、生業の変化に伴い盆地近辺の低地での生活が盛んになったものと考えられる。なお、大橋遺跡・都遺跡では土器表面に水稻籾殻圧痕の付いた弥生土器片が出土している（本遺跡においても籾殻圧痕の付いた弥生土器片の出土例あり。後述）。

〔古墳時代〕

この時代も盆地近辺における遺跡数が増加し続ける。前期のものとして東根地区大橋遺跡・伊原沢下遺跡・円田地区堀の内遺跡などが、中期以降のものとして平沢地区都遺跡・東根地区台遺跡などが挙げられる。前期の大橋遺跡・伊原沢下遺跡は宮城県内における古墳時代最古段階の遺跡として知られる。中期以降はより遺跡数が増大し、それ以前と比較して集落そのものが大規模化する傾向が見られる。また、東根地区夕向原古墳群・古峯神社古墳・塩沢地区宋膳堂古墳・天王古墳群など、盆地周辺の高地上にいくつもの古墳が築かれることから、盆地を支配する権力階級の存在が示唆される。

〔古代〕

古代初頭には、荊田郡の建置をはじめ県南部地域の支配体制に大きな変化が訪れる。盆地近辺にお

いても、円田地区堀の内遺跡・平沢地区都遺跡・塩沢地区塩沢北遺跡など多くの集落跡が確認されている。弥生時代以降増加し続けてきた盆地近辺の遺跡数が急激に増加するのもこの時期である。なお、堀の内遺跡・都遺跡などでは関東系土師器が少数ながら出土している。また、都遺跡では多賀城創建期のものと類似した軒平瓦が採集されているのをはじめ、遺跡の立地する微丘陵を取り囲むような区画溝・堀跡が確認されるなど、何らかの行政施設の存在を思わせる遺構・遺物が確認されている。当時の盆地近辺は、それ以前から継続してきた開拓経営が一気に拡大するとともに、荏田郡域内の行政面からも比較的重要視され、相当の施設が設けられていた可能性がある。

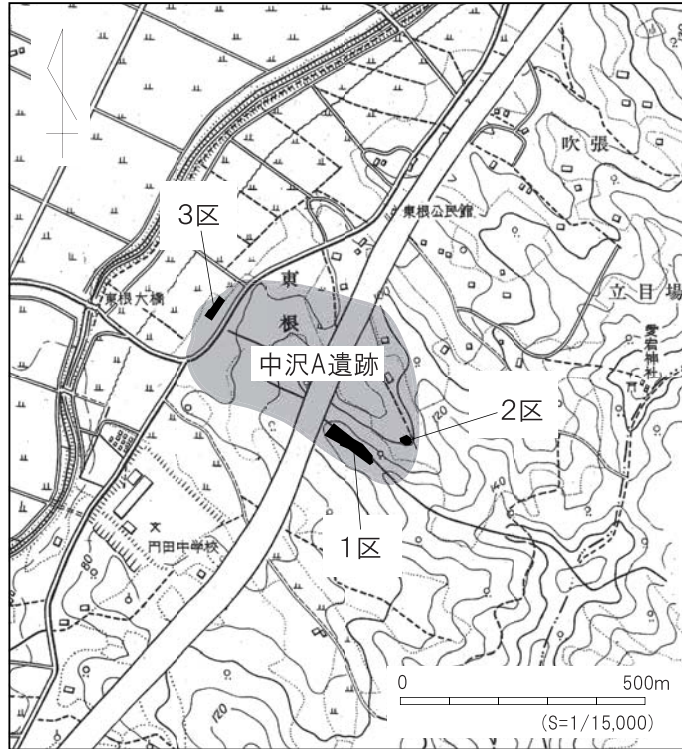
[中世]

宮地区宮城館跡・山家館跡・曲竹地区館の山城跡・円田地区築館跡・平沢地区諏訪館跡・小村崎地区兵衛館跡など、盆地の西方にある丘陵部に多くの城館が築かれる時期である。これらの城館は、主に町東部の南北に長い低地部に隣接して築かれており、円田盆地を含む低地部が要地として認識されていたことがわかる。また、小村崎地区西小屋館跡は盆地北部の微丘陵上に築かれた館跡で、領主の平時の住いとして機能していたとされる。他に、小村崎地区鍛冶屋敷遺跡・車地蔵遺跡では当時のものと考えられる溝跡・建物跡が確認されている。

第三章 発掘調査の方法と経過

今回の発掘調査地点は遺跡範囲の南東部・東端部・西端部の三地点にわかれる。南東部を1区、東端部を2区、西端部を3区とし、順次調査を実施した（第3図）。

調査方法は、バックホーによる表土除去の後、手作業による遺構確認・精査を行った。遺構は必要に応じて20分の1縮尺の平面図・断面図を作成するとともに、35mmカラー／モノクローム／リバーサルフィルムにて記録写真を撮影した。出土遺物は遺構別・層位及び出土位置別に取り上げた。なお、測量基準点は各区における工事基準杭2点を利用し、1点目を基準点、2点目を方位指準点として用い、基準直線を設定した後、基準直線と並行・直行する3mグリッドを設定した。各調査区の測量基準点の位置・国家座標値はそれぞれの調査区遺構配置図に明記してある。



第3図 遺跡範囲と調査区位置図

〔調査経過〕

今回の調査原因となった2つの道路改良計画を概略的に説明すると、中沢A遺跡の南辺、東辺、西辺にコの字状に道路を建設するというものであった。協議の結果、最も延長が長く、事業計画の基幹となる遺跡南辺部から着手することとなり、平成13年9月に遺構確認調査を実施したところ、対象範囲の東部において竪穴住居跡9軒などを確認した。この遺構分布範囲（1区）の事前調査は同年10月に実施し、一部の遺構を精査したものの調査完了までは至らず、ブルーシート等による遺構養生を施した上で翌年度に持ち越しとした。調査再開は翌平成14年4月で、同年6月に完了した。完了まで4ヶ月を費やした。

1区の調査完了後、続けて遺跡東辺における遺構確認調査を実施したところ、竪穴住居跡1軒などを確認し（2区）、随時事前調査を実施した。2区の調査期間は同年7～8月で、2ヶ月を費やした。

2区の調査完了後、遺跡西辺（3区）の事前調査を実施した。この地点は平成2年度の宮城県教育委員会によるほ場整備事業に係る遺構確認調査を実施した地点と重複しており、ある程度の遺構分布は把握できていた（鈴木・木皿：1990）ため、遺構確認調査を省略して事前調査を実施することができた。調査期間は同年8～9月で、2ヶ月を費やした。

第Ⅳ章 発見された遺構と出土遺物

今回の発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居跡 10 軒、溝跡 9 条、溜池状遺構 1 基、土坑 11 基などである。また、出土した遺物は弥生土器、土師器、ロクロ土師器、須恵器、中世陶器、石器、土製品、石製品、金属製品、鉄滓などで、その総量はコンテナ 30 箱程度になる。以下、調査区ごとに調査結果を記す。

1. 1 区（第 4 図）

遺跡範囲の南東部に位置し、東西約 20 m、南北約 96m、面積約 1,800 m²の調査区である。北西及び南東側が沢によって開析され、盆地側に突出した舌状の張り出しの頂部にあたる。耕作地の造成や植林などの影響で削平が進んでおり、現表土（耕作土・山林の腐植土）の直下で地山面に達する部分がほとんどである。緩やかな西斜面で、標高は調査区西端で 116 m弱、東端で 122 m強である。

検出した遺構は竪穴住居跡 9 軒、溝跡 5 条、土坑 9 基である。また、遺構内外から弥生土器、土師器、石器、土製品、石製品、金属製品、鉄滓などが出土している。遺構は、全体にやや強めの削平・攪乱を受けており、平面形が完全に把握できるものは少ない。

（1）竪穴住居跡

S I 1 竪穴住居跡（第 5～7 図）

[検出] 調査区西部で検出した。検出面は地山面である。

[重複] S D 1 溝跡と重複し、これより古い。

[平面形・規模] 平面形は長方形で、南北方向が長辺となる。規模は南北 6 m、東西 5.7 mである。

[方向] 長辺を基準とすると、北北西方向（N - 25° - W）である。

[堆積土] 5 層に細分される。1～3 層は住居廃絶後の自然堆積土、4・5 層は焼土・炭化物などを多量に含み、床面を直接覆うことから住居火災時の堆積物と考えられる。

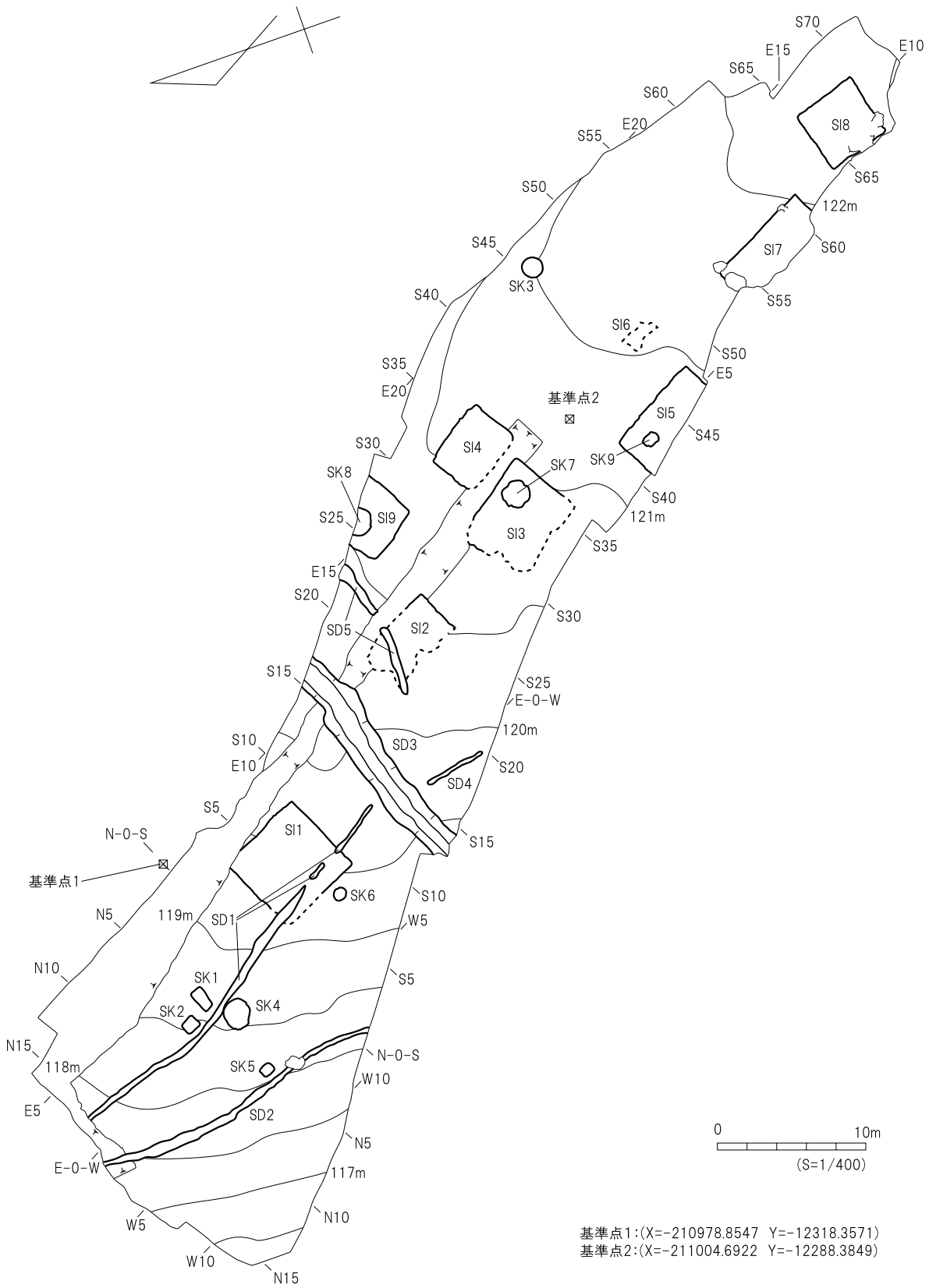
[床面] 住居掘り方埋土を床としており、ほぼ平坦である。床面中央部には黄褐色ロームによる貼床が施されており、硬くしまっている。なお、東部を中心として床面直上に炭化材が検出された。炭化材の残存状態は不良であったが、隣接する住居壁と直行・並行した状態で確認され、さらに炭化材直下の床面が焼土化し、赤変しているのが観察された。

[壁] ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、もっとも残存状態の良い南東隅部で床面から 45cm である。

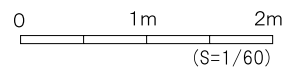
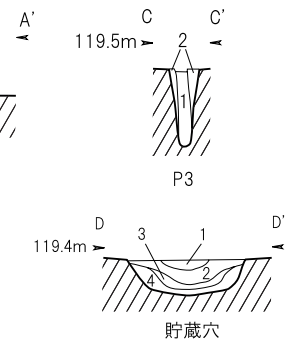
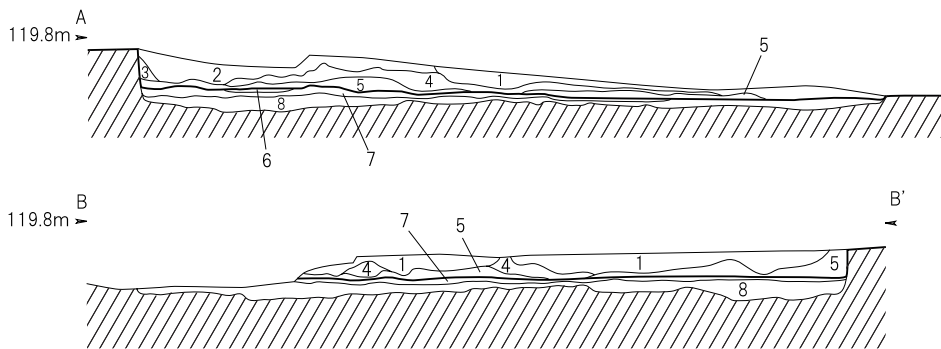
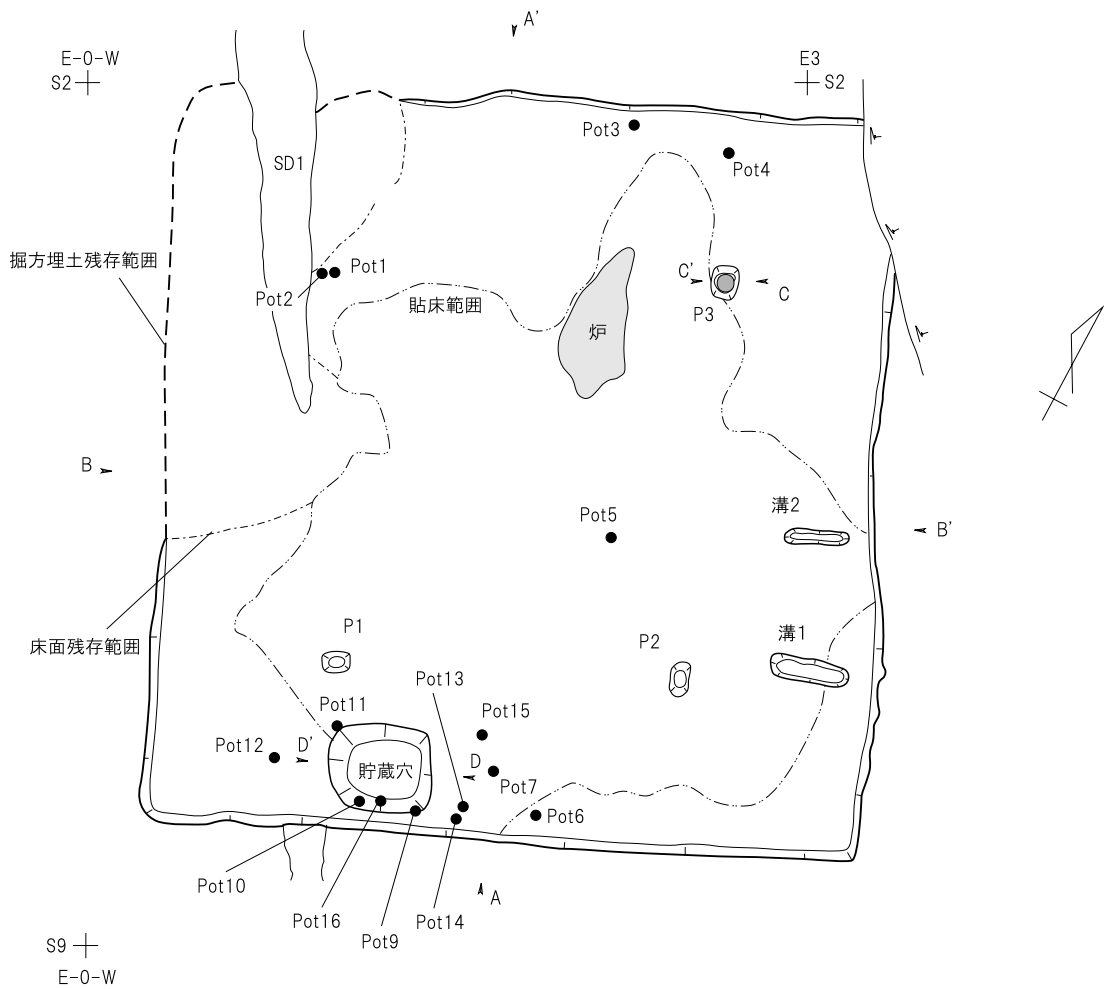
[支柱穴] 北西部を除く住居対角線上の床面から 3 個のピットを検出した（P 1～3）。配置から支柱穴と考えられる。掘り方の平面形は長軸 15～38cm、短軸 14～24cm の楕円形または長方形である。柱穴の深さは 45～64cm で、P 3 から径 10cm の柱痕跡を確認した。

[炉] 住居中央部やや北寄りにおいて床面が火熱を受けて赤変した部分を検出した。焼け面の平面形は長軸 140cm、短軸 60cm の不整形で炉と考えられる。なお、床面には炉の他に炭化材直下の赤変部が複数存在するが、これらはいずれも赤変の度合いが弱いことから炉と区別できる。

[貯蔵穴] 住居南壁際の中央部やや西寄りにおいて 1 基検出した。平面形は長軸 85cm、短軸 70cm



第4図 1区遺構配置図

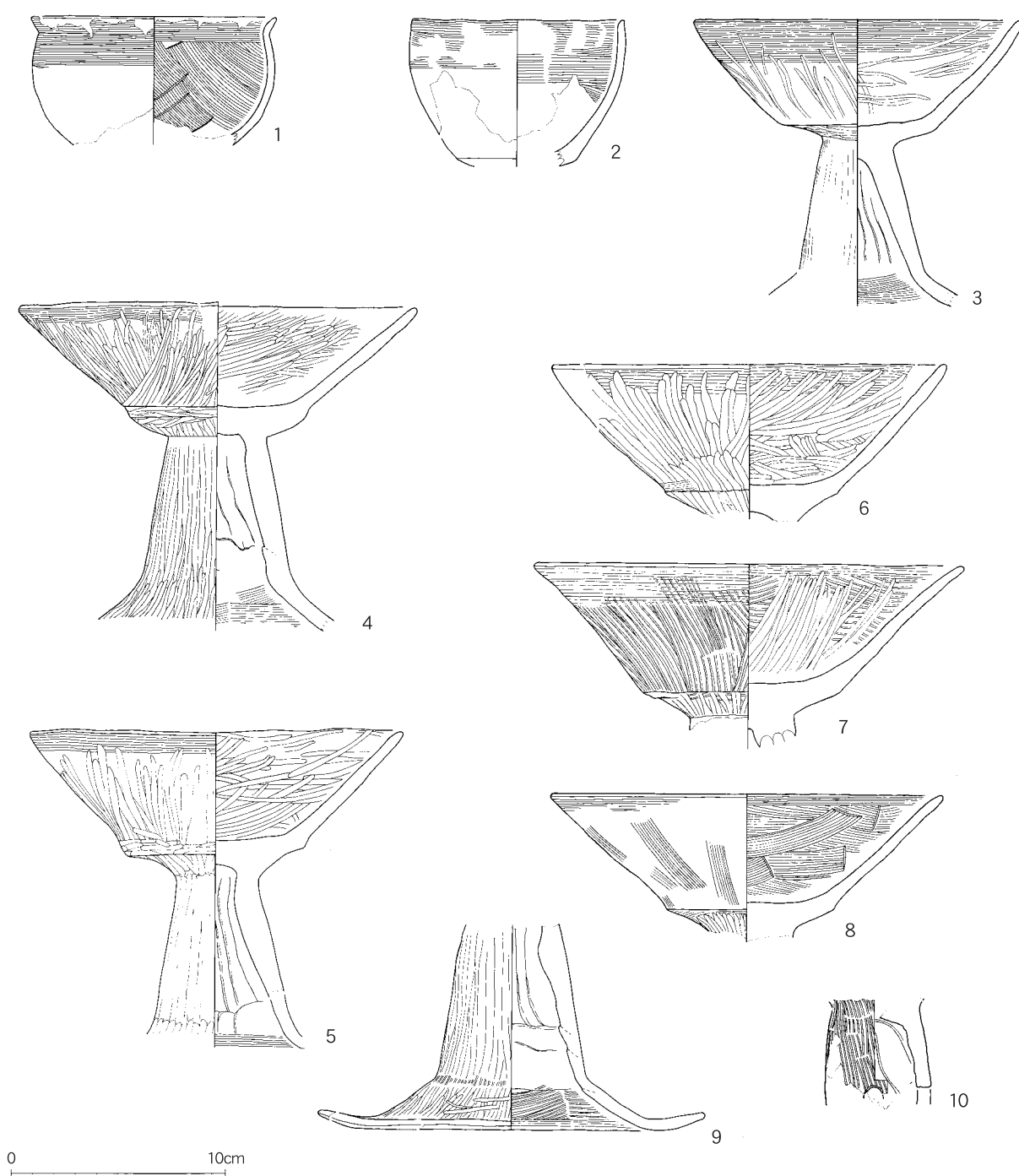


層	土色	土性	備考
1	褐 (10YR4/6)	シルト	炭化物をごく少量含む
2	黄褐 (10YR5/6)	シルト	地山アワックを多く含む
3	褐 (10YR4/4)	シルト	地山粒を含む
4	暗褐 (10YR3/4)	シルト	焼土アワック・炭化物を多く含む
5	黒褐 (10YR3/2)	シルト	地山アワック・焼土・炭化物を粒状に含む
6	褐 (10YR4/4)	シルト	地山アワック多く、焼土・炭化物少量含む 貼床土
7	褐 (10YR4/6)	シルト	地山アワック非常に多く、炭化物少量含む 貼床土
8	褐 (10YR4/6)	シルト	焼土・炭化物を少量含む 住居掘り方埋土

貯蔵穴			
層	土色	土性	備考
1	褐 (10YR4/6)	シルト	地山大アワックを非常に多く、炭化物をごく少量含む
2	褐 (10YR4/6)	シルト	焼土をごく少量、地山小アワック・炭化物を含む
3	褐 (10YR4/4)	シルト	地山小アワック・炭化物を少量、焼土をごく少量含む
4	褐 (10YR4/4)	シルト	地山小アワック・黒褐色土粒を少量含む

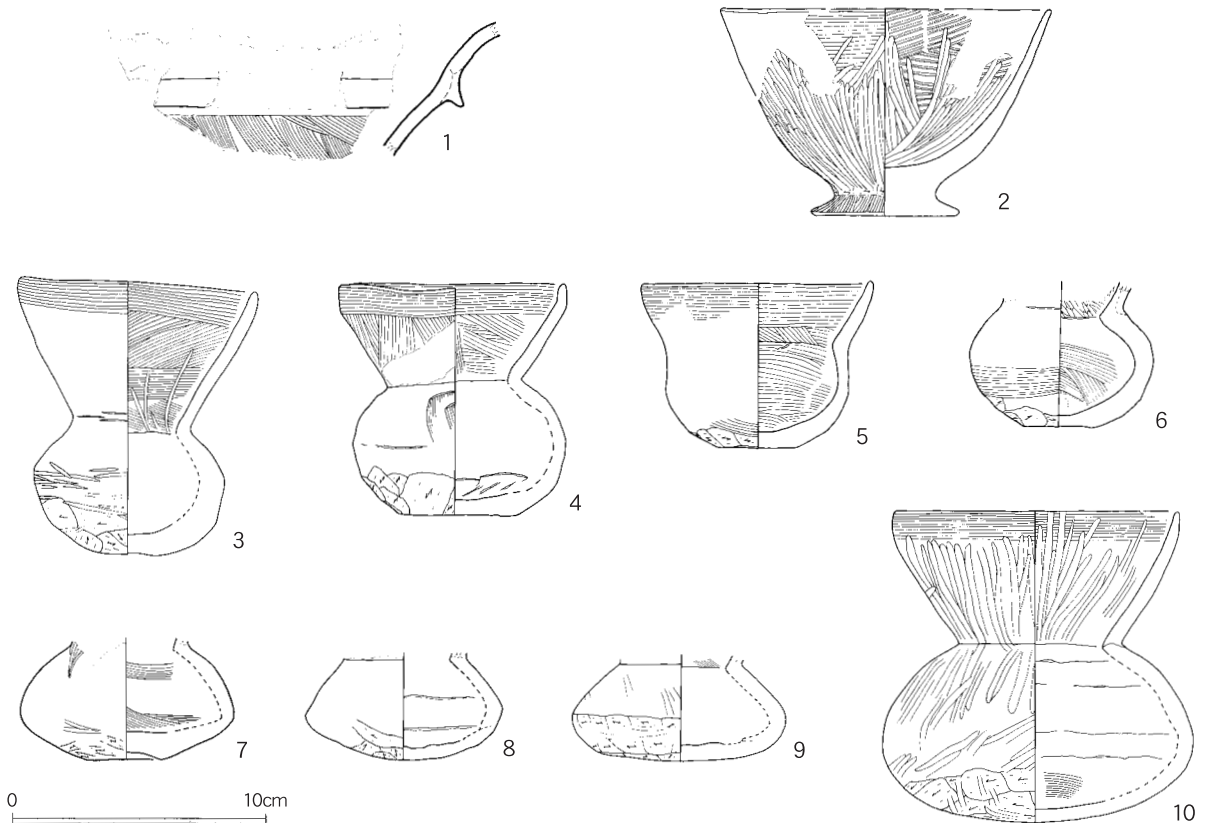
支柱穴 (P3)			
層	土色	土性	備考
1	暗褐 (10YR3/3)	シルト	地山小アワックを含む 柱痕跡
2	褐 (10YR4/6)	シルト	地山小アワックを多く含む 掘り方埋土

第5図 S11 竪穴住居跡



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	S11	床	土師器・坏	(体) ㄱㄱ → (口) ㄱㄱ	(体) ㄱㄱ → (口) ㄱㄱ	(11.2)	-	(5.9)	一部			20
2	1	S11	堆積土	土師器・坏	(体) ㄱㄱ → (口) ㄱㄱ	(体) ㄱㄱ・ㄱㄱ → (口) ㄱㄱ	(9.9)	-	(6.9)	一部			24
3	1	S11	床	土師器・高坏	(口) ㄱㄱ → ㄱㄱ	(坏) ㄱㄱ(裾) ㄱㄱ	17.4	-	(15.0)	1/2	pot13		5
4	1	S11	床	土師器・高坏	(口) ㄱㄱ → ㄱㄱ	(坏) ㄱㄱ(脚) ㄱㄱ	(18.7)	-	(15.4)	3/5	pot6・13	9-1	28
5	1	S11	床	土師器・高坏	(口) ㄱㄱ → ㄱㄱ	(口) ㄱㄱ → (坏) ㄱㄱ(脚) ㄱㄱ	15.4	-	(13.4)	4/5	pot7	9-2	37
6	1	S11	床	土師器・高坏	(口) ㄱㄱ → (体) ㄱㄱ → ㄱㄱ	(口) ㄱㄱ(口~体) ㄱㄱ	(18.6)	-	(7.3)	坏部 1/4	pot12		19
7	1	S11	床	土師器・高坏	(口) ㄱㄱ(体) ㄱㄱ(下端) ㄱㄱ	(体) ㄱㄱ → (口) ㄱㄱ → (体) ㄱㄱ	20.2	-	(8.7)	一部	pot5		15
8	1	S11	床	土師器・高坏	(口) ㄱㄱ(体) ㄱㄱ(下端) ㄱㄱ	(口) ㄱㄱ(体) ㄱㄱ	18.4	-	(6.9)	一部	pot10		6
9	1	S11	貯藏穴	土師器・高坏	(裾) ㄱㄱ → (脚) ㄱㄱ	(脚) ㄱㄱ → ㄱㄱ	-	(18.2)	(9.6)	一部			36
10	1	S11	床	土師器・高坏	(脚) ㄱㄱ	(脚) ㄱㄱ	-	-	(4.9)	一部	円窓 1 個	9-10	33

第 6 図 S11 竖穴住居跡出土遺物 (1)



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	S11	堆積土	土師器・高坏	ナデ・ヨコナデ	ナデ	-	-	-	一部	内面炭化物付着	9-9	30
2	1	S11	床	土師器・台付鉢	(口)ヨコナデ(体)ナデ→ナズリ→ミガキ(底)ミガキ	ナメ→ミガキ	(13.1)	(5.9)	8.75	1/2	pot6	9-4	41
3	1	S11	床	土師器・小型壺	(口)ナデ→ヨコナデ(体)ナデ→ナズリ→ミガキ(底)ナデ	(口)ヨコナデ→ミガキ(体)ナデ	9.5	2.4	10.8	5/6	pot3	9-7	10
4	1	S11	床	土師器・小型壺	(口)ヨコナデ(体)ナデ→ナズリ	(口)ナデ→ヨコナデ(体)ヘナデ	9.0	4.7	9.1	5/6		9-6	23
5	1	S11	堆積土	土師器・小型壺	(口)ヨコナデ(体下)ナズリ→ナデ	(口)ヨコナデ(体)ヘナデ	(9.2)	3.3	6.5	1/2		9-3	11
6	1	S11	床	土師器・小型壺	(口)ミガキ(体)ナデ→ナズリ→ミガキ	(口)ミガキ(体)ナデ	-	2.6	(5.7)	一部	pot14	9-8	12
7	1	S11	床	土師器・小型壺	(体)ナデ・ナズリ→ミガキ	(体)ナデ	-	2.9	(4.8)	1/2	pot15		14
8	1	S11	床	土師器・小型壺	(体)ナズリ→ミガキ	(体)ナデ	-	丸底	(4.2)	1/2			16
9	1	S11	床	土師器・小型壺	(体)ナデ→(体下)ナズリ	(体)ナデ	-	丸底	(4.3)	一部	pot2		18
10	1	S11	貯蔵穴	土師器・壺	(口)ヨコナデ→ミガキ(体)ナズリ→ミガキ	(口)ヨコナデ→ミガキ(体)ナデ	11.2	丸底	12.3	3/4		9-5	35

第7図 S11 竪穴住居跡出土遺物(2)

の長方形で、深さは25cmである。断面形は逆台形である。貯蔵穴周辺の床面には中央部から連続して貼床が施されている。堆積土は焼土・炭化物を微量に含むのみで住居焼失時の堆積物を含まないことから、住居焼失前にほぼ埋没しきっていたものと考えられる。

[その他] 住居南東部床面で2条の短い溝を確認した(溝1・2)。幅12~20cm、長さ48~60cm、深さ8cmで、断面はU字状である。堆積土は暗褐色シルトである。この溝は貼床を施した上に設けられている。また、溝付近では住居東壁際まで貼床が施される。

[出土遺物] 住居床面から土師器坏(第6図1)・高坏(第6図3~8・10)・小型壺(第7図3・4・6~9)・台付鉢(第7図2)などが、床面直上から土師器高坏・小型壺などが、貯蔵穴堆積土から土師器高坏(第6図9)・壺(第7図10)などが出土している。住居掘り方埋土から甕などが、住居堆積土から土師器鉢(第6図2)・小型壺(第7図5)・甕などが出土している。住居に伴う遺物の中では小型品の割合が高い。個別の器種についてみると、高坏・小型壺が多数出土する点、坏の出土がご

く少数である点、甕が破片のみの出土で、住居に伴うと考えられるものが認められない点などが特徴として挙げられる。

S I 2 竪穴住居跡（第8～10図）

[検出] 調査区中央部で検出した。検出面は地山面である。

[重複] S D 5 溝跡と重複し、これより古い。

[平面形・規模] 住居南東部以外が攪乱・削平により消失しており平面形は不明だが、方形を基調とするものとみられる。規模は南北 5.5 m 以上、東西 3.5 m 以上である。

[方向] 東辺を基準とすると、北北西方向（N - 25° - W）である。

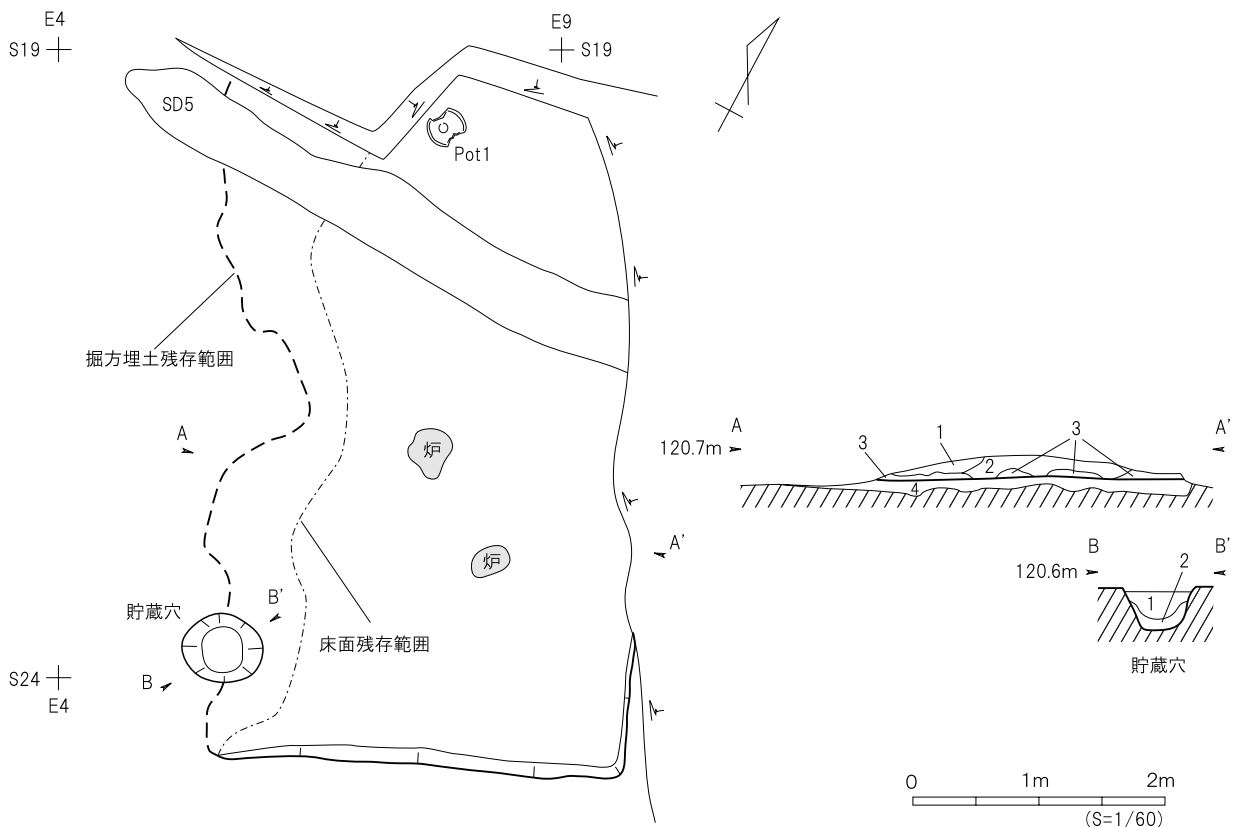
[堆積土] 3層に細分される。全て住居廃絶後の自然堆積土と思われる。

[床面] 住居掘り方埋土を床としており、ほぼ平坦である。

[壁] ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、もっとも残存状態の良い南東隅部で床面から 20cm である。

[支柱穴] 検出されなかった。

[炉] 住居南東部において床面が火熱を受けて赤変した部分を 2ヶ所検出した。焼け面の平面形は長軸 30～42cm、短軸 22～36cm の長方形あるいは不整形で、炉と考えられる。

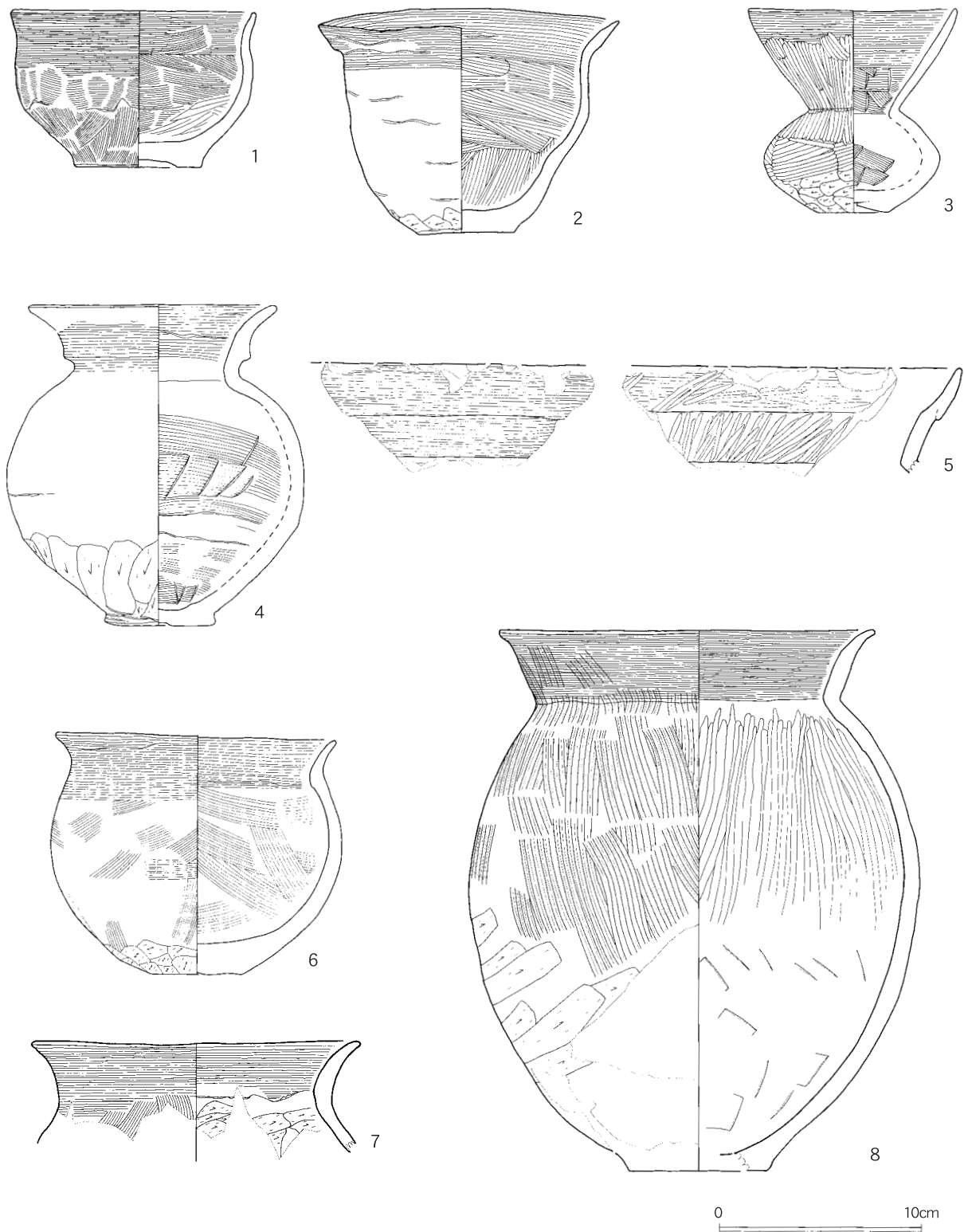


層	土色	土性	備考
1	暗褐 (7.5YR3/3)	シルト	地山小アロカ、炭化物粒、焼土小アロカを多く含む
2	黒褐 (7.5YR3/2)	シルト	地山小アロカ・焼土粒を含む
3	暗褐 (7.5YR3/4)	シルト	地山アロカをきわめて多く含む
4	褐 (10YR4/6)	シルト	暗褐色土を少量含む 住居掘り方埋土

貯蔵穴

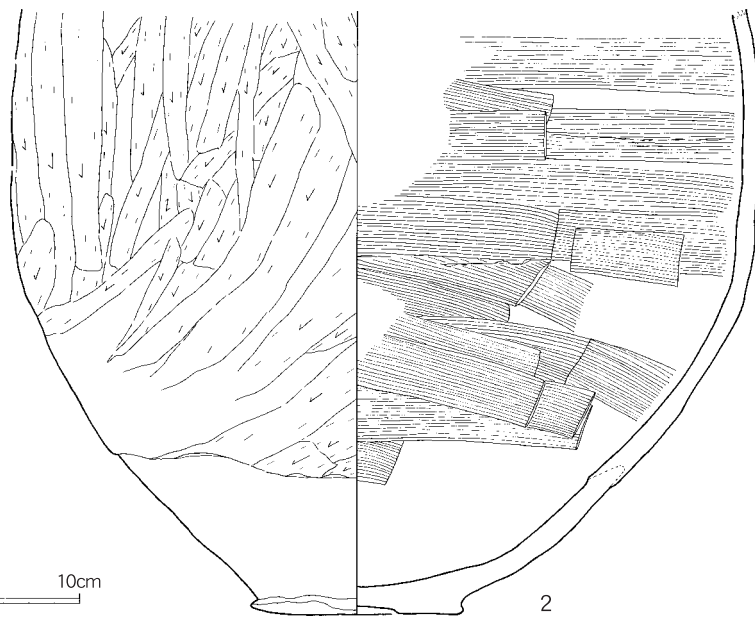
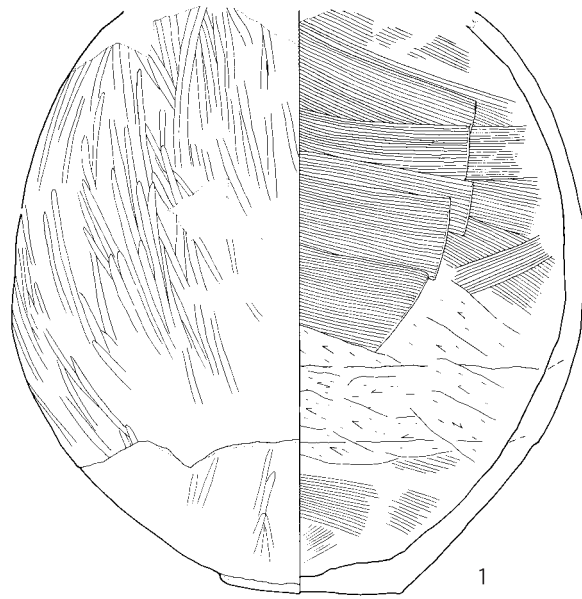
層	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山土、炭化物を含む
2	褐 (10YR4/4)	シルト	

第8図 S I 2 竪穴住居跡



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	SI2	貯蔵穴	土師器・鉢	(口)ヨサデ(体)ナデ(底)ナデ	(口)ヨサデ(体)ナデ→シキ	12.2	6.4	7.8	ほぼ完形		10-2	49
2	1	SI2	貯蔵穴	土師器・鉢	(口)ヨサデ(体)ナデ→スリ	(口)ヨサデ(体)ナデ	14.0	4.4	11.9	完形		10-4	50
3	1	SI2	貯蔵穴	土師器・小型壺	(口)ヨサデ(体)スリ→シキ(底)スリ	(口)ナデ→ヨサデ(体)ヘサデ	10.2	3.5	10.0	完形		10-1	47
4	1	SI2	貯蔵穴	土師器・壺	(口)ヨサデ(体)ナデ→スリ	(口)ヨサデ(体)ヘサデ	(12.3)	5.5	15.9	ほぼ完形		10-5	42
5	1	SI2	確認面	土師器・壺	(口)ヨサデ	(口)ヨサデ→シキ	-	-	(5.3)	口縁のみ			125
6	1	SI2	貯蔵穴	土師器・甕	(口)ヨサデ(体)ナデ→スリ	(口)ヨサデ(体)ヘサデ	14.8	4.8	11.1	ほぼ完形		10-3	149
7	1	SI2	堆積土	土師器・甕	(口)ヨサデ→(頸)ナデ	(口)ヨサデ(頸)スリ	(16.4)	-	(5.9)	一部			111
8	1	SI2	貯蔵穴	土師器・甕	(体)スリ・ナメ→(口)ヨサデ	(口)ヨサデ(体下)ヘサデ(体上)シキ	18.3	(6.8)	27.0	4/5		10-6	150

第9図 S12 竪穴住居跡出土遺物(1)



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	SI2	貯蔵穴	土師器・甕	{体}ノリ→シキ(底)不明	{体上}ノリ(体下)ノリ	-	7.1	(23.1)	一部			222
2	1	SI2	床	土師器・甕	{体・底}ノリ	{体}ノリ	-	8.5	(24.1)	一部	pot1 内面ノリ	11-1	221

第10図 S I 2 竪穴住居跡出土遺物 (2)

[貯蔵穴] 住居南壁際において1基検出した。平面形は長軸66cm、短軸54cmの楕円形で、深さは34cmである。断面形は逆台形である。

[出土遺物] 住居床面から土師器甕(第10図2)などが、貯蔵穴堆積土から土師器小型壺(第9図3)・壺(第9図4)・鉢(第9図1・2)・甕(第9図6・8、第10図1)などが出土している。住居堆積土から土師器甕(第9図7)などが、遺構確認面から土師器壺(第9図5)などが出土している。床面出土の甕(第10図1)は、内面全体及び外面下部に、火ハジケ状の小さな窪みが多く観察される。

特に内面下部～底面は本来の器表面がほとんど消滅しているほどに顕著である。

S I 3 竪穴住居跡（第 11～12 図）

[検出] 調査区中央部で検出した。検出面は地山面である。

[重複] S K 7 土坑と重複し、これより新しい。

[平面形・規模] 住居西部が攪乱・削平により消失しており平面形は不明だが、方形を基調とするものとみられる。規模は南北 6.4 m、東西 5.4 m 以上である。

[方向] 東辺を基準とすると、北西方向（N - 36° - W）である。

[堆積土] 1 層認められる。住居廃絶後の自然堆積土と思われる。

[床面] 住居掘り方埋土を床としており、ほぼ平坦である。支柱穴及びカマドに囲まれた床面中央部が特に硬くしまっている。

[壁] ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、もっとも残存状態の良い南東隅部で床面から 10cm である。

[支柱穴] 住居対角線上の床面から 4 個のピットを検出した（P 1～4）。配置から支柱穴と考えられる。掘り方の平面形は長軸 25～36cm、短軸 21～27cm の不整楕円形である。柱穴の深さは 40～60cm で、P 3 から径 15cm の柱痕跡を確認した。

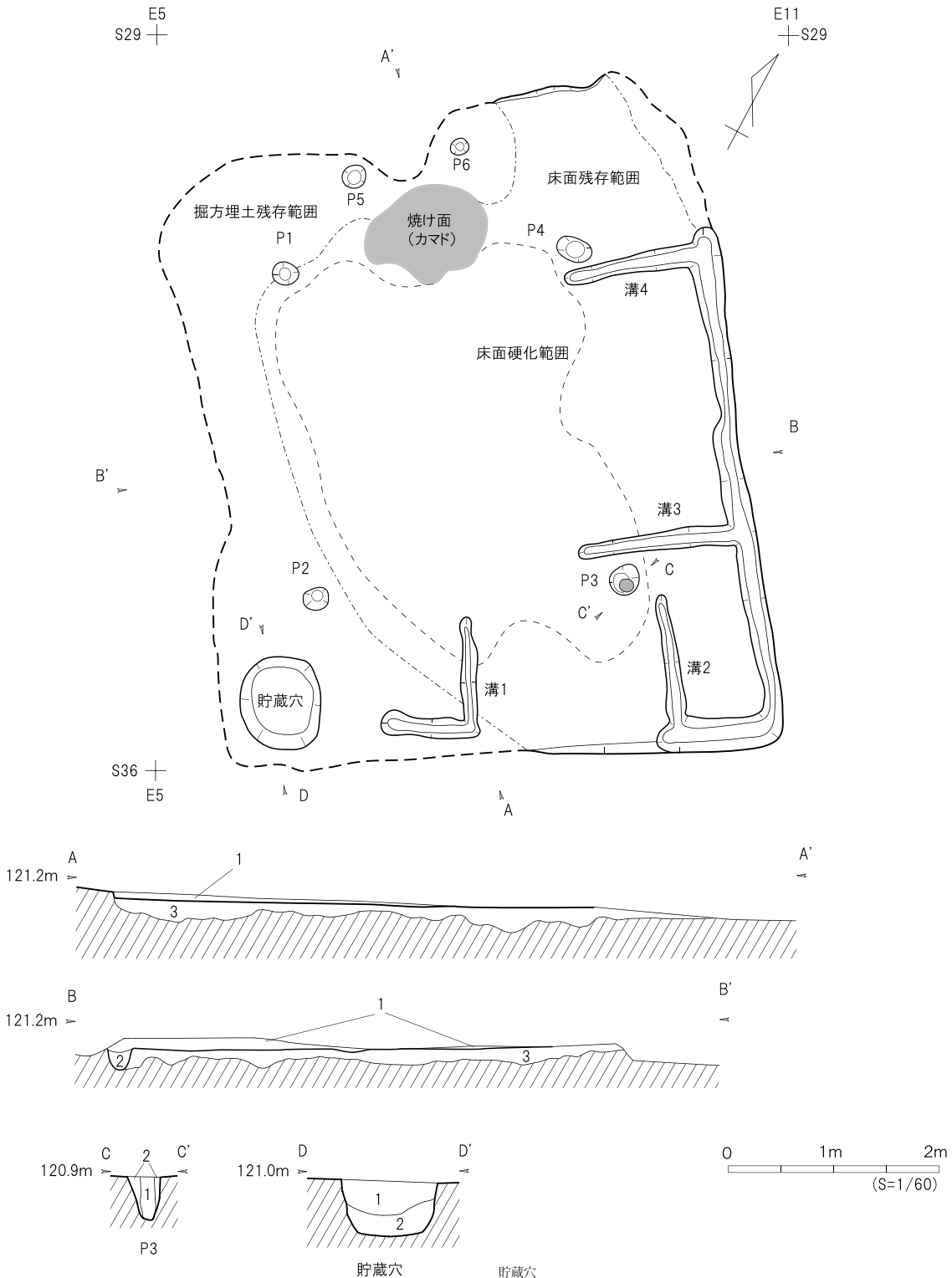
[周溝] 東辺から住居南東隅部にかけて認められる。幅 12～25cm、深さ 20～25cm で、断面形は U 字状である。住居掘り方埋土を施し、床を構築した後に周溝を設けている。

[カマド] 住居北壁際において床面が火熱を受けて赤変した部分を検出した。焼け面の大きさは東西方向に 120cm、南北方向に 96cm の不整形である。位置的にカマド燃焼部の底面と考えられる。この焼け面の北の住居壁際から 2 個のピット（P 5・6）が検出された。径 18～24cm の円形で、位置的にカマドに伴うものと思われる。

[貯蔵穴] 住居南壁際において 1 基検出した。平面形は長軸 90cm、短軸 80cm の隅丸長方形で、深さは 50cm である。断面形は逆台形である。

[その他] 床面において、周溝から直行する溝を 4 条（溝 1～4）検出した。長さ 120～160cm、幅 10～25cm、深さ約 20cm で、断面形は U 字状である。溝 1 を除いて周溝と接する。周溝との切り合いは認められず、堆積土も同様であるため、これらは同時存在していたものと考えられる。溝 2・3 は P 3 付近まで、溝 4 は P 4 付近までのびている。なお、溝 1 は周溝と接していないが、南端で西側に直角に折れる。

[出土遺物] 住居床面から土師器坏（第 12 図 1）・高坏・壺・小型壺・甕などが、貯蔵穴堆積土から土師器坏・高坏・壺・甕などが出土している。住居堆積土から土師器坏・高坏・壺・甕・甕（第 12 図 2）などが、遺構確認面から土師器坏・高坏・壺などが出土している。いずれの位置からの遺物も小破片が大半である。住居堆積土出土の甕は、内面に粘土積痕が残る扁平な球胴を呈するものと思われ、斜め上向きに径 6 mm の穿孔が施されている。穿孔は焼成前に施されており、孔の内面に、器面に対して並行に砂粒が動いた痕跡が観察されることから、穿孔は孔の径より細い工具を用い、最終的に孔内面に沿ってなでつけるように整えたことがわかる。穿孔の内面に摩滅は認められない。穿孔部の周囲が、内外とも焼成後にわずかに剥離している。この剥離は、穿孔時のささくれを外した痕跡、あるいは使用時の竹管等の挿入によりついた傷など、複数の可能性が考えられる。



層	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒を含む
2	暗褐 (10YR3/3)	シルト	地山小アロクを多く含む 周溝内堆積土
3	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山小アロクを多く含む 住居掘り方埋土

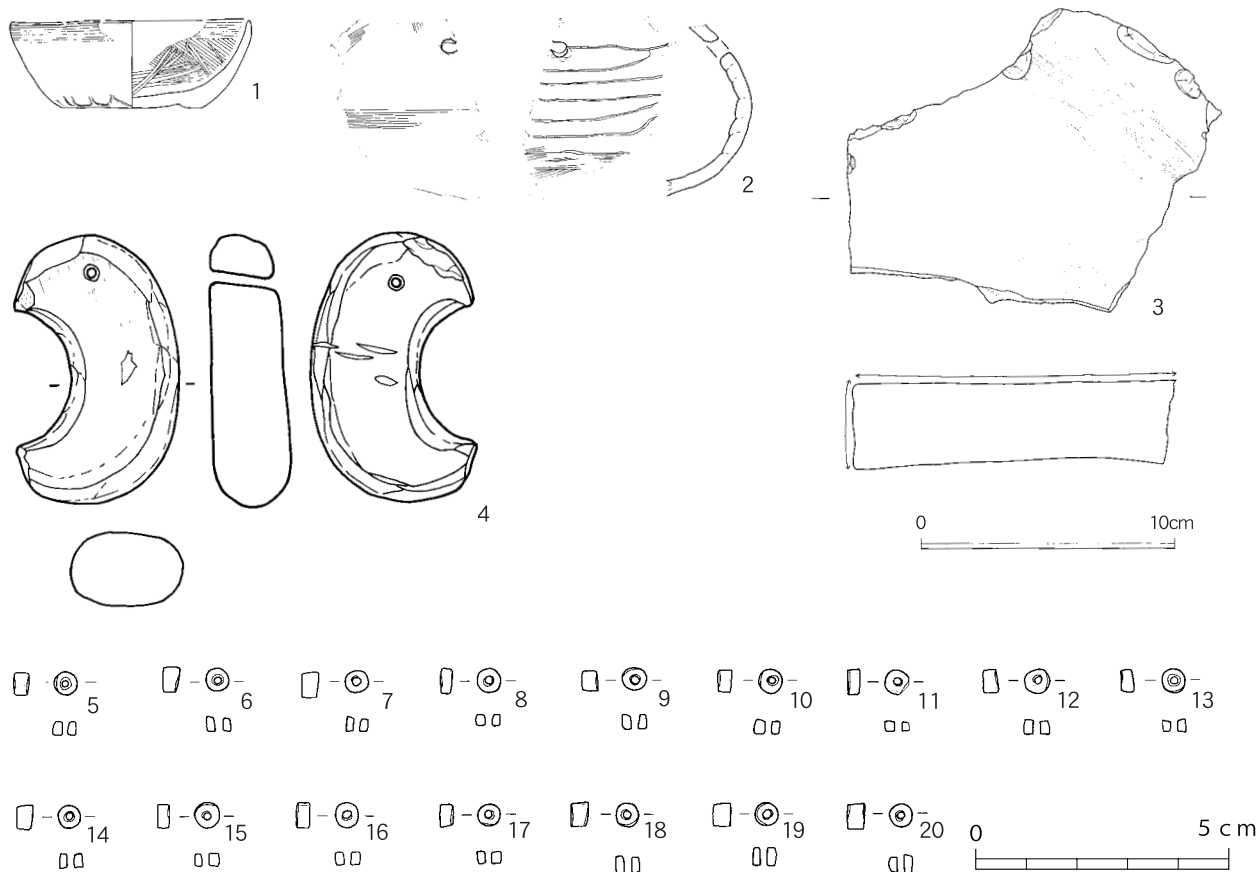
貯蔵穴

層	土色	土性	備考
1	暗褐 (10YR3/3)	シルト	地山アロクを多く含む
2	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山小アロクを少量含む

主柱穴 (P3)

層	土色	土性	備考
1	暗褐 (7.5YR3/3)	シルト	柱痕跡
2	褐 (10YR4/6)	シルト	掘り方埋土

第 11 図 S I 3 竪穴住居跡



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	SI3	床面	土師器・坏	(口) 卍字 (体) 卍字 (底) 卍字	(口) 卍字 (体) 卍字	9.5	5.6	3.5	ほぼ完形		11-2	131
2	1	SI3	堆積土	土師器・甌	(体) 卍字	(体) 卍字	-	-	(6.7)	一部	穿孔径 6 mm	11-3	151
3	1	SI3	確認面	砥石	長 11.9 幅 14.8 厚 3.4 重 800.0g 石材安山岩 二面使用							18-20	206
4	1	SI3	床面	勾玉	長 5.4 幅 2.4 厚 1.5 孔径 0.2 重 38.8g 石材滑石							18-2	154
5	1	SI3	床	白玉	最大径 4.8 最大厚 2.9 孔径 1.3							18-4	229
6	1	SI3	床	白玉	最大径 4.9 最大厚 3.3 孔径 1.4							18-5	230
7	1	SI3	床	白玉	最大径 4.9 最大厚 3.1 孔径 1.4							18-6	231
8	1	SI3	床	白玉	最大径 4.9 最大厚 2.1 孔径 1.5							18-7	232
9	1	SI3	床	白玉	最大径 5.0 最大厚 3.1 孔径 1.5							18-8	233
10	1	SI3	床	白玉	最大径 5.1 最大厚 2.9 孔径 1.4							18-9	234
11	1	SI3	床	白玉	最大径 5.0 最大厚 2.2 孔径 1.4							18-10	235
12	1	SI3	床	白玉	最大径 5.2 最大厚 3.0 孔径 1.5							18-11	236
13	1	SI3	床	白玉	最大径 5.0 最大厚 2.7 孔径 1.5							18-12	237
14	1	SI3	床	白玉	最大径 4.9 最大厚 3.1 孔径 1.2							18-13	238
15	1	SI3	床	白玉	最大径 5.2 最大厚 2.6 孔径 1.2							18-14	239
16	1	SI3	床	白玉	最大径 5.1 最大厚 2.8 孔径 1.7							18-15	240
17	1	SI3	床	白玉	最大径 4.8 最大厚 3.6 孔径 1.1							18-16	241
18	1	SI3	床	白玉	最大径 5.0 最大厚 2.5 孔径 1.3							18-17	242
19	1	SI3	床	白玉	最大径 4.9 最大厚 3.4 孔径 1.3							18-18	243
20	1	SI3	床	白玉	最大径 5.0 最大厚 3.8 孔径 1.4							18-19	244

第 12 図 S I 3 竪穴住居跡出土遺物

土器以外の出土遺物として、住居床面から勾玉 1 点 (第 12 図 4)・白玉 71 点 (第 12 図 5～20) が、遺構確認面から砥石 (第 12 図 3) が出土している。床面出土の勾玉及び白玉は住居南東部に集中的に分布しており、白玉は数点つながった状態で出土している。

S I 4 竪穴住居跡 (第 13～16 図)

[検出] 調査区中央部で検出した。検出面は地山面である。

[平面形・規模] 平面形は長方形で、南北方向が長辺となる。規模は南北 4.8 m、東西 3.9 m である。

[方向] 東辺を基準とすると、北西方向 (N - 33° - W) である。

[堆積土] 4層に細分される。全て住居廃絶後の自然堆積土と思われる。

[床面] 住居掘り方埋土を床としており、ほぼ平坦である。床面中央部には黄褐色ロームによる貼床が施されており、硬くしまっている。

[壁] ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、もっとも残存状態の良い南辺中央部で床面から 20cm である。

[支柱穴] 検出されなかった。

[周溝] 北辺及び南東隅部を除いて断続的に認められる。幅 10 ~ 15cm、深さ約 20cm で、断面形は U 字状である。

[貯蔵穴] 住居南東隅部において 1 基検出した。平面形は長軸 80cm、短軸 65cm の楕円形で、深さは 30cm である。断面形は逆台形である。

[出土遺物] 住居床面から土師器坏・高坏 (第 15 図 4 ~ 6) ・小型壺 (第 15 図 7・8) ・甕 (第 16 図 2) などが、床面直上から土師器高坏・甕などが、貯蔵穴堆積土から土師器坏 (第 14 図 1 ~ 3) ・高坏 (第 14 図 5 ~ 9 ・第 15 図 1) ・壺 (第 15 図 9・10) ・甕 (第 16 図 1) などが出土している。住居堆積土から土師器坏 (第 14 図 4) ・高坏 (第 15 図 2・3) ・小型壺 (第 15 図 11) ・甕などが、遺構確認面から土師器甕などが出土している。遺物は貯蔵穴及びその付近から集中的に出土している。

S I 5 竪穴住居跡 (第 17 ~ 20 図)

[検出] 調査区南部で検出した。検出面は地山面である。

[重複] S K 9 土坑と重複し、これより新しい。

[平面形・規模] 西部が調査区外となるため全体形は不明だが、方形を基調とするものとみられる。規模は南北 6.9 m、東西 3.4 m 以上である。

[方向] 東辺を基準とすると、北北西方向 (N - 29° - W) である。

[堆積土] 8層に細分される。全て住居廃絶後の自然堆積土と思われる。

[床面] 住居掘り方埋土を床としており、ほぼ平坦である。床面中央部には黄褐色ロームによる貼床が施されており、硬くしまっている。

[壁] ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、もっとも残存状態の良い南辺で床面から 50cm である。

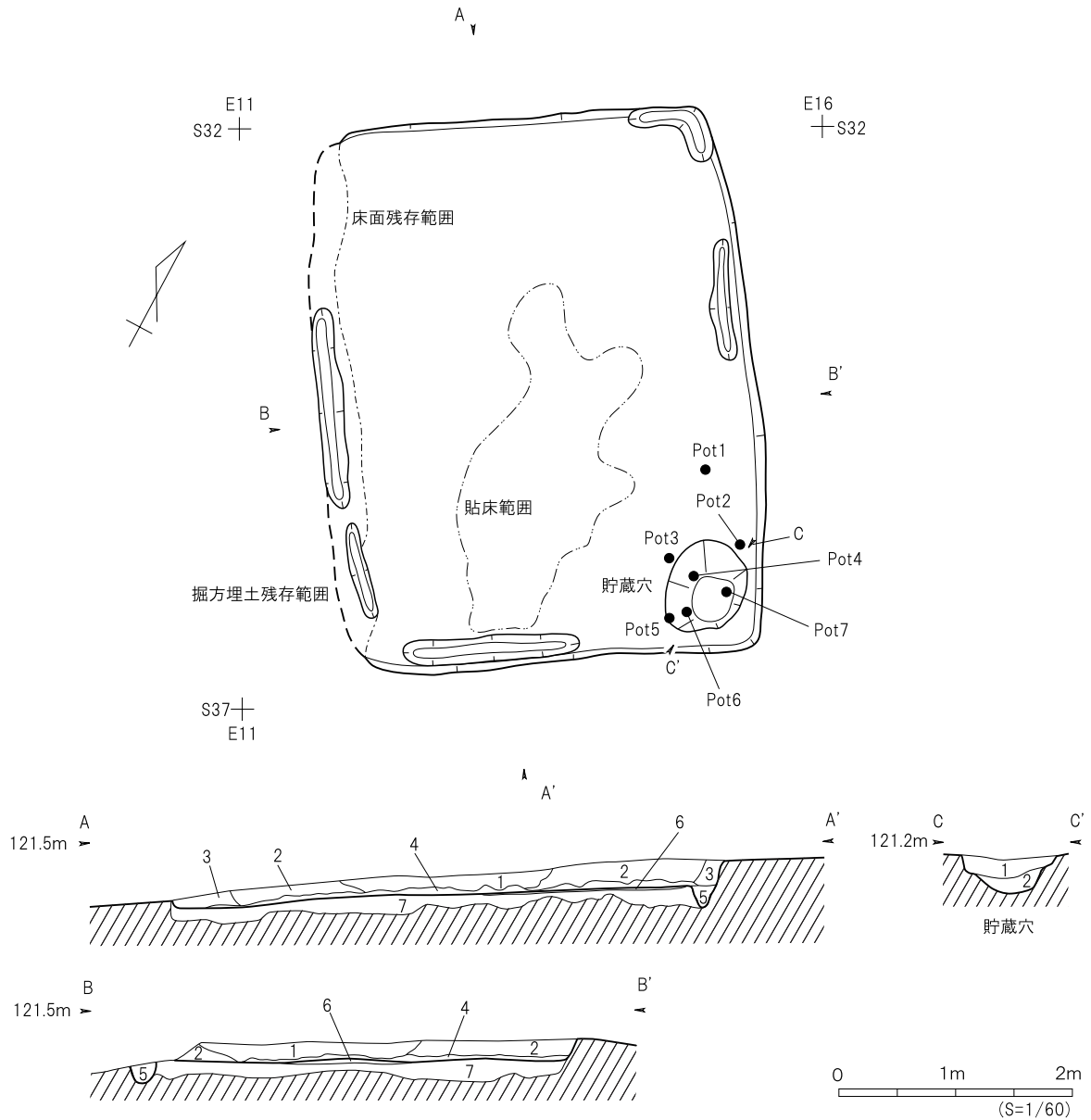
[支柱穴] 住居対角線上の床面から 2 個のピットを検出した (P 1・2)。配置から支柱穴と考えられる。掘り方の平面形は長軸 27 ~ 36cm、短軸 20 ~ 26cm の楕円形または長方形である。柱穴の深さは 55 ~ 85cm で、P 1 から径 18cm の柱痕跡を確認した。

[炉] 住居中央部やや東寄りにおいて床面が火熱を受けて赤変した部分を 3ヶ所検出した。これらの焼け面の平面形は径 12 ~ 21cm の不整形円で、炉と考えられる。

[周溝] 北東隅部を除いて認められる。幅 14 ~ 30cm、深さ約 14 ~ 20cm で、断面形は U 字状である。

[貯蔵穴] 住居南東隅部において 1 基検出した。平面形は径 80cm の不整形円で、深さは 40cm である。断面形は逆台形である。

[その他] 床面において、周溝から直行する溝を 2 条 (溝 1・2) 検出した。長さ 140 ~ 190cm、幅 20 ~ 27cm、深さ約 5 cm で、断面形は U 字状である。周溝との切り合いは認められず、堆積土も



層	土色	土性	備考
1	極暗褐 (7.5YR2/3)	シルト	地山土を含む
2	黒褐 (7.5YR3/2)	シルト	地山土を含む
3	黒褐 (7.5YR3/2)	シルト	地山土を多く含む
4	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山土を非常に多く含む
5	褐 (10YR4/6)	シルト	地山土を非常に多く含む 周溝内堆積土

層	土色	土性	備考
6	暗褐 (10YR3/4)	シルト	貼床土
7	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山ブロッカを多く含む 住居掘り方埋土

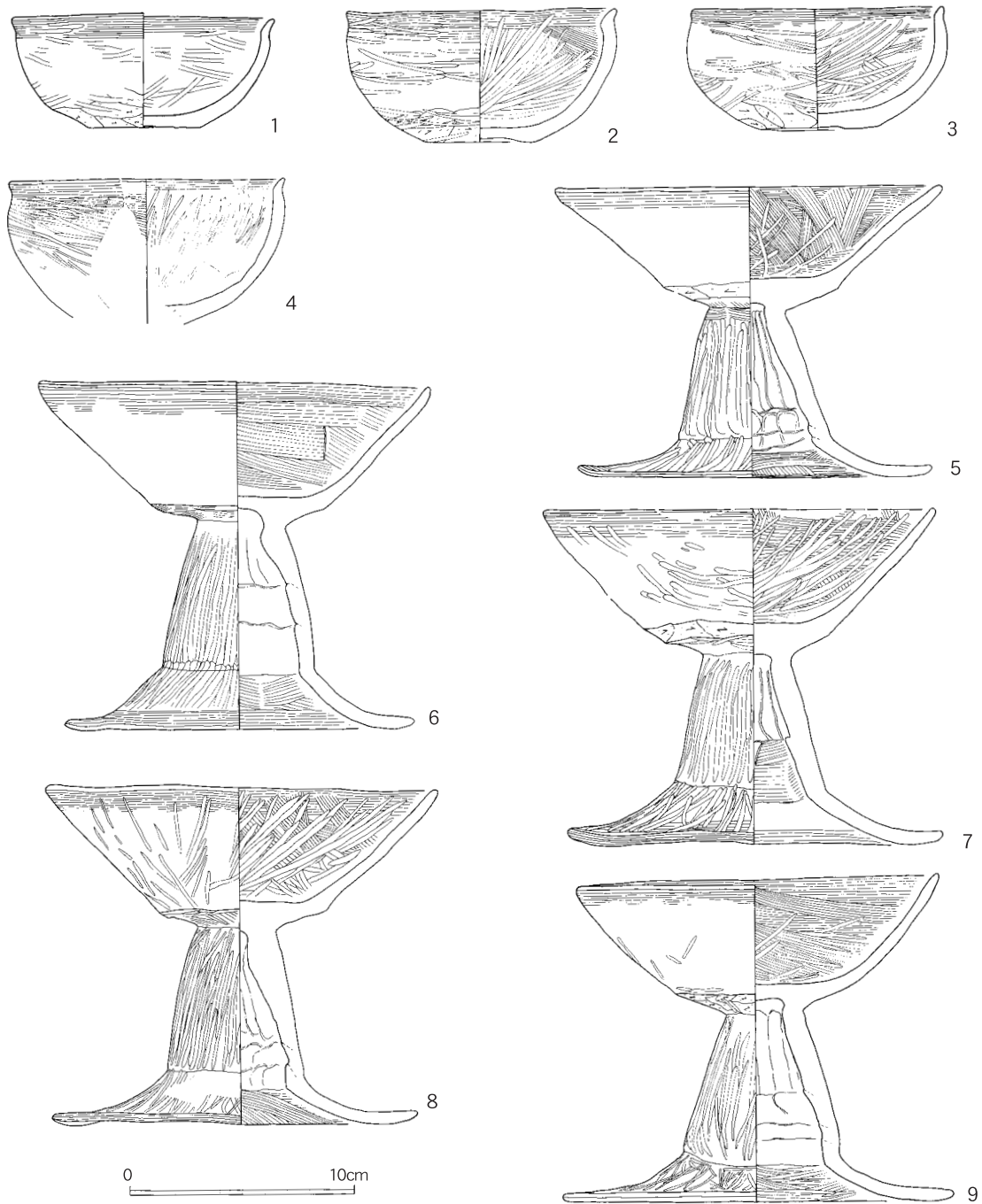
貯蔵穴

層	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒、焼土ブロッカを含む
2	極暗褐 (7.5YR2/3)	シルト	炭化物を多く、地山粒を含む

第13図 S14 竪穴住居跡

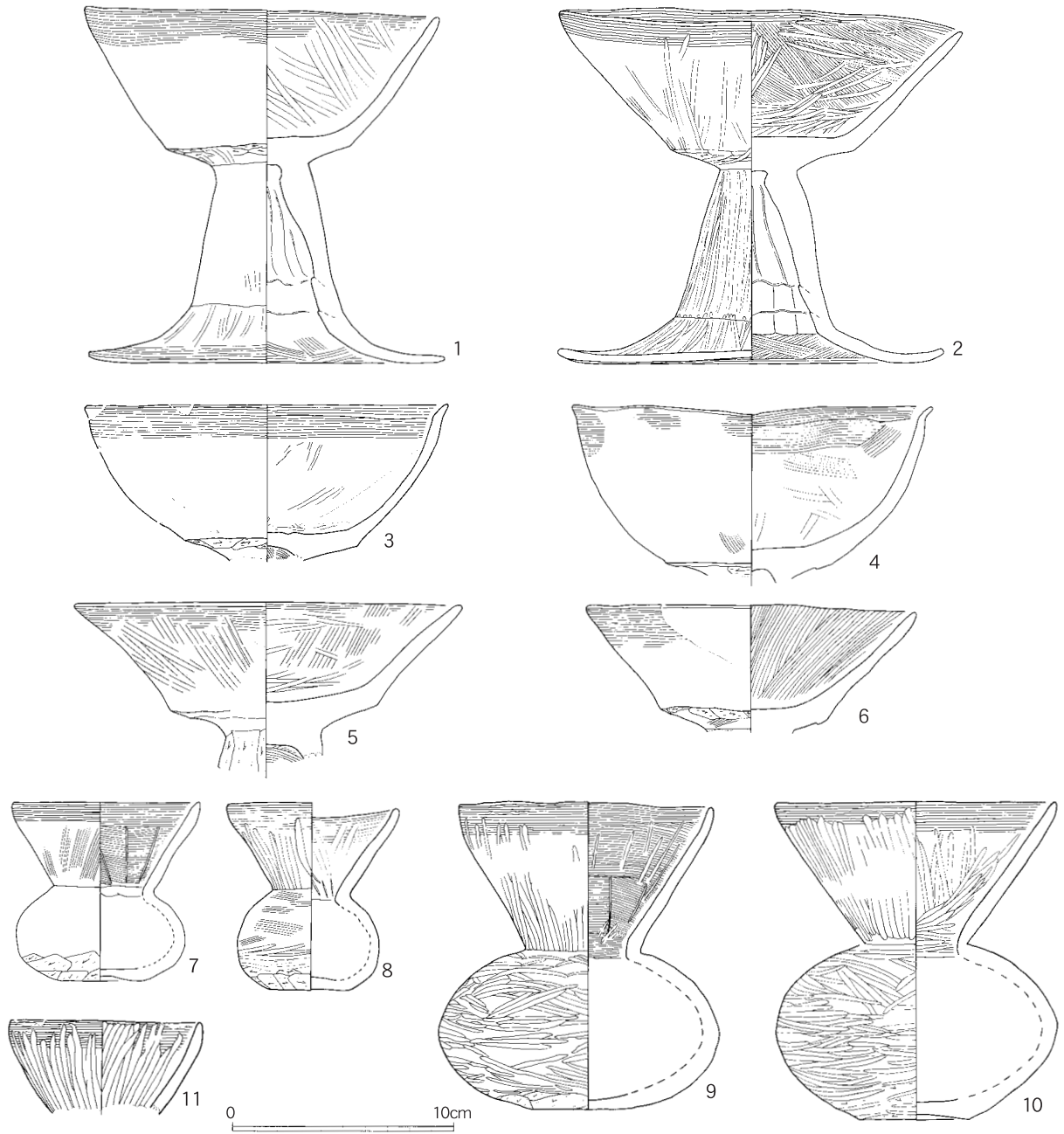
同様であるため、これらは同時存在していたものと考えられる。溝1はP1付近まで、溝2はP2付近までのびている。

[出土遺物] 住居床面から土師器高坏・小型壺・壺(第19図1)・甕などが、床面直上から土師器高坏・甕などが、貯蔵穴堆積土から土師器高坏・壺・甕などが出土している。住居掘り方埋土から土師器高坏・壺・甕などが、周溝堆積土から土師器坏が、住居堆積土から土師器坏・高坏(第18図1・3~6・8)・小型壺・壺・鉢(第18図9)・甑(第18図10)・甕(第19図2~4)などが、遺構確認面



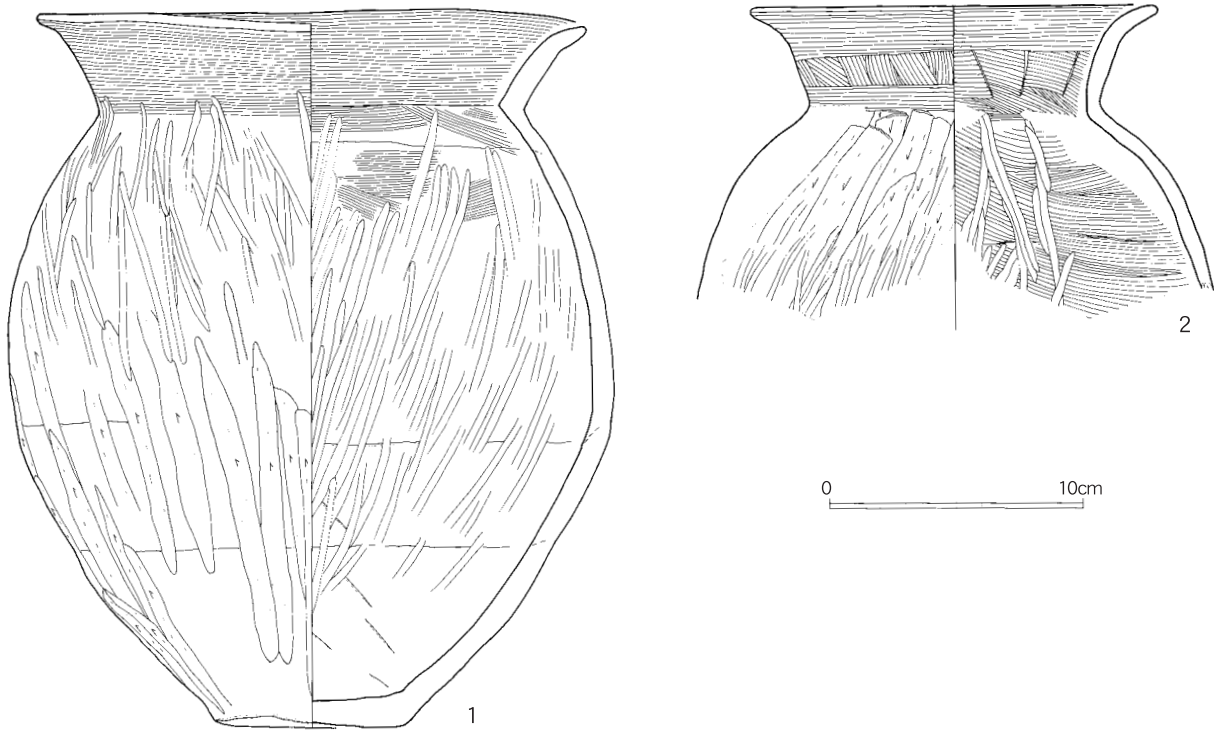
No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	SI4	貯蔵穴	土師器・坏	(口)ヨコテ(体下・底)ケズリ→(口・体)ミギキ	(口)ヨコテ(体)ミギキ	11.8	5.0	5.1	完形	内面ツケ	11-7	68
2	1	SI4	貯蔵穴	土師器・坏	(口)ヨコテ→(体)テ→(体下・底)ケズリ→(口・底)ミギキ	(口)ヨコテ(体)テ→(口・底)ミギキ	12.1	4.9	5.9	ほぼ完形		11-5	60
3	1	SI4	貯蔵穴	土師器・坏	(口)ヨコテ(体)テ・ケズリ→(口・体)アミシギキ(底)テ→ケズリ	(口)ヨコテ(体)テ→ミギキ	11.3	5.3	5.4	ほぼ完形		11-4	43
4	1	SI4	堆積土	土師器・坏	(口)ヨコテ(体)ケズリ→(口・体)ミギキ	(口)ヨコテ→(体)ミギキ	(12.4)	-	(6.5)	1/2	内外面ツケ	11-6	62
5	1	SI4	貯蔵穴	土師器・高坏	(口)ヨコテ(环下)ケズリ(脚)ヨコテ→ミギキ	(口)ヨコテ(环)アミテ→ミギキ(脚)アミテ→ヨコテ	(17.2)	15.8	13.0	3/4		12-1	65
6	1	SI4	貯蔵穴	土師器・高坏	(口)ヨコテ(体下)テ(脚)ヨコテ→ミギキ	(口)ヨコテ(环)アミテ(脚)テ→ヨコテ	17.6	15.7	15.4	ほぼ完形		12-2	81
7	1	SI4	貯蔵穴	土師器・高坏	(口)ヨコテ(环下)ケズリ→(口・环下)ミギキ(脚)ヨコテ→ミギキ	(口)ヨコテ(环)アミテ(口・底)ミギキ(脚)テ・ヨコテ	(17.5)	16.7	15.0	3/4		12-5	85
8	1	SI4	貯蔵穴	土師器・高坏	(口)ヨコテ(环下)テ(口・环下)ミギキ(裾)ヨコテ(脚)ミギキ	(口)ヨコテ→(环)テ→ミギキ(脚)テ→ヨコテ→テ	17.5	16.3	15.0	3/4		13-1	88
9	1	SI4	貯蔵穴	土師器・高坏	(口)ヨコテ(环下)ケズリ→(体)ミギキ(脚)ヨコテ・ミギキ		16.2	17.4	14.4	ほぼ完形		12-6	86

第14図 SI4 竖穴住居跡出土遺物(1)



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	SI4	貯蔵穴	土師器・高环	(口)ヨサテ(环下)スリ→ミギキ(脚)ミギキ(裾端)ヨサテ	(口)ヨサテ(口・底)ミギキ(裾)ヨサテ→サテ	16.2	16.2	16.0	完形		12-3	82
2	1	SI4	堆積土	土師器・高环	(口)ヨサテ(裾端)ヨサテ(口・裾)ミギキ	(口)ヨサテ→(口・底)サテ→ミギキ	18.3	17.6	16.0	5/6	内面ミギキ	12-4	84
3	1	SI4	堆積土	土師器・高环	(口)ヨサテ(环下)→スリ	(口)ヨサテ(环)サテ?→ミギキ	16.4	-	(7.0)	环部1/2	内面ミギキ		77
4	1	SI4	床面	土師器・高环	(口)ヨサテ(环)サテ(环下)スリ		16.3	-	(8.0)	环部完形	pot5		79
5	1	SI4	床面	土師器・高环	(口)ヨサテ→(口・环)サテ(脚)スリ	(口)ヨサテ→(口・底)サテ→ミギキ	17.5	-	(8.0)	一部			80
6	1	SI4	床面	土師器・高环	(口)ヨサテ(环下)サテ→スリ	サテ	15.0	-	(6.0)	环部完形	内面ミギキ		76
7	1	SI4	床面	土師器・小型壺	(口)サテ・ヨサテ(体)サテ(体下)スリ(底)サテ	(口)サテ→ヨサテ(体)サテ	8.5	3.6	8.6	完形		13-3	74
8	1	SI4	床面	土師器・小型壺	(口)ヨサテ(体下・底)スリ・サテ→(口・体)ミギキ	(口)ヨサテ→ミギキ	7.8	3.6	8.5	完形	pot2	13-2	69
9	1	SI4	貯蔵穴	土師器・壺	(口)ヨサテ(体)サテ→(体下・底)スリ(口・底)ミギキ	(口)サテ→ヨサテ→ミギキ	11.6	丸底	13.9	ほぼ完形		13-4	54
10	1	SI4	貯蔵穴	土師器・壺	(口)ヨサテ(体)サテ(体下・底)スリ(口・底)ミギキ	(口)ヨサテ(体)サテ→ミギキ	12.8	4.9	14.4	3/4	pot4	13-5	56
11	1	SI4	堆積土	土師器・小型壺	(口)ヨサテ→ミギキ	(口)ヨサテ→ミギキ	8.6	-	(4.2)	一部			73

第15図 SI4 竪穴住居跡出土遺物(2)



No.	区	遺構	層位	種類	調整		口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
					外面調整	内面調整							
1	1	SI4	貯蔵穴	土師器・甕	(口)ヨコテ(体)ズリ→(口・体)ミガキ(底)ズリ	(口)ヨコテ(体)ハナテ→ミガキ	21.8	7.6	28.4	完形	pot6	13-6	153
2	1	SI4	床	土師器・甕	(口)ナテ→ヨコテ(体)ズリ→ミガキ	(口)ハナテ→ヨコテ(体)ハナテ→ミガキ	(16.1)	-	(12.4)	一部	pot3		57

第 16 図 S I 4 竪穴住居跡出土遺物 (3)

から土師器高坏 (第 18 図 2・7) などが出土している。堆積土出土の高坏 (第 18 図 1) は、脚部に赤色の、坏部に白色の粘土を使用している。鉢は器高 8.1cm の小型品で、口縁部が二重になっており、全体に丹精な造りである。遺構確認面出土の高坏 (第 18 図 2) は、形状は他の高坏と同様だが、大きさが 1.5 倍ほどの大形品である。

土器以外の出土遺物として、住居床面から鉄滓が、床面直上から鉄鏝 (第 19 図 6) が、住居堆積土から石製模造品 (第 19 図 5) ・砥石 (第 20 図 1) が出土している。鉄滓は住居北部の床面から出土したもので、径 7 cm ほどの塊状である。床面直上出土の鉄鏝は身部の一部とみられる。堆積土出土の砥石は長 20cm 内外の不整形で、本来さらに大きなものが割れたものである。破断面の稜線が摩滅していることから、割れた後にも継続して使用されたものと考えられる。表裏両面が使用されているが、特に表面の使用痕跡が顕著で、割れる以前に砥面の中央部であったと考えられる部分はゆるく窪み、それ以外の部分のごくゆるい稜で区切られたいくつかの平面的な砥面となっている。

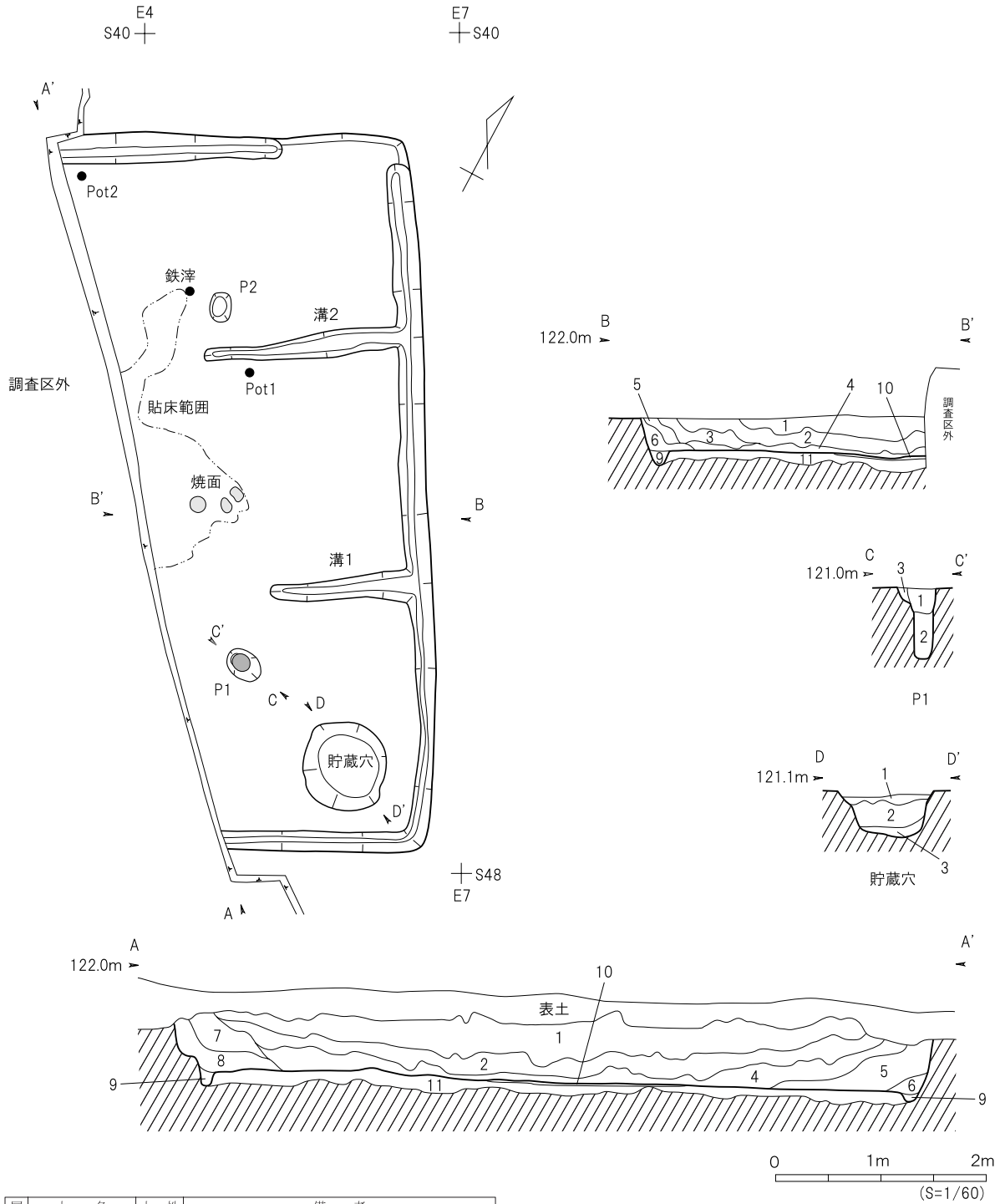
S I 6 竪穴住居跡 (第 21・22 図)

[検出] 調査区南部で検出した。検出面は地山遷移層上面である。

[平面形・規模] 削平ため全体形は不明である。規模は南北 3.7 m 以上、東西 2.7 m 以上である。

[方向] 東側主柱穴間の軸線を基準とすると、北北西方向 (N - 28° - W) である。

[堆積土] 2 層に細分される。全て住居廃絶後の自然堆積土と思われる。



層	土色	土性	備考
1	黒 (5YR1.7/1)	シルト	暗褐色土を斑状に含む
2	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山土、炭化物粒を含む
3	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒を含む
4	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒を含む
5	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む
6	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山アワックを含む
7	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山粒、焼土アワック、炭化物を含む
8	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山粒を多く、焼土・炭化物をごく少量含む
9	褐 (10YR4/4)	シルト	地山小アワックを多く含む 周溝堆積土
10	褐 (10YR4/6)	シルト	貼床土
11	褐 (10YR4/6)	シルト	暗褐色土を含む 住居掘り方埋土

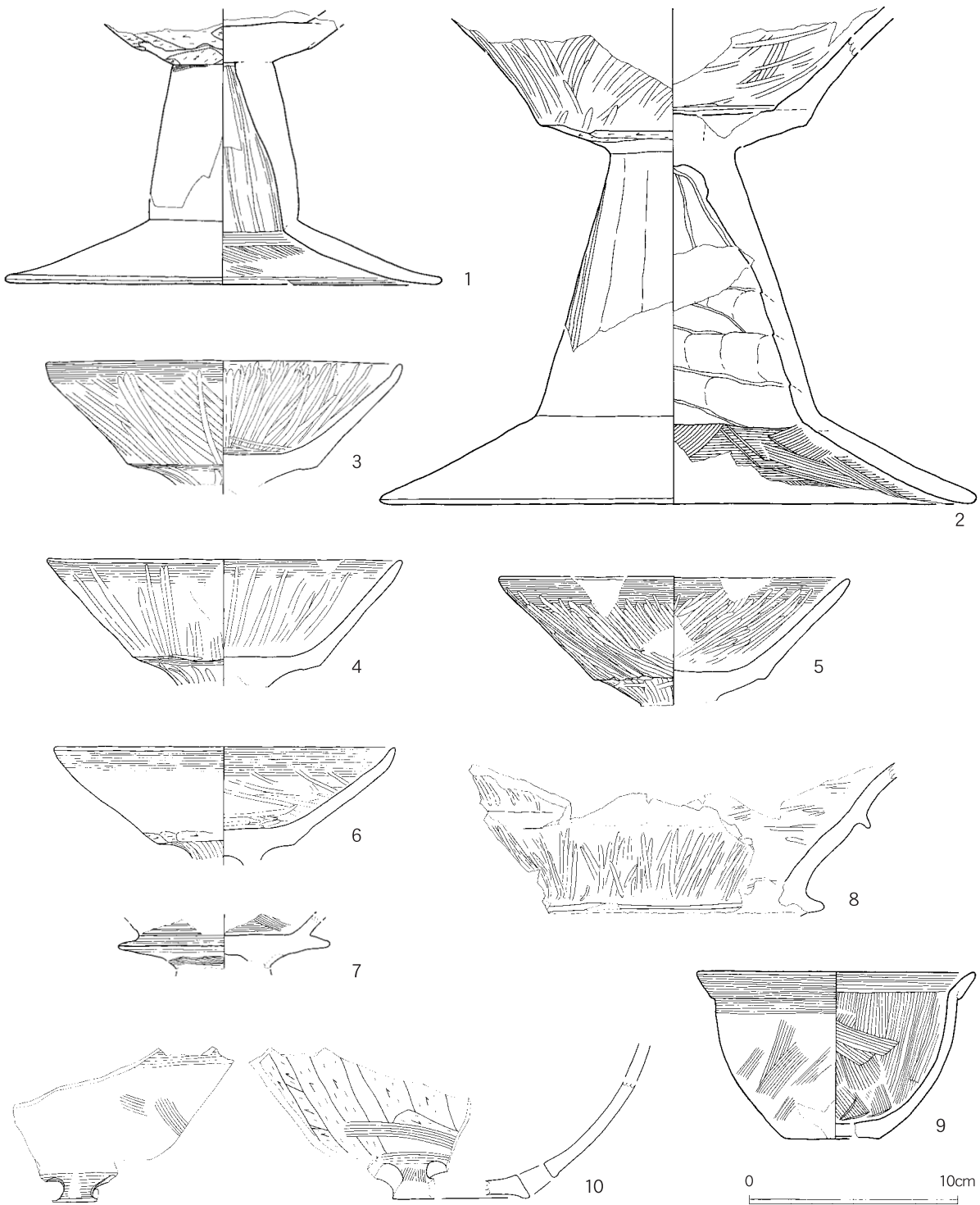
主柱穴 (P1)

層	土色	土性	備考
1	褐 (10YR4/4)	シルト	暗褐色土を多く含む 柱抜取痕跡
2	褐 (10YR4/6)	シルト	暗褐色土を多く含む 柱痕跡
3	褐 (10YR4/6)	シルト	暗褐色土を多く含む 掘り方埋土

貯蔵穴

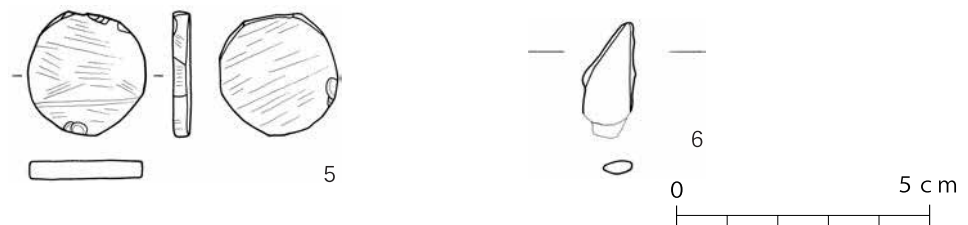
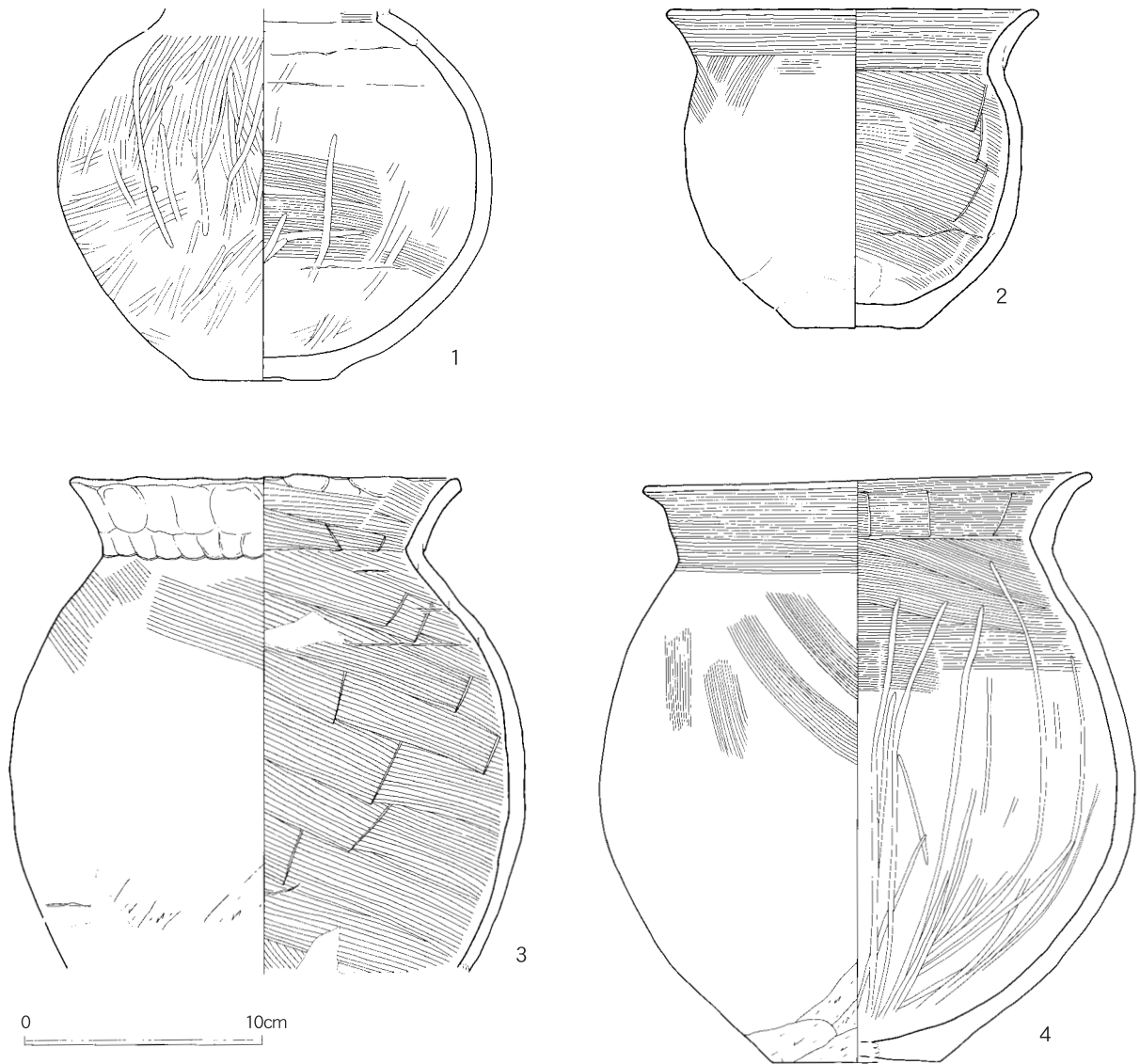
層	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒をごく少量含む
2	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒を含む
3	黒褐 (7.5YR3/2)	シルト	

第 17 図 S15 竪穴住居跡



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	SI5	堆積土	土師器・高环	(脚)ノリ(襷)ヨリ(环下)ヌリ	(环)シキ(襷)ノリ・ヨリ	-	(14.1)	(8.7)	脚部 1/3	脚と环の胎土色異なる		185
2	1	SI5	確認面	土師器・高环	(环)シキ(脚)シキ	(环)シキ(脚)ノリ	-	(19.3)	(16.0)	1/3			229
3	1	SI5	堆積土	土師器・高环	(口)ヨリ(环下)ノリ ヲメ→シキ	(口)ヨリ シキ	17.3	-	(6.5)	环部 2/3	内面シキ		52
4	1	SI5	堆積土	土師器・高环	(口)ヨリ(环下)ヌリ→(口・环下)シキ	(口)ヨリ ノリ→シキ	17.3	-	(6.1)	环部 3/4			98
5	1	SI5	堆積土	土師器・高环	(口)ヨリ→(口・环下)シキ	(口)ヨリ シキ	17.0	-	(6.2)	环部 1/2	内底面剥離		58
6	1	SI5	堆積土	土師器・高环	(口)ヨリ(环下)ヌリシキ	(口)ヨリ(口・环底)シキ	16.4	-	(5.4)	环部 5/6			227
7	1	SI5	確認面	土師器・高环	(环下)ノリ→ヨリ	(环下)ノリ→(底)シキ	-	-	(2.6)	一部			136
8	1	SI5	堆積土	土師器・高环	(环)シキ	(环)シキ	-	-	(7.3)	一部	突帯二条 内面シキ	14-1	184
9	1	SI5	堆積土	土師器・鉢	(口)ヨリ(体)ノリ(底)ヌリ	(口)ヨリ(体)ノリ	(13.5)	4.6	8.1	1/2	底部穿孔?	14-3	75
10	1	SI5	堆積土	土師器・甑	(体)ノリ(底)ヌリ	(体)ヌリ→ノリ	-	-	(7.4)	一部	多孔式	14-2	142

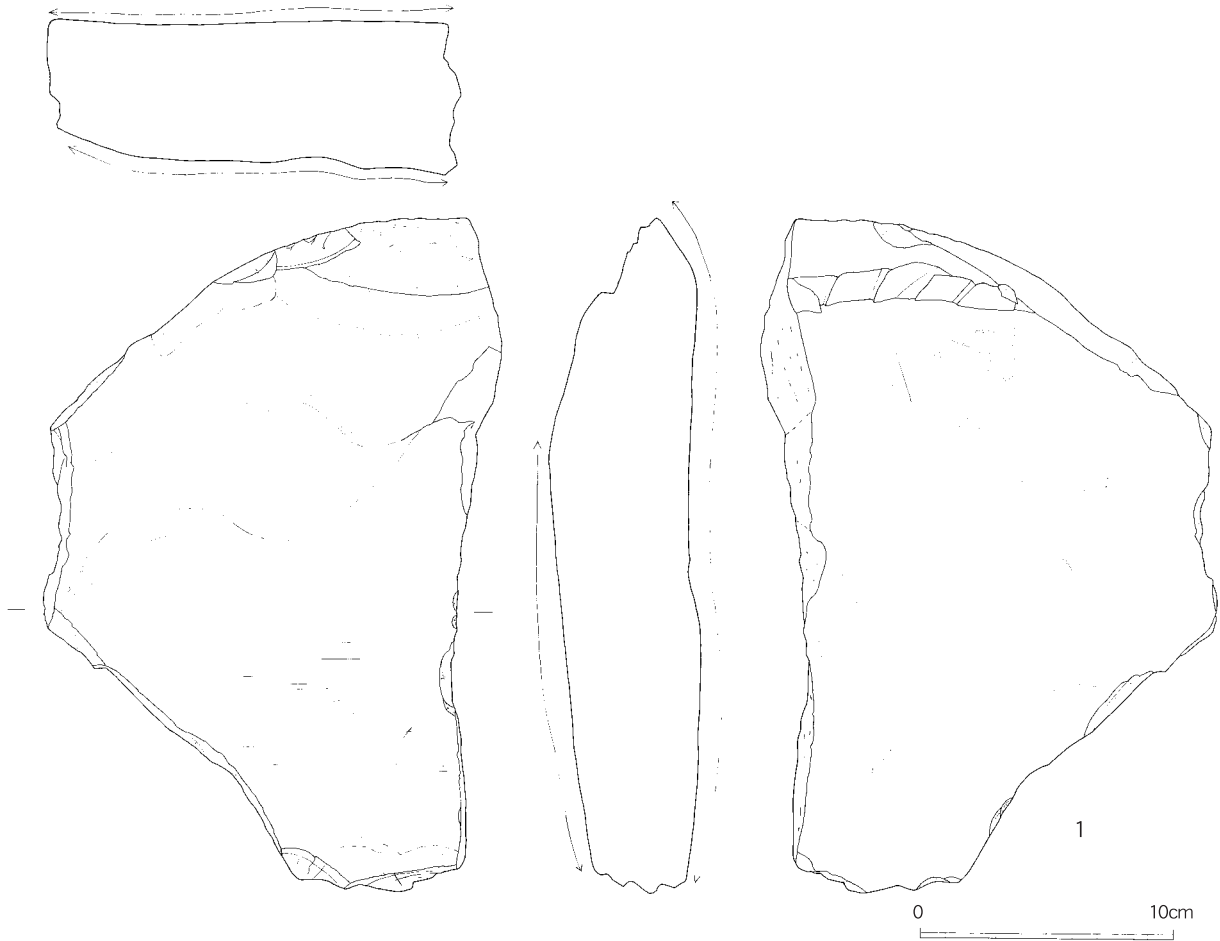
第 18 図 S I 5 豎穴住居跡出土遺物 (1)



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	SI5	床面	土師器・壺	(体) 辻キ(底) 欠リ	(体) 辻 → 辻キ	-	6.1	(15.6)	2/3	pot1 内面欠キ	14-4	51
2	1	SI5	堆積土	土師器・甕	(口) 辻キ(体) ヲツテ(底) 欠リ	(口) 辻キ(体) ヲツテ	15.7	5.3	13.5	2/3	外面に炭化物付着	14-5	96
3	1	SI5	堆積土	土師器・甕	(口) 辻キ(体) ヲツテ 欠リ	(口) 辻キ → ヲツテ(体) ヲツテ → 辻キ	18.8	7.0	24.5	3/4	外面炭化物付着	14-7	152
4	1	SI5	堆積土	土師器・甕	(口) 辻キ(体) 辻 → (体下) 欠リ	(口) 辻キ → ヲツテ(体) ヲツテ	16.2	-	(20.5)	一部	外面炭化物付着	14-6	141

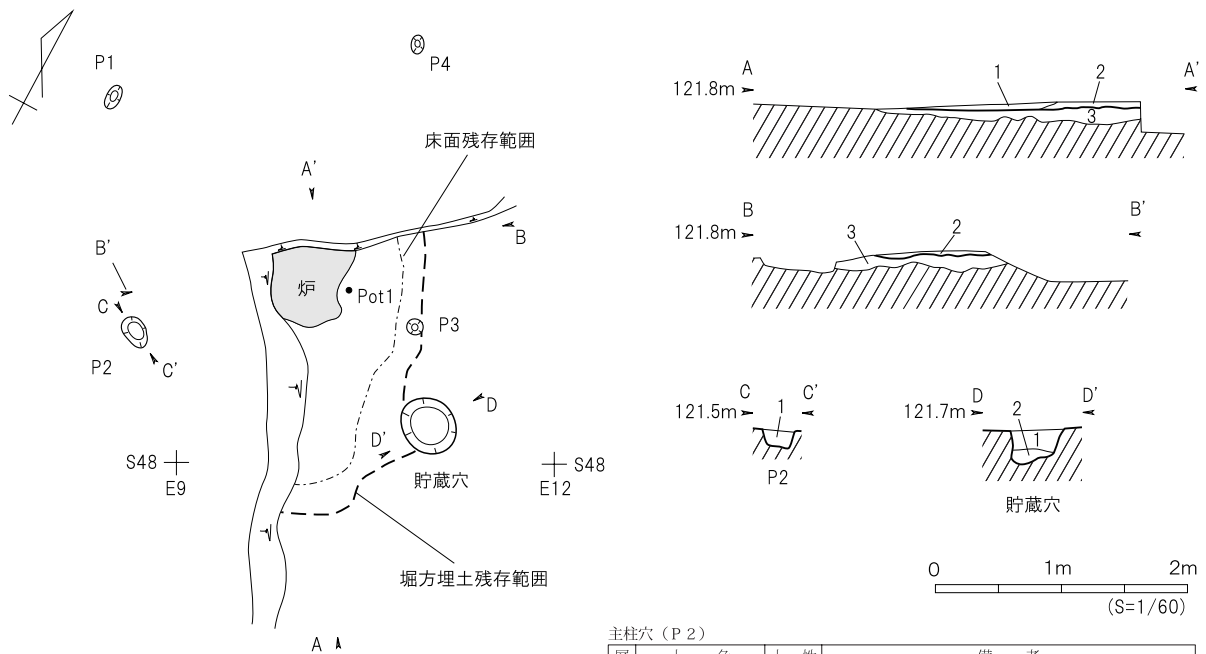
No	区	遺構	層位	種類	特徴	長	幅	厚	重	写真	登録
5	1	SI5	堆積土	石製模造品	円盤状 無孔(未成品?) 石材滑石	2.4	2.3	0.3	3.7	18-3	190
6	1	SI5	床面直上	鉄製品 鉄鏃	身部の一部?	(2.30)	(1.00)	(0.30)		18-22	220

第19図 SI5 竪穴住居跡出土遺物(2)



No	区	遺構	層位	種類	特徴	長	幅	厚	重	写真	登録
1	1	SI5	堆積土	砥石	二面使用 石材凝灰岩	26.4	18.2	6.1	3910	18-21	189

第 20 図 S I 5 竪穴住居跡出土遺物 (3)

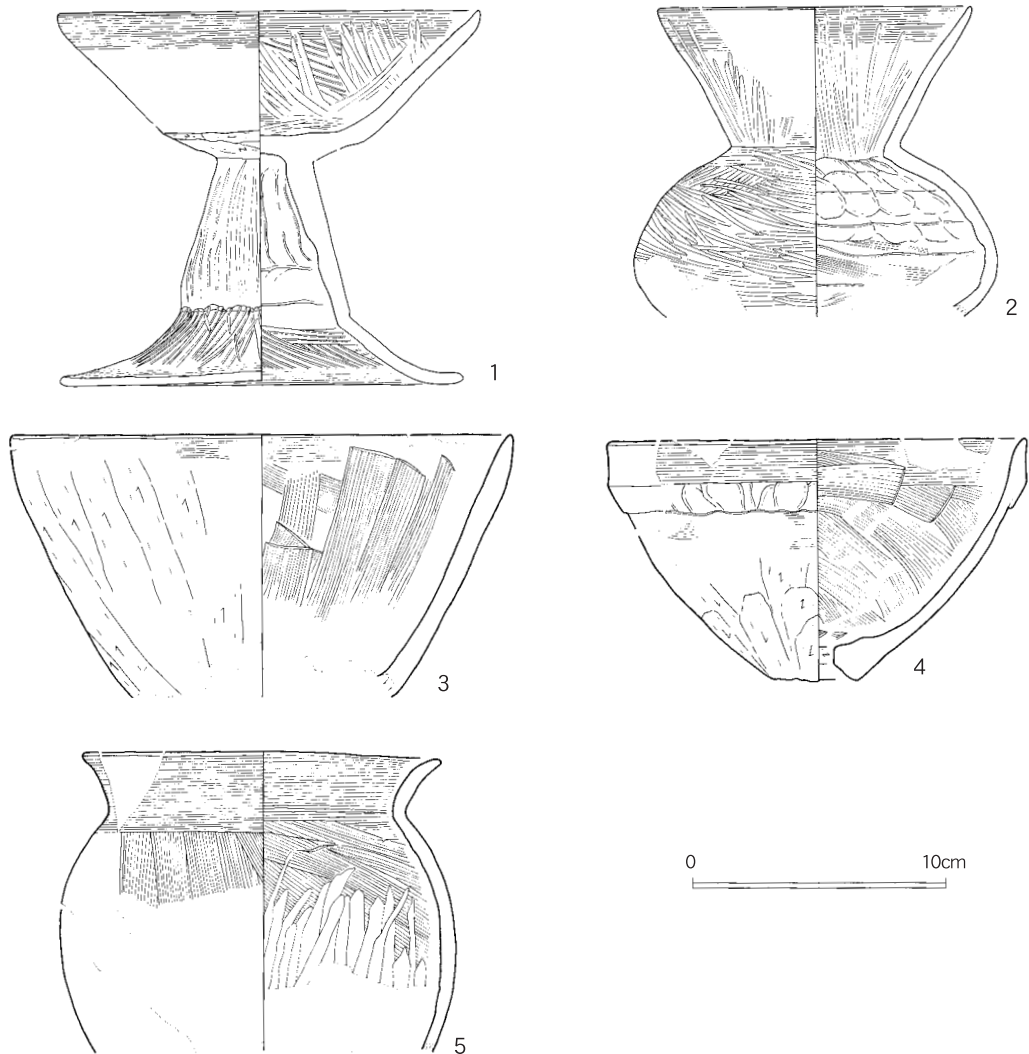


層	土色	土性	備考
1	暗褐 (10YR3/3)	シルト	地山粒を含む
2	暗褐 (7.5YR3/3)	シルト	焼土・炭化物粒を含む
3	にぶい黄褐 (10YR4/3)	シルト	暗褐色土を不均質に含む 住居掘り方埋土

主柱穴 (P2)			
層	土色	土性	備考
1	暗褐 (10YR3/3)	シルト	地山粒含む 掘り方埋土

貯蔵穴			
層	土色	土性	備考
1	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山粒を含む
2	暗褐 (10YR3/3)	シルト	地山粒をごく少量含む

第 21 図 S I 6 竪穴住居跡



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	SI6	貯蔵穴	土師器・高坏	(口)ヨサデ(环下)サデ→カスリ(柄)ハ ケメ→ヨサデ→(脚)ミガキ	(口)ヨサデ(环)ハメ・サデ→ミガキ(脚) サデ→ハメ→(裾)ヨサデ	(16.8)	(16.0)	14.8	2/3	pot2	15-1	53
2	1	SI6	床	土師器・垂	(口)ヨサデ(口・体)ミガキ	(口)ヨサデ→ミガキ(体下)サデ	12.4	-	(12.3)	一部	pot1 内面下部のツケ	15-2	89
3	1	SI6	床	土師器・鉢	(口)ヨサデ?(体)カスリ	(口・体)ハサデ	(19.8)	-	(10.4)	一部	pot1		225
4	1	SI6	確認面	土師器・甕	(口)サエ→ヨサデ(体)サデ→カスリ	(口・体)ハサデ	(15.8)	3.6	9.7	1/3	単孔式	15-3	63
5	1	SI6	貯蔵穴	土師器・甕	(口)ヨサデ(体)サデ	(口)ヨサデ(体)サデ→ミガキ	14.2	-	(11.9)	一部		15-4	71

第 22 図 S I 6 竪穴住居跡出土遺物

[床面] 住居掘り方埋土を床としており、ほぼ平坦である。

[壁] 残存していない。

[支柱穴] 炉を取り囲む位置から 4 個のピットを検出した (P 1 ~ 4)。配置から支柱穴と考えられる。掘り方の平面形は長軸 10 ~ 25cm、短軸 8 ~ 16cm の円形または楕円形である。柱穴の深さは 10 ~ 20cm である。柱痕跡は確認されなかった。

[炉] 床面が火熱を受けて赤変した部分を検出した。北部及び西部が削平により消失しているが、平面形は南北長 66cm 以上、東西長 60cm 以上の楕円形とみられ、炉と考えられる。

[貯蔵穴] 炉の南東側において 1 基検出した。平面形は径 45cm の円形で、深さは 25cm である。断面形は逆台形である。

[出土遺物] 住居床面から土師器高坏・壺（第 22 図 2）・鉢（第 22 図 3）・甕などが、床面直上から土師器高坏・甕などが、貯蔵穴堆積土から土師器坏・高坏（第 22 図 1）・甕（第 22 図 5）などが出土している。住居堆積土及び遺構確認面から土師器坏・高坏・壺・甕（第 22 図 4）・甕などが出土している。

S I 7 竪穴住居跡（第 23 図）

[検出] 調査区南部で検出した。検出面は地山面である。

[平面形・規模] 西部が調査区外となるため全体形は不明だが、方形を基調とするものとみられる。規模は南北 7.3 m、東西 3 m 以上である。

[方向] 東辺を基準とすると、北北西方向（N - 27° - W）である。

[堆積土] 3 層に細分される。全て住居廃絶後の自然堆積土と思われる。

[床面] 一部は地山面を床とするが、大部分は住居掘り方埋土を床としており、ほぼ平坦である。床面中央部には黄褐色ロームによる貼床が施されており、硬くしまっている。

[壁] ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、もっとも残存状態の良い北辺で床面から 30cm である。

[支柱穴] 住居対角線上から 2 個のピットを検出した（P 1・2）。配置から支柱穴と考えられる。掘り方の平面形は長軸 30 ~ 43cm、短軸 24 ~ 30cm の楕円形である。柱穴の深さは 40 ~ 60cm で、P 2 から径 12cm の柱痕跡を確認した。

[出土遺物] 住居床面から土師器壺・甕などが、床面直上から土師器壺・甕などが出土している。P 1 から土師器高坏が、住居堆積土から土師器坏・高坏・甕などが出土している。

S I 8 竪穴住居跡（第 24・25 図）

[検出] 調査区南部で検出した。検出面は地山面である。

[平面形・規模] 平面形は正方形で、規模は一辺 4.5 m である。

[方向] 東辺を基準とすると、北北西方向（N - 15° - W）である。

[堆積土] 4 層に細分される。全て住居廃絶後の自然堆積土と思われる。

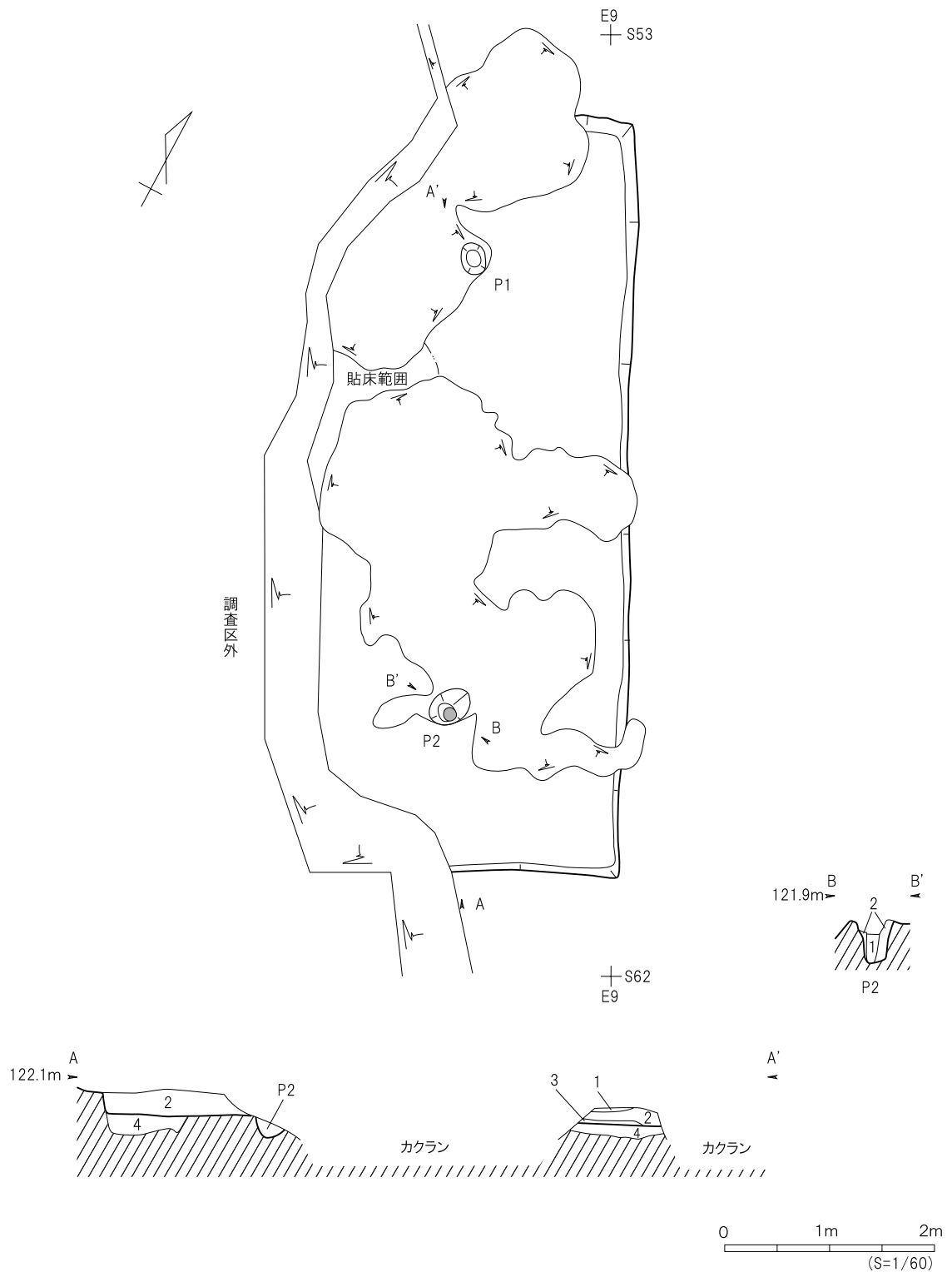
[床面] 住居掘り方埋土を床としており、ほぼ平坦である。床面中央部が特に硬くしまっている。

[壁] ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、もっとも残存状態の良い南辺で床面から 20cm である。

[支柱穴] 住居対角線上の床面等から 4 個のピットを検出した（P 1 ~ 4）。配置から支柱穴と考えられる。掘り方の平面形は長軸 20 ~ 25cm、短軸 18 ~ 20cm の円形または楕円形である。柱穴の深さは 35 ~ 45cm である。

[カマド] 住居北壁際やや東寄りにおいて、底面が火熱を受けて赤変した浅い窪みを検出した。この窪みの平面形は長軸 108cm、短軸 40cm の長方形で、南北方向が長軸となる。床面からの深さは 10cm である。窪み底面の住居内側寄りの部分が、長軸方向 36cm、短軸方向 48cm の楕円形に火熱を受けて赤変している。なお、この窪みの北辺は住居北壁と接する。窪みの堆積土は焼土・白色粘土・炭化物をきわめて多く含む暗褐色土である。燃烧部壁体や煙道などの施設は認められないものの、住居壁際という検出位置からこの窪みはカマド燃烧部底面と考えられる。

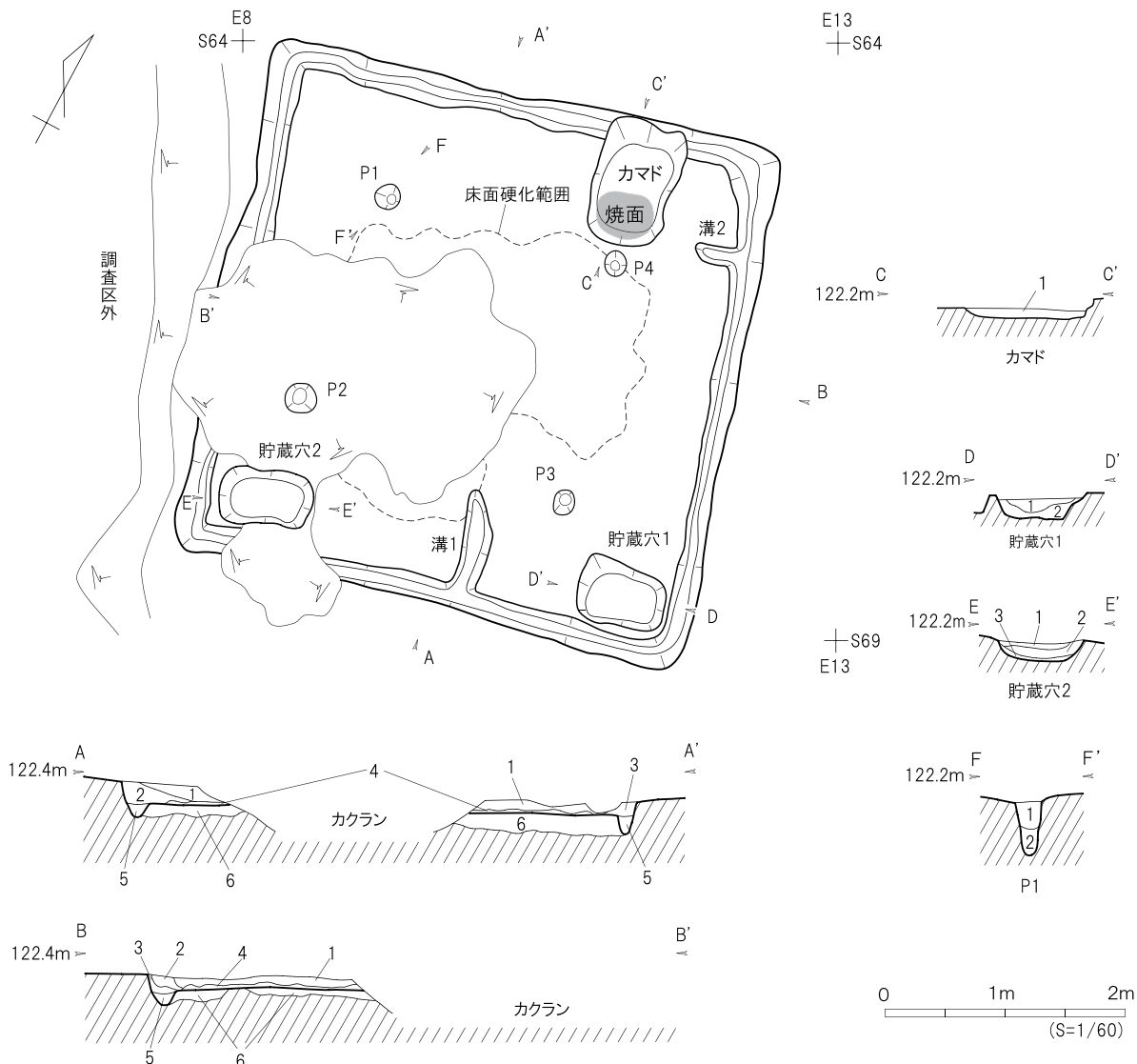
[周溝] 全周する。幅 15 ~ 25cm、深さ約 10cm で、断面形は U 字状である。



層	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR2/2)	シルト	焼土粒をごく少量、地山小アロク、炭化物を含む
2	黒褐 (10YR2/3)	シルト	
3	暗褐 (10YR3/3)	シルト	焼土を多く、炭化物をごく少量、地山粒を含む
4	褐 (7.5YR4/6)	シルト	地山小アロク、暗褐色土を含む 住居掘り方埋土

主柱穴 (P2)			
層	土色	土性	備考
1	褐 (10YR4/6)	シルト	炭化物粒をごく少量、地山小アロクを含む 柱痕跡
2	褐 (10YR4/6)	シルト	地山小アロク、黒褐色土を含む 掘り方埋土

第 23 図 S I 7 竪穴住居跡



層	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒・小ブロツク、焼土・炭化物を多く含む
2	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒を多く、焼土を少量、炭化物を含む
3	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒を多く、焼土をごく少量含む
4	暗褐 (10YR3/3)	シルト	地山粒を多く、炭化物を含む
5	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山粒を多く含む 周溝内堆積土
6	暗褐 (7.5YR3/4)	シルト	地山小ブロツクを多く含む 住居掘り方埋土

貯蔵穴2

層	土色	土性	備考
1	黒褐 (7.5YR3/2)	シルト	地山小ブロツク、焼土粒、炭化物粒を含む
2	黒褐 (7.5YR3/2)	シルト	地山粒を多く、焼土・炭化物粒を含む
3	暗褐 (7.5YR3/4)	シルト	地山小ブロツク、焼土粒を含む

層	土色	土性	備考
1	暗褐 (7.5YR3/4)	シルト	焼土ブロツク・白色粘土ブロツク炭化物粒を多く含む

カマド

層	土色	土性	備考
1	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山ブロツクをきわめて多く含む
2	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山小ブロツクをごく少量含む

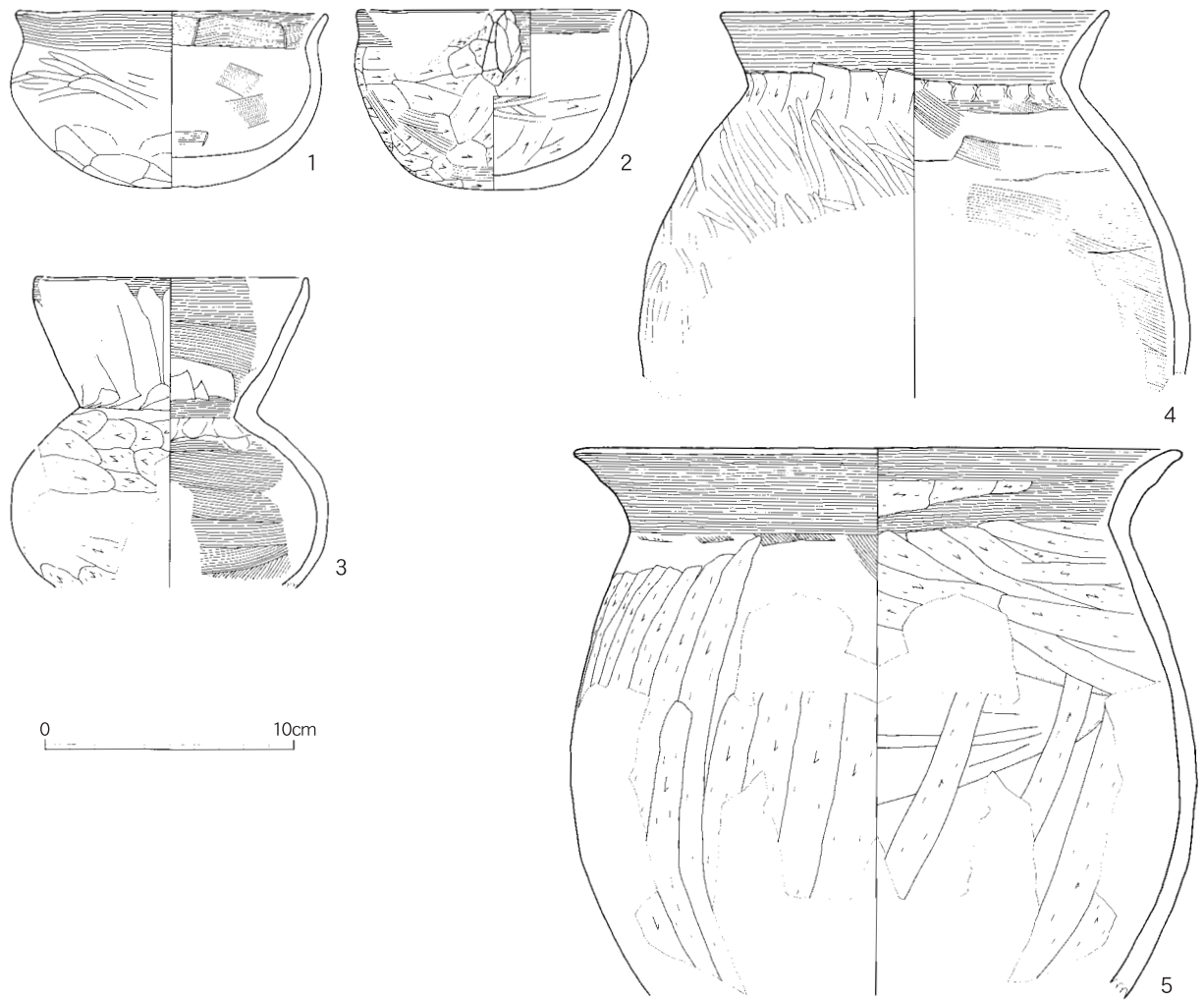
貯蔵穴1

層	土色	土性	備考
1	暗褐 (7.5YR3/4)	シルト	地山粒、暗褐色土を多く含む 柱抜取痕跡
2	褐 (7.5YR4/6)	シルト	暗褐色土を含む 掘り方埋土

主柱穴 (P1)

第24図 S18 竪穴住居跡

[貯蔵穴] 住居南東隅部 (貯蔵穴1) 及び南西隅部 (貯蔵穴2) より検出した。貯蔵穴1は長軸75cm、短軸45cmの不整長方形で、深さ20cm、断面形は逆台形である。貯蔵穴2は長軸80cm、短軸45cmの隅丸長方形で、深さ20cm、断面形は皿状である。貯蔵穴1の堆積土は地山土を多く含む黒褐色土で人為的な埋め戻しと考えられることから、貯蔵穴1を埋めた後、あらたに貯蔵穴2を設置したと思われる。



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	S18	床面直上	土師器・坏	(口)ヨナデ(体)ズリ・ミガキ	(口)ヨナデ→ヘラデ(体)ヘラデ	12.6	丸底	7.1	完形	pot1 内外面摩擦	15-5	48
2	1	S18	堆積土	土師器・坏	(口)ヨナデ(口・体・底)ズリ→(体)デ	(口)ヨナデ(体)ズリ→ミガキ	11.0	丸底	7.3	ほぼ完形	突起 内面ハケ	15-6	67
3	1	S18	堆積土	土師器・壺	(口)ヨナデ→ヘラデ(体)ズリ	(口)ヨナデ→デ(体)サエ→デ	11.0	-	(12.4)	一部	外面ハケ	16-1	93
4	1	S18	カマド底面	土師器・甕	(口)ヨナデ(頸・体)ズリ→ミガキ	(口)ヨナデ(頸)サエ→デ(体)ヘラデ	(15.7)	-	(15.6)	一部			95
5	1	S18	堆積土	土師器・甕	(口)ヨナデ(体)ズリ	(口)ヘラデ→ズリ→ヨナデ(体)ヘラデ→ズリ	(24.5)	-	(22.3)	一部			224

第25図 S18 竪穴住居跡出土遺物

[その他] 床面において、周溝から直行する溝を2条(溝1・2)検出した。長さ30～48cm、幅15～24cm、深さ約10cmで、断面形はU字状である。周溝との切り合いは認められず、堆積土も同様であるため、これらは同時存在していたものと考えられる。溝1はP3付近までのびている。溝2はP4に向ってのびるが、カマドが隣接しているためか全長は短い。

[出土遺物] 住居床面から土師器高坏・甕などが、床面直上から土師器坏(第25図1)・高坏・甕などが、カマド底面から土師器甕(第25図4)が、貯蔵穴1・2堆積土から土師器高坏・甕などが出土している。住居掘り方埋土から土師器高坏・甕などが、支柱穴から土師器高坏・甕などが、住居堆積土から土師器坏(第25図2)・高坏・壺(第25図3)・甕(第25図5)などが出土している。堆積土出土の坏は丸底で体部がやや内弯気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外傾する器形だが、口縁部付近に1ヶ所突起が付けられている。この突起は口縁部ヨコナデ後に貼付けられ、ヘラケズリ調整されたもので

ある。また、住居確認面出土の土師器高坏は坏下部の破片だが、坏底部から体部にかけての屈曲の外側に、下方に張り出す突帯が形成されるものである。

S I 9 竪穴住居跡（第 26・27 図）

[検出] 調査区中央部で検出した。検出面は地山面である。

[重複] S K 8 土坑と重複し、これより新しい。

[平面形・規模] 東部が調査区外となるため全体形は不明だが、方形を基調とするものとみられる。規模は南北 4.5 m、東西 3.8 m 以上である。

[方向] 西辺を基準とすると、北西方向（N - 35° - W）である。

[堆積土] 5 層に細分される。全て住居廃絶後の自然堆積土と思われる。

[床面] 住居掘り方埋土を床としており、中央部がやや窪む。隅部を除いて床面が硬くしまっている。

[壁] ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、もっとも残存状態の良い南西隅部で床面から 35cm である。

[支柱穴] 住居対角線上の床面から 3 個のピットを検出した（P 1 ~ 3）。配置から支柱穴と考えられる。掘り方の平面形は長軸 25 ~ 30cm、短軸 20 ~ 25cm の楕円形である。柱穴の深さは 60cm である。

[炉] 支柱穴に囲まれた床面から長軸 65cm、短軸 55cm の不整楕円形のピットを検出した。床面からの深さはピット中央部で 8 cm ほどである。断面形は W 字状で、周辺部が深く、中央部が隆起している。堆積土は焼土ブロックをきわめて多く含む暗褐色土である。炉と考えられる。

[周溝] 住居北西隅部、及び南辺東部に認められる。幅 10 ~ 20cm で、断面形は U 字状である。

[貯蔵穴] 住居南西隅部より 1 基検出した。平面形は径 80cm の円形で、深さは 75cm である。断面形は逆台形である。

[その他] 床面において、周溝から直行する溝を 1 条（溝 1）検出した。長さ 48cm、幅 18cm で、断面形は U 字状である。周溝との切り合いは認められず、堆積土も同様であるため、これらは同時存在していたものと考えられる。溝 1 は P 1 付近までのびている。

[出土遺物] 床面直上から土師器坏・高坏・壺・甕などが、貯蔵穴底面から土師器坏（第 27 図 1）が、貯蔵穴堆積土から土師器坏・高坏・壺・甕（第 27 図 2）などが出土している。住居掘り方埋土から土師器高坏・壺・甕などが、住居堆積土から土師器高坏・壺・甕などが出土している。

（2）溝跡

調査区北部において 5 条の溝跡（S D 1 ~ 5）を検出した。検出面はいずれも地山面である。規模から 2 種類に分類できる。

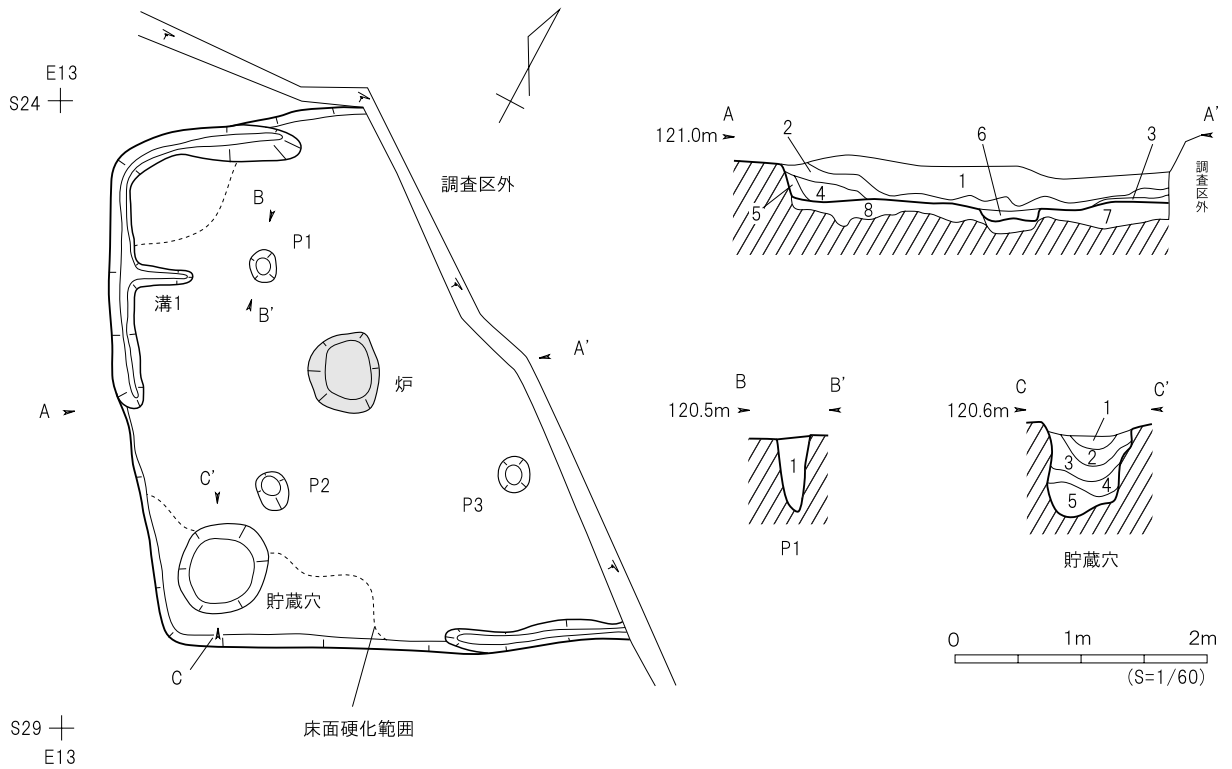
A 類：上端幅 2 m 内外、深さ 1 m 程度の大規模な溝跡（S D 3）

B 類：上端幅 50cm 内外、深さ 20cm 内外の小規模な溝跡（S D 1・2・4・5）

以下、分類ごとに詳述する。

A 類（S D 3）（第 28・30 ~ 32 図）

調査区中部で検出した。東西方向のほぼ直線的な溝跡で、規模は幅 1.8 ~ 2.8 m、下端幅 0.5 ~ 1.2 m、深さ 0.7 ~ 0.9 m である。底面レベルは東が高く、西に向かって傾斜している。断面形は逆台形で、



層	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山土を斑状に多く含む
2	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山粒、焼土小片を多く含む
3	暗褐 (10YR3/4)	シルト	焼土片をきわめて多く含む
4	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山小片を多く含む
5	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山粒をごく少量含む
6	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山・焼土片をきわめて多く含む 炉内堆積土
7	褐 (7.5YR4/6)	シルト	地山片をきわめて多く含む 住居掘り方埋土
8	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山片を多く、炭化物少量含む 住居掘り方埋土

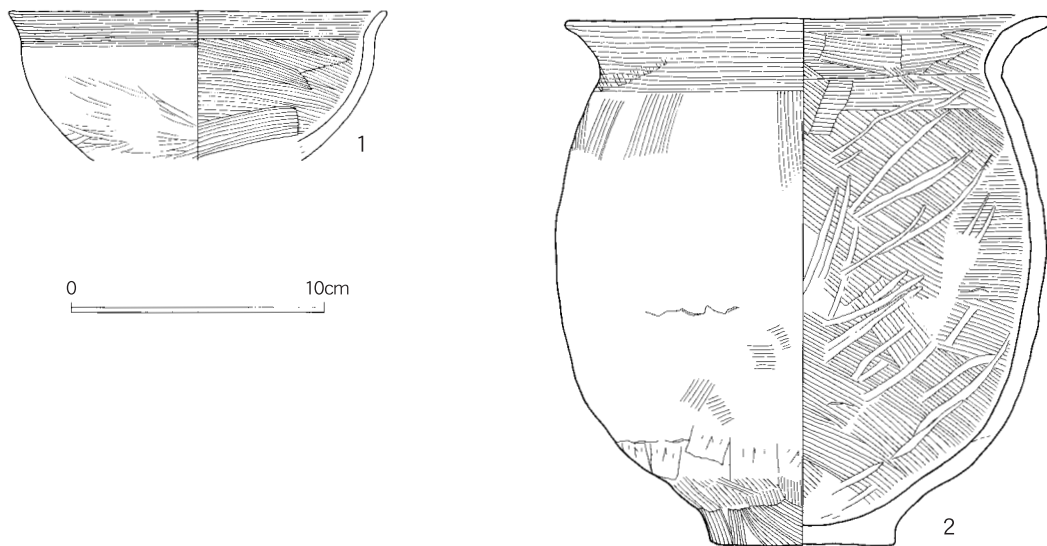
貯蔵穴

層	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山片を多く含む
2	黒褐 (7.5YR2/2)	シルト	地山粒をごく少量含む
3	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒・片を多く含む
4	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒・焼土片を含む
5	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山粒を多く含む

支柱穴 (P1)

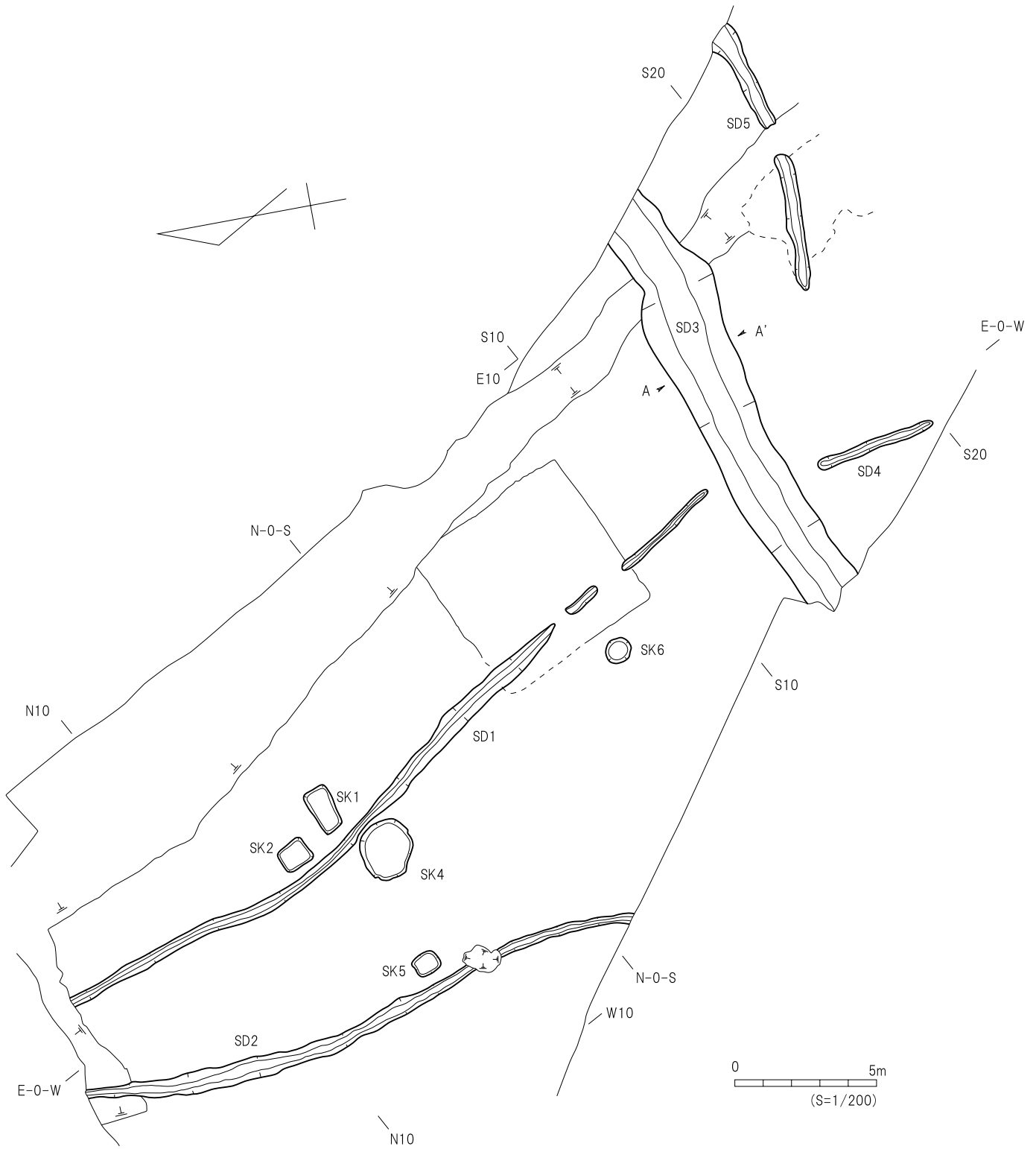
層	土色	土性	備考
1	暗褐 (7.5YR3/3)	シルト	地山小片を多く含む 掘り方埋土

第26図 S19 竪穴住居跡

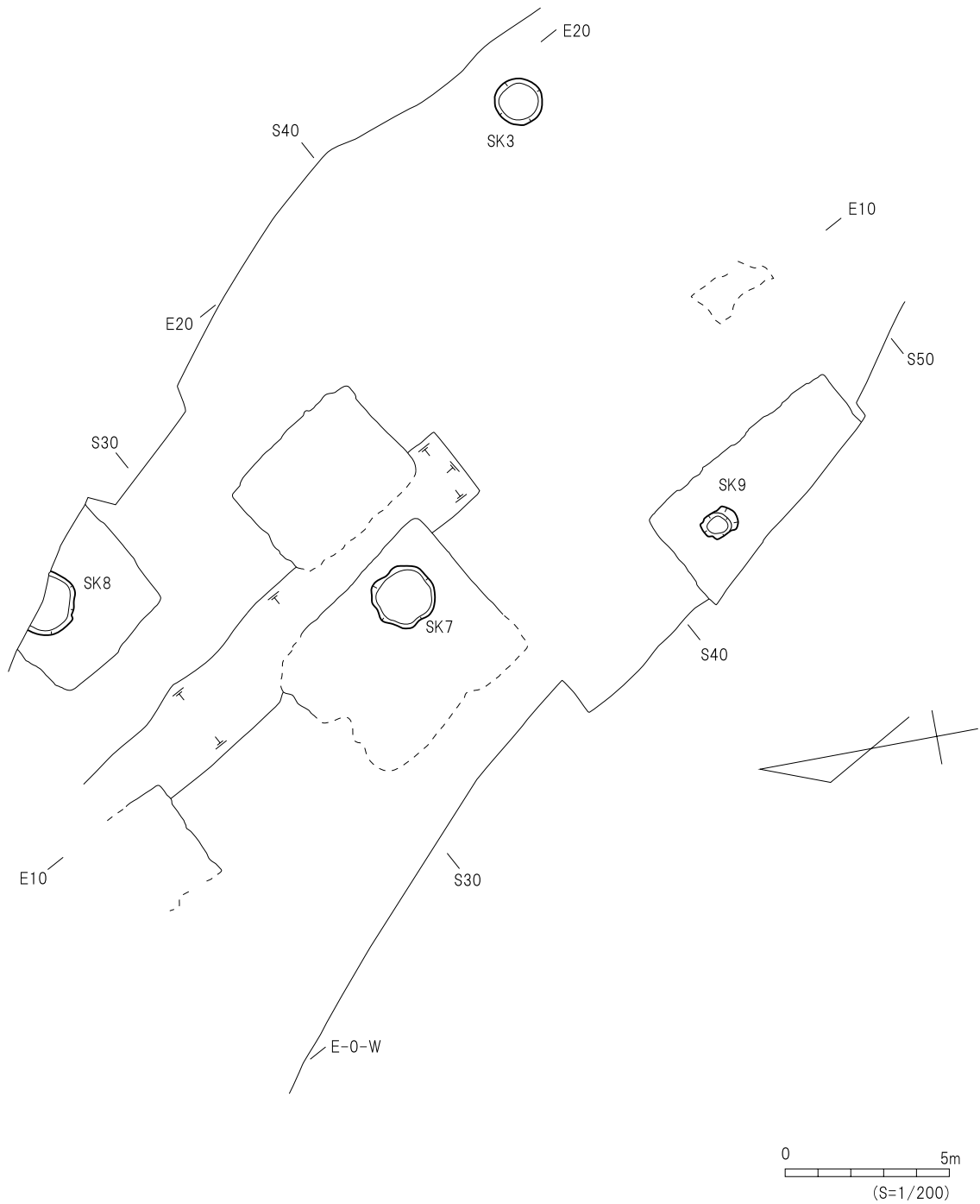


No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	S19	貯蔵穴底面	土師器・環	(口)ヨリテ(体)ナシ	(口)ヨリテ(体)ナシ	(15.0)	-	(5.9)	1/3			59
2	1	S19	貯蔵穴	土師器・甕	(口)ヨリテ(体下)ナシ(底)ナシ	(口)ヨリテ(体)ナシ(底)ナシ	19.3	7.3	20.9	ほぼ完形	pot7	16-2	223

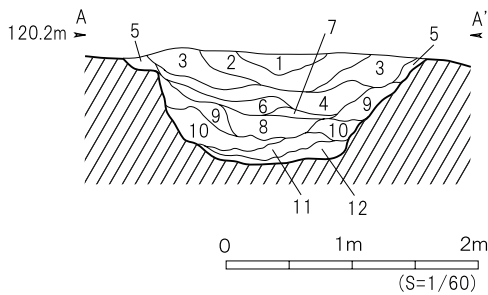
第27図 S19 竪穴住居跡出土遺物



第 28 图 1 区沟迹·土坑平面图 (1)



第 29 图 1 区沟迹·土坑平面图 (2)



層	土色	土性	備考
1	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒・小アロカ、炭化物粒を含む
2	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山小アロカ、暗褐色土を多く含む
3	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山小アロカ、黒褐色土粒を含む
4	暗褐 (10YR3/4)	シルト	黒褐色土粒を多く、地山小アロカ、炭化物を含む
5	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山粒、暗褐色土を多く含み、炭化物をごく少量含む
6	暗褐 (10YR3/3)	シルト	炭化物をごく少量、地山粒を含む
7	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒、焼土アロカ・炭化物をごく少量含む
8	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山粒、焼土アロカ・炭化物をごく少量含む
9	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山アロカをきわめて多く、炭化物をごく少量含む
10	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山小アロカ、黒褐色土、炭化物を少量含む
11	暗褐 (10YR3/3)	シルト	地山粒を多く、黒褐色土、炭化物を含む。
12	ぶい黄褐 (10YR4/3)	シルト	地山小アロカを多く、黒褐色土粒をごく少量含む

第 30 図 SD3 溝跡

底面はやや凹凸があるものの、おおむね平坦である。延長は約 16 m で、さらに調査区外東西方向にのびる。堆積土は 12 層に細分され、いずれも自然堆積層と考えられる。堆積土中～上層で火山灰の 2 次堆積が観察された。遺物は、堆積土中から土師器坏・高坏・小型壺・壺・甕、石鏃・スクレイパーなどが出土している。出土遺物の大部分は付近に分布する竪穴住居跡から出土するものと特徴を同じくする土師器で、溝の底面付近の堆積層中から集中して出土している。

B 類 (SD1・2・4・5) (第 28 図)

調査区中央～北部で検出した。ほぼ南北方向のもの (SD1・2・4) と、ほぼ東西方向のもの (SD5) とがある。SD1 は SI1 竪穴住居跡と、SD5 は SI2 竪穴住居跡と重複し、いずれも竪穴住居跡より新しい。規模は上端幅 0.3～1 m、下端幅 0.2～0.6 m、深さ 0.1～0.5 m である。底面レベルは東及び南側が高く、西及び北に向って傾斜している。断面形は逆台形～U 字状である。延長は 4.5～29 m 以上と一定せず、SD1・2 はさらに北側調査区外、SD5 は東側調査区外にのびる。堆積土は 1～3 層に細分され、いずれも暗褐色土で、自然堆積土と考えられる。遺物はごく少量の土師器片が出土している。これらの遺物は竪穴住居跡と重複している範囲を中心に出土していることから、本来は竪穴住居跡に伴う遺物が混入したものと考えられる。

(3) 土坑

調査区北部及び中部において 9 基の土坑を検出した。平面形・埋没状況などから 2 種類に分類できる。

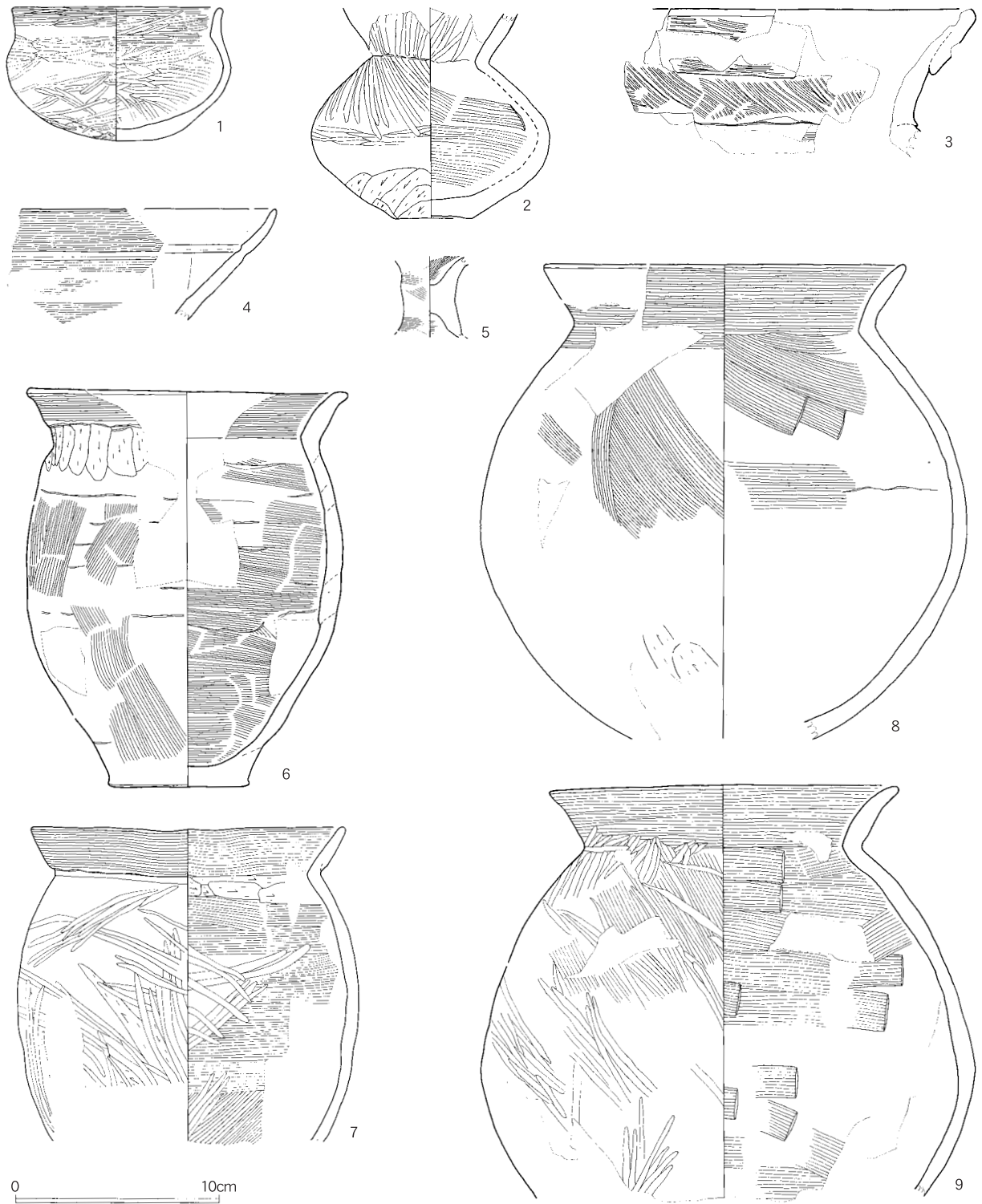
A 類：平面形が径 1.2～2 m の円形あるいは楕円形で、埋没状況が自然堆積のもの (SK3・4・7・8・9)

B 類：平面形が長軸 1～1.6 m の長方形あるいは楕円形で、埋没状況が人為的な埋め戻しであるもの (SK1・2・5・6)

以下、分類ごとに詳述する。

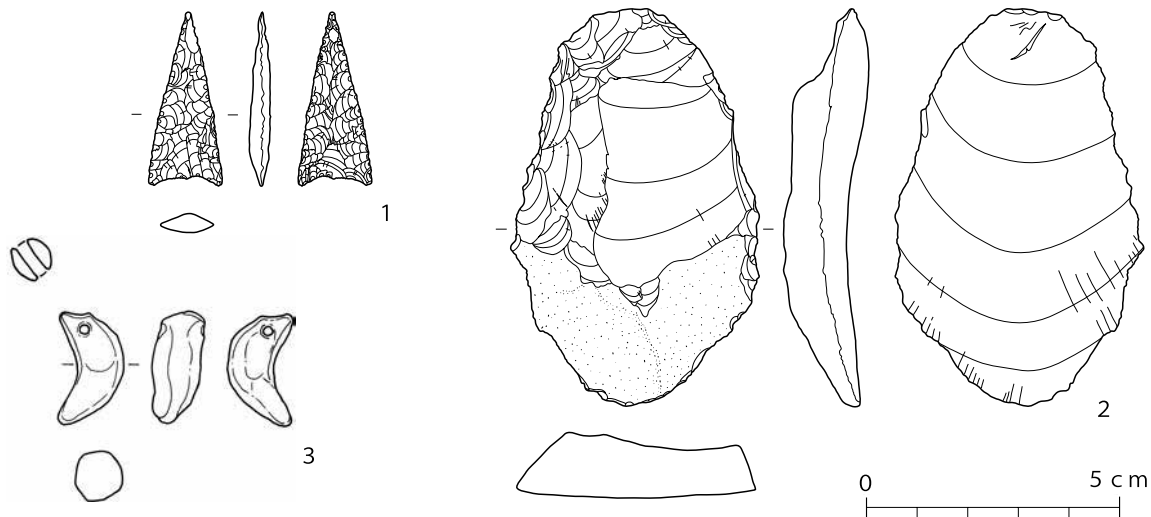
A 類 (SK3・4・7・8・9) (第 28・29・32 図)

SK4 を除き、調査区中央部で検出した。SK7 は SI3 竪穴住居跡と、SK8 は SI9 竪穴住居跡と、SK9 は SI5 竪穴住居跡と重複し、いずれも竪穴住居跡より古い。堆積土は暗褐色土あるい



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録
1	1	SD3	2層	土師器・坏	(口)ヨコテ(底)ズリ→(口・底)シギキ	(口)ヨコテ(口・体)シギキ	10.4	丸底	6.6	完形	内面ハツケ	16-3	38
2	1	SD3	堆積土	土師器・壺	(口・体)シギキ(体下・底)ズリ	(口)シギキ(体・底)ヘコテ	(10.4)	-	(4.0)	3/4		16-4	22
3	1	SD3	堆積土	土師器・壺	(口)ハツメ(頸)ハツメテ	(口)ハツメ	-	-	(7.1)	一部			39
4	1	SD3	2層	土師器・鉢?	(口)ヨコテ(体)テ	(口)ヨコテ(体)ヘコテ	-	-	(5.5)	不明	内外に沈線一条		1
5	1	SD3	堆積土	土製品・不明	テ	テ	-	-	(4.0)	一部		17-3	31
6	1	SD3	堆積土	土師器・甕	(口)ヨコテ(頸)ズリ(体)テ	(口)ヨコテ(体)テ・ヘコテ	15.8	6.9	19.5	1/2		17-1	7
7	1	SD3	堆積土	土師器・甕	(口)ヨコテ(体)テ→ズリ→シギキ	(口)ヨコテ→ズリ(体)テ→シギキ	(15.7)	-	(15.5)	1/2		17-2	2
8	1	SD3	堆積土	土師器・甕	(口)ヨコテ(体)テ(体下)ズリ→テ?	(口)ヨコテ(体)ヘコテ	(18.0)	-	(23.4)	一部	外面に黒色付着物	16-5	40
9	1	SD3	2層	土師器・甕	(口)ヨコテ(体)テ→(口・体)シギキ	(口)ヨコテ(体)ヘコテ	17.3	-	(20.4)	1/3			13

第31図 SD3溝跡出土遺物(1)



No.	区	遺構	層位	種類	特徴	長	幅	厚	重	写真	登録
1	1	SD3	堆積土	石器・石鏃	石材頁岩	3.5	1.5	0.4	1.4	18-24	212
2	1	SD3	堆積土	石器・スレカ-	石材珪化木	7.9	4.9	1.2	51.5	18-25	213
3	1	SK9	確認面	土製品	勾玉状 孔径0.26 mm	2.2	0.9	0.95	-	18-1	155

第32図 SD3溝跡・SK9土坑出土遺物

は黒褐色土で、底面はほぼ平坦である。残存状態が悪いものが多いが、壁はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物はSK7堆積土中より弥生土器・剥片が、SK9確認面より勾玉状土製品1点(第32図3)が出土している。

B類(SK1・2・5・6)(第28図)

全て調査区北部で検出した。埋土は地山ブロックをきわめて多く、均質に含む暗褐色土である。底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

2.2区(第33図)

遺跡範囲の東端部に位置する。遺構確認調査においてトレンチを密に入れ、遺構が確認された範囲を拡張して調査区を設定したため、10m四方及び15m四方の2つの小区に分かれる。1区が所在する舌状張り出し地形の北に隣接する沢の底面にあたり、沢の中央部は黒褐色土の堆積が厚いが、沢の肩部は強い削平を受けており、層厚30cmほどの表土を除去した段階で礫混じり粘質シルトの基層が露出する。標高は100～105mである。

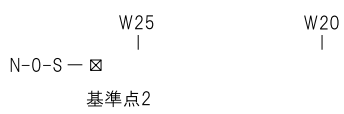
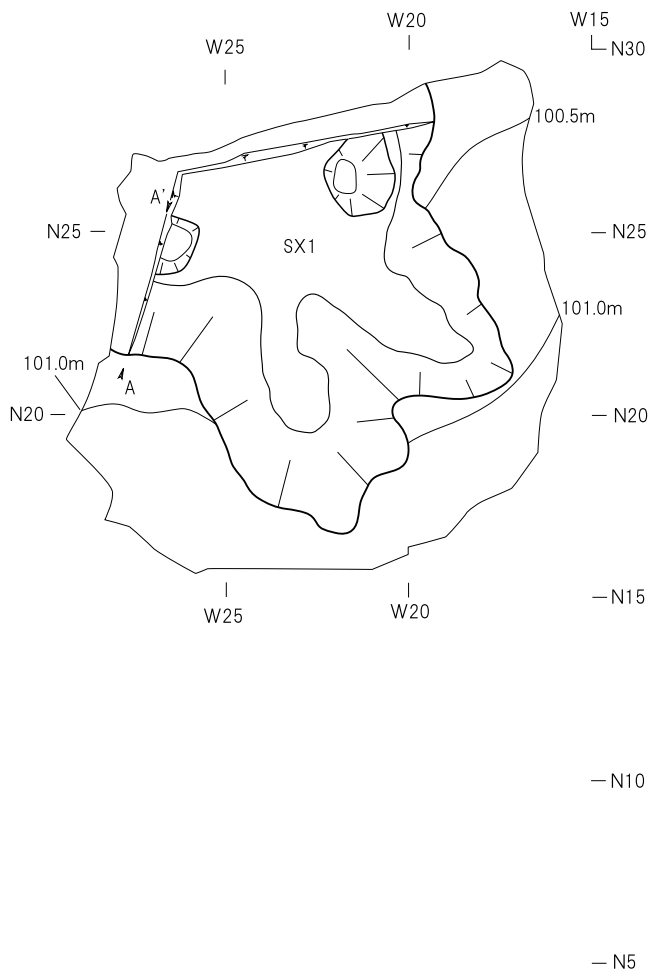
検出した遺構は竪穴住居跡1軒、溜池状遺構1基である。また、遺構内外から弥生土器、土師器、ロクロ土師器、須恵器、中世陶器、剥片が出土しているが、その量はごく少量である。

(1) 竪穴住居跡

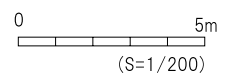
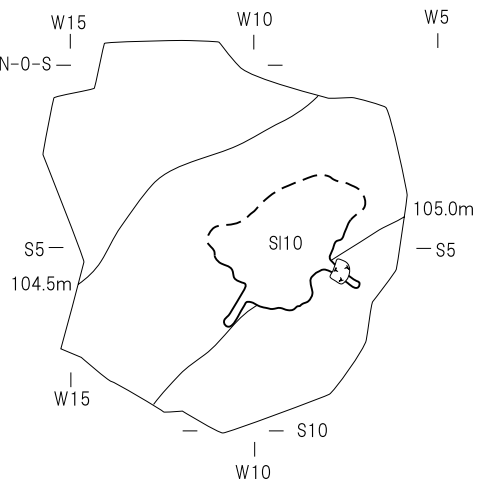
SI10 竪穴住居跡(第34図)

[検出] 調査区東部で検出した。検出面は地山面である。

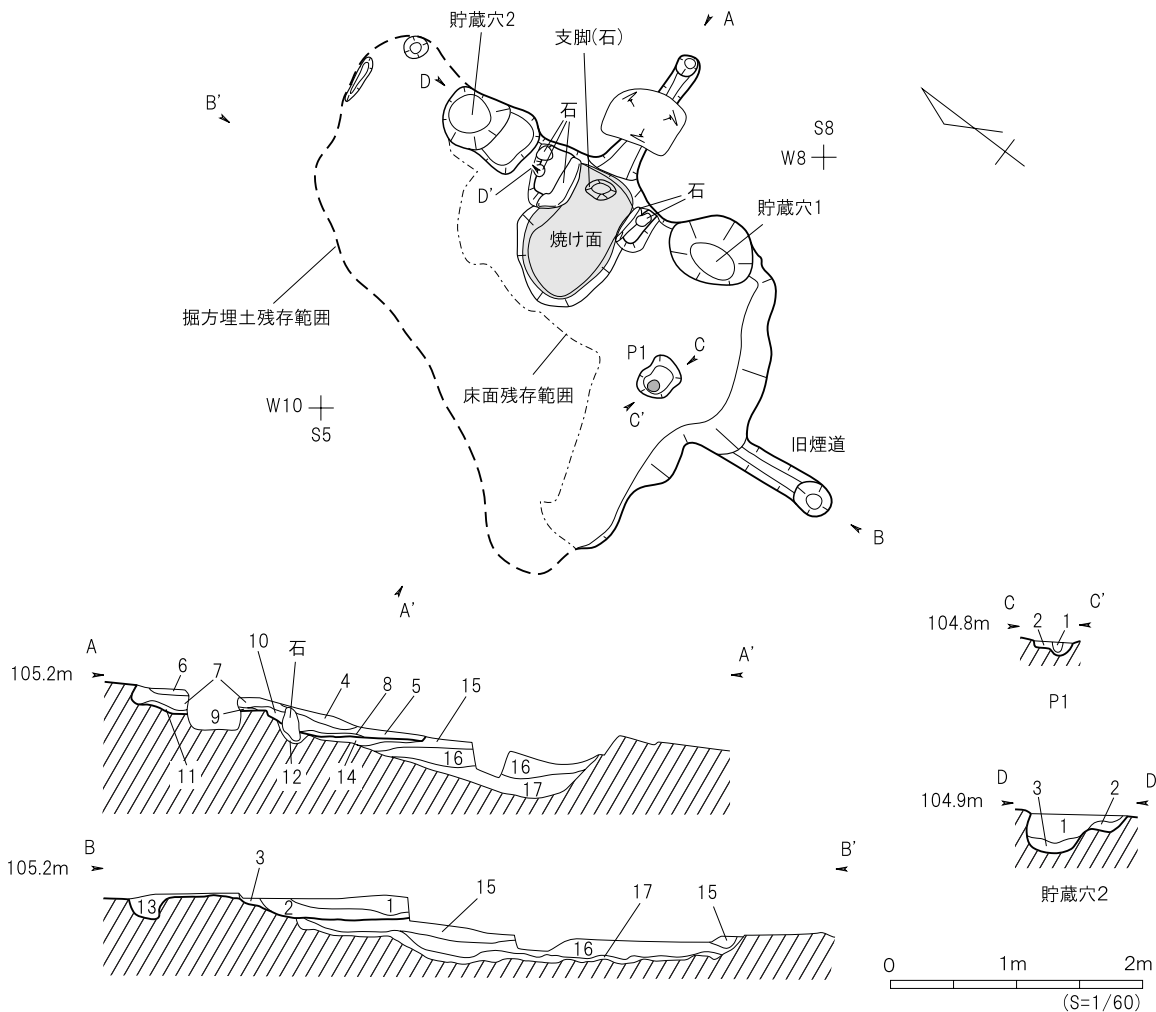
[平面形・規模] 住居北西部が削平により消失しており平面形は不明だが、方形を基調とするものと



基準点1:(X=-210960.4308 Y=-12170.9984)
 基準点2:(X=-210972.7253 Y=-12187.2860)



第 33 图 2 区遺構配置図



層	土色	土性	備考
1	暗褐 (10YR3/4)	シルト	焼土粒・炭化物、地山小アロックを含む
2	暗褐 (7.5YR3/3)	シルト	地山・焼土粒を含む
3	黒褐 (7.5YR2/2)	シルト	地山粒を含む
4	黒褐 (7.5YR2/2)	シルト	地山・焼土粒を含む
5	黒褐 (7.5YR3/2)	シルト	焼土・炭化物粒を少量、地山小アロックを含む
6	極暗赤褐 (5YR2/4)	シルト	焼土アロックを多く含む 煙道崩落土
7	暗褐 (7.5YR3/4)	シルト	地山・焼土粒を多く含む
8	暗赤褐 (5YR3/6)	シルト	
9	褐 (7.5YR4/4)	シルト	砂粒を含む
10	極暗赤褐 (5YR3/4)	シルト	
11	暗褐 (7.5YR3/3)	シルト	地山粒を多く、焼土・炭化物を含む
12	にぶい赤褐 (5YR4/4)	シルト	砂粒を含む カマド支脚掘え方埋土
13	暗褐 (7.5YR3/4)	シルト	地山・焼土アロックを多く含む 旧煙道埋土

層	土色	土性	備考
14	明赤褐 (5YR5/6)	シルト	住居掘り方埋土
15	褐 (10YR4/4)	シルト	焼土、白色粘土粒、地山粒含む 住居掘り方埋土
16	暗褐 (10YR3/4)	シルト	地山粒を多く、炭化物を含む 住居掘り方埋土
17	黒褐 (10YR2/3)	シルト	地山粒を多く、焼土を含む 住居掘り方埋土

貯蔵穴2

層	土色	土性	備考
1	暗褐 (10YR3/3)	シルト	地山・焼土・炭化物粒を含む
2	明褐 (7.5YR5/6)	シルト	焼土・暗褐色土粒を含む
3	橙 (7.5YR6/6)	粘質シルト	暗褐色土を多く、炭化物粒を含む

主柱穴 (P1)

層	土色	土性	備考
1	暗褐 (7.5YR3/4)	シルト	地山小アロックを多く、焼土粒を少量含む 柱痕跡
2	暗褐 (10YR3/3)	シルト	地山アロックを多く、焼土粒を少量含む 掘り方埋土

第34図 S I 10 竪穴住居跡

みられる。規模は南北4 m以上、東西3.2 m以上である。

[方向] 旧煙道の軸線を基準とすると、ほぼ真南である。

[堆積土] 11層に細分される。1～10層は住居廃絶後の自然堆積土、11層は住居機能時の煙道内堆積土と思われる。

[床面] 住居掘り方埋土を床としている。

[壁] 外開き気味に立ち上がる。残存壁高は、もっとも残存状態の良い南辺で床面から15cmである。

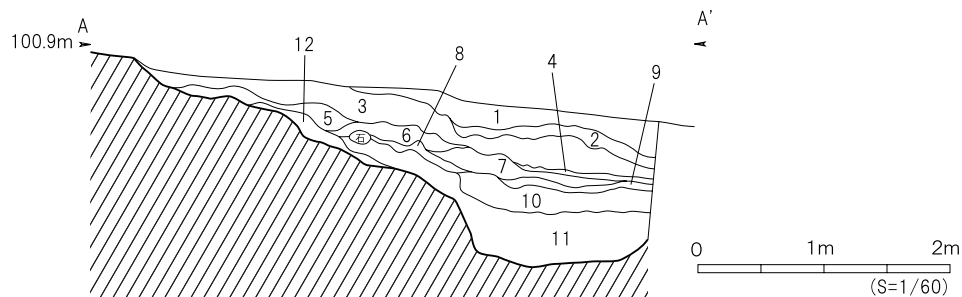
[支柱穴] 住居対角線上の床面等から1個のピットを検出した(P1)。配置から支柱穴と考えられる。掘り方の平面形は長軸36cm、短軸30cmの長方形である。柱穴の深さは10cmで、径10cmの柱痕跡を確認した。

[カマド] 住居東壁際及び南壁際より2基のカマドを検出した。南壁際のカマドは煙道部のみ残存しており、住居内の燃烧部は確認できなかった。また、煙道は地山土・焼土ブロックを多量に含む暗褐色土で埋め戻されていることから、本住居は当初この位置にカマドを設けていたが、それを廃棄・撤去して住居東壁際にあらたにカマドを設置したものと考えられる。旧カマドの煙道は長さ96cm、幅25cm、深さ2~5cmで、先端に長軸30cm、短軸25cm、深さ20cmの楕円形の煙出しピットが設けられる。

住居東壁際から検出した新カマドは燃烧部と煙道が残存する。燃烧部は側壁と燃烧部底面からなり、奥行115cm、幅108cmである。燃烧部底面は浅い窪みとなっており、規模は奥行115cm、幅50cmである。底面全体が火熱を受けて赤変している。奥壁の手前に人頭大の石が据えられている。火熱を受けて赤変していることから支脚として機能したものと考えられる。側壁は白色粘土と礫を用いて構築されている。左側壁は長さ40cm、幅40cm、高さ14cmが、右側壁は長さ35cm、幅33cm、高さ8cmが残存する。側壁の構築材である礫は板状のものと円礫とが用いられている。板状のものは燃烧部内壁として用いられており、表面が火熱を受けて赤変しているのが観察された。円礫は白色粘土中に混入されるか、あるいは側壁外面に露出しており、骨材として用いられたものと考えられる。燃烧部奥壁は落差15cmほどの傾斜をもって煙道と接続する。煙道は長さ115cm、幅20cm、深さ10~20cmで、先端に径18cmの円形の煙出しピットが設けられる。

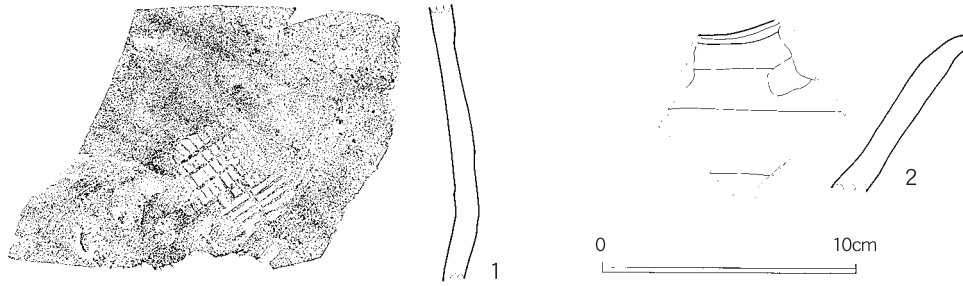
[貯蔵穴] 住居南東隅部(貯蔵穴1)及び新カマド左脇(貯蔵穴2)より検出した。貯蔵穴1は長軸70cm、短軸55cmの楕円形で、深さ30cm、断面形は逆台形である。貯蔵穴2は長軸80cm、短軸45cmの不整形長方形で、深さ30cm、断面形は逆台形でカマド近くは浅めにある。堆積土はいずれも自然堆積土である。位置的に貯蔵穴1が旧カマド、貯蔵穴2が新カマドに伴うものとして、カマド作り替え時に更新されたものである可能性がある。

[出土遺物] 床面直上からロクロ土師器甕などが、貯蔵穴堆積土からロクロ土師器甕、須恵器甕が出



層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	極暗褐(7.5YR2/3)	シルト	小礫を少量含む	7	黒(7.5YR2/1)	粘土	砂を多く、小礫を含む
2	極暗褐(7.5YR2/3)	シルト	砂を多く、小礫を少量含む	8	黒(7.5YR2/1)	粘土	砂、白色粘土ブロックを多く、小礫を含む
3	極暗褐(7.5YR2/3)	粘質シルト	炭化物・焼土粒をごく少量含む	9	黒(7.5YR1.7/1)	粘土	
4	極暗褐(7.5YR2/3)	粘質シルト	炭化物・焼土粒をごく少量含む 酸化鉄析出顕著	10	黒(10YR2/1)	粘土	細砂をきわめて多く含む
5	極暗褐(7.5YR2/3)	粘質シルト	砂多量、小礫・炭化物・焼土粒をごく少量含む	11	黒(7.5YR1.7/1)	粘土	細砂、植物遺体(木枝)を含む
6	黒褐(7.5YR3/1)	粘土	砂を含む	12	黒褐(10YR3/1)	粘土	細砂をきわめて多く含む

第35図 S X 1 溜池状遺構



No.	区	遺構	層位	種類	特徴	口径	底径	器高	残存	写真	登録
1	2	SX1	堆積土	陶器・甕	押印(襷状+格子) 常滑産	-	-	(11.0)	一部	17-5 a,b	247
2	2	SX1	確認面	陶器・片口鉢	産地不明	-	-	(6.4)	一部	17-4	245

第 36 図 SX 1 溜池状遺構出土遺物

土している。住居掘り方埋土からロクロ土師器坏・甕などが、カマド内堆積土からロクロ土師器甕などが、住居堆積土からロクロ土師器坏・甕、須恵器甕などが出土している。出土遺物の大部分はロクロ土師器である。

(2) 溜池状遺構

S X 1 溜池状遺構 (第 33・35・36 図)

調査区西部で検出した。検出面は地山面である。西部が調査区外となるため全体形は不明だが、平面形は南北 11 m、東西 11.5 m 以上の不整形とみられる。断面形は皿状とみられ、深さは 90cm 程である。底面はほぼ平坦だが、長軸 160～200cm、短軸 100～190cm、深さ 25～64cm の落ち込みを 2ヶ所検出した。堆積土は 12 層に細分される。1・2 層は小礫を少量含む極暗褐色シルト、3～5 層は炭化物・焼土粒を少量含む極暗褐色粘質シルト、6～9 層は砂・小礫・白色粘土粒などを含む黒色粘土、10～12 層は細砂を多く含む黒色粘土で、下層ほど堆積土の粒度が細くなる。いずれも水成堆積で、特に下層部は、流れのない水面に風などによって運ばれた微細な土砂が沈殿してできたものと思われる。上層～中層部は小礫・粘土ブロックなどをわずかながらも含むことから、周囲の土砂が流入したものとみられる。遺物は堆積土から土師器坏・高坏・甕、ロクロ土師器坏、須恵器坏、中世陶器甕(第 36 図 1)・片口鉢(第 36 図 2)などが出土している。

3. 3 区 (第 37 図)

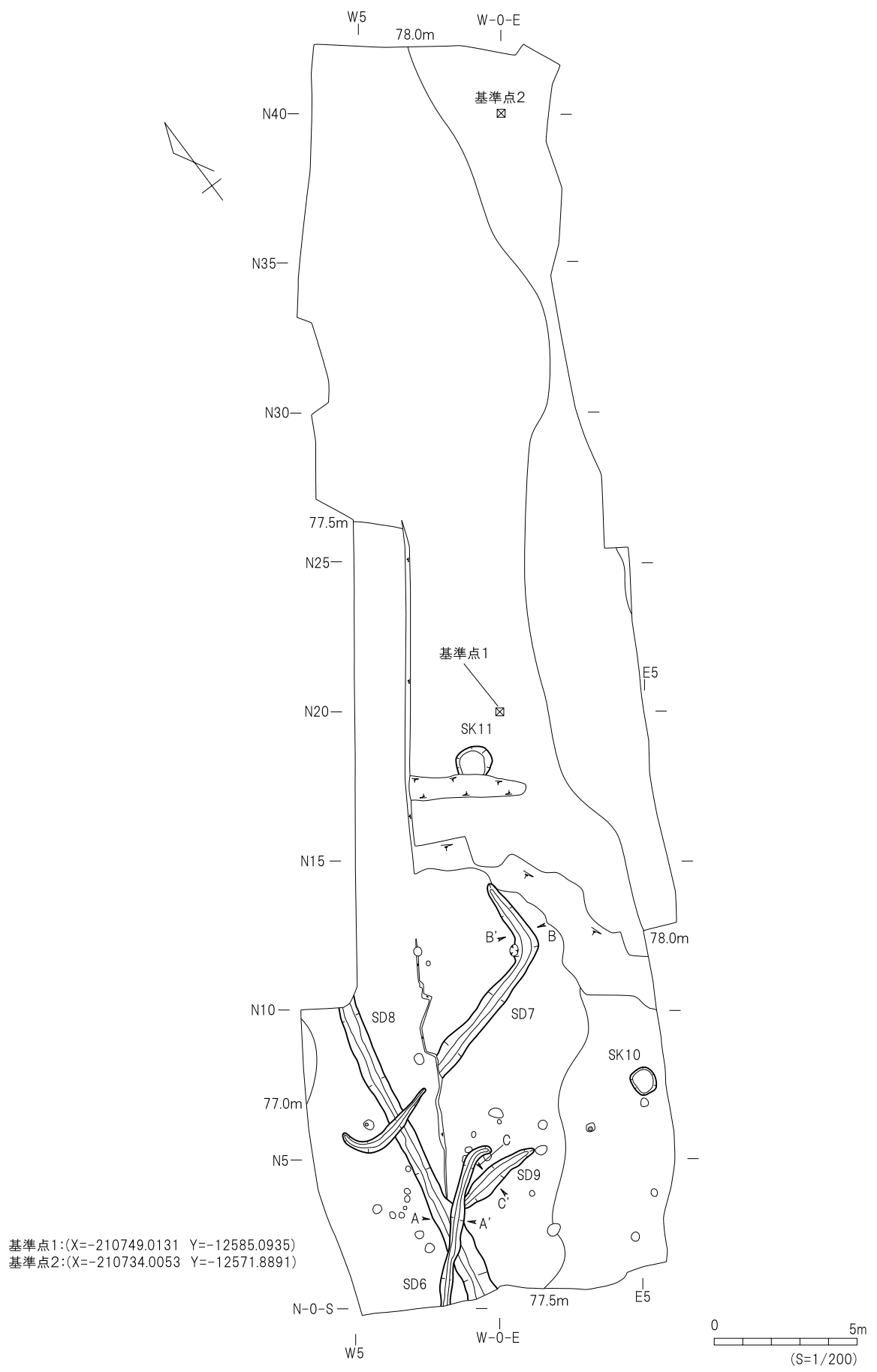
遺跡範囲の西端部に位置する東西約 15 m、南北約 50 m、面積約 750 m² の調査区である。立地は、盆地底部に向って張り出す舌状丘陵の端部にあたる。西斜面で、標高は調査区東端部で 78.5 m、西端部で 77.0 m である。

検出した遺構は溝跡 4 条、土坑 2 基、柱穴少数である。遺物は出土していない。

(1) 溝跡

調査区南西部において 4 条 (S D 1～4) 検出した。検出面はいずれも地山面である。規模から 2 種類に分類できる。

A 類：上端幅 1 m 内外、深さ 50cm 程度の深い溝跡 (S D 8・9)



第 37 図 3 区遺構配置図

B類：上端幅 50cm 内外、深さ 10cm 内外の浅い溝跡（SD 6・7）

以下、分類ごとに詳述する。

A類（SD 8・9）（第 37 図）

SD 8 はほぼ南北方向の直線的な溝跡で、規模は上端幅 0.6 ～ 1.1 m、下端幅 0.2 ～ 0.4 m、深さ 25 ～ 50cm である。底面レベルはほぼ水平である。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。この溝跡は地形の傾斜ともほぼ並行である。SD 9 は SD 8 と直行するほぼ東西方向の溝跡で、西端部は SD 8 にごく近いが、重複はしない。規模は上端幅 35 ～ 70cm、下端幅 0.2 ～ 0.3 m、深さ 30 ～ 60cm である。底面レベルは東が高く、西に向かって傾斜している。断面形は逆台形で、底面はやや凹凸が認められる。SD 8 は SD 6・7 と、SD 9 は SD 7 と重複し、これらより古い。また、周辺の柱穴と重複するが、これらより新しい。堆積土はいずれも地山土を多く含む自然堆積土である。

B類（SD 6・7）（第 37 図）

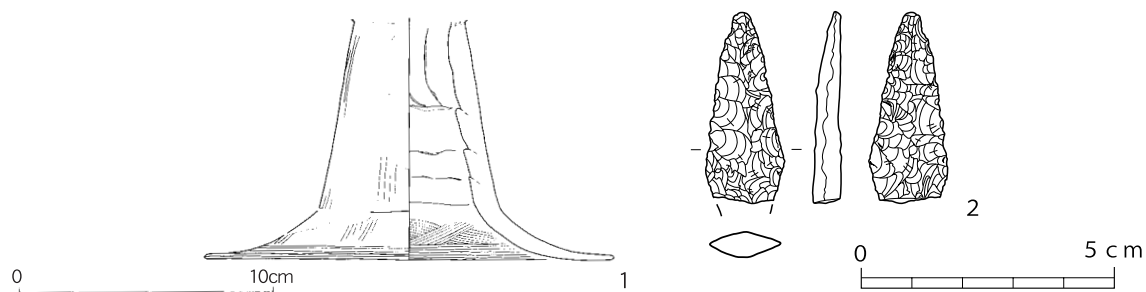
SD 6 は南西～北東方向の溝跡で、北東端で東に曲がる。規模は上端幅 30 ～ 45cm、下端幅 10 ～ 30cm、深さ 5 ～ 15cm である。底面レベルはほぼ水平である。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。また、SD 7 はほぼ東西方向の溝跡で、両端が北側に曲がる。規模は上端幅 30 ～ 80cm、下端幅 10 ～ 50、深さ 10cm である。底面レベルはほぼ水平である。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。SD 6 は SD 8・9 と、SD 7 は SD 8 と重複し、これらより新しい。また、周辺の柱穴と重複するが、これらより新しい。堆積土はいずれも地山土を多く含む自然堆積土である。

(2) 土坑（第 37 図）

調査区南東部（SK 10）及び中央（SK 11）において、2 基検出した。検出面はいずれも地山面である。平面形は径 80 ～ 130cm の不整形円形で、深さは 13 ～ 15cm である。断面形は皿状である。堆積土は地山粒を含む黒褐色シルトの自然堆積土である。

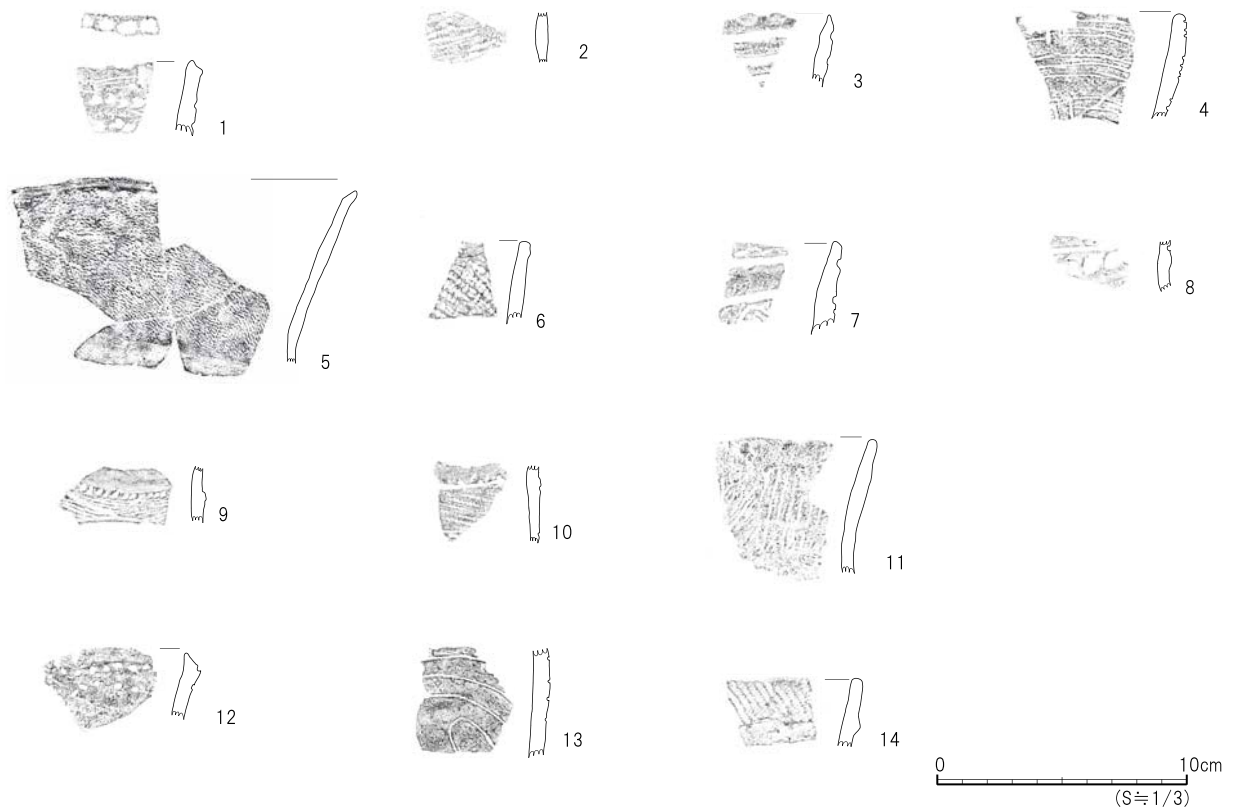
4. その他の出土遺物（第 38・39 図）

第 38 図 1 は 1 区表土より出土した土師器高坏で、付近にある竪穴住居跡などから出土しているも



No.	区	遺構	層位	種類	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	残存	備考	写真	登録	
1	1		表土	土師器・高坏	(脚) びき (裾) コナテ	(脚) ナ (裾) コナテ	-	(16.2)	(9.5)	一部			83	
No.	区	遺構	層位	種類	特徴				長	幅	厚	重	写真	登録
2	2		表土	石器・石鏃	石材頁岩 先端部・基部欠損				(3.8)	1.6	0.5	2.6		214

第 38 図 その他の出土遺物（1）



№	区	遺構	層位	種別	特徴	登録	№	区	遺構	層位	種別	特徴	登録
1	1	SI3	掘方埋土	弥生	爪形刺突 口唇部押圧	157	8	1	SI8	堆積土	弥生	平行沈線 口縁部下端に押圧	173
2	1	SI3	掘方埋土	弥生	縄文LR 裏面に植物種子圧痕	159	9	1	SI8	堆積土	弥生・壺	撚糸I 頸部爪形刺突	171
3	1	SI3	確認面	弥生	平行沈線 口唇部押圧	182	10	1	SK4	床	弥生	縄文RL 頸部沈線十交互刺突	176
4	1	SI4	確認面	弥生	四角文	160	11	1	SD3	堆積土	弥生・甕	撚糸I	177
5	1	SI4	確認面	弥生・甕	口縁部撚糸r 頸部磨消	162	12	1		表土	弥生	並行刺突文 口唇部刻み目	178
6	1	SI5	確認面	弥生	縄文RL 口縁部折返し	169	13	1		表土	弥生	同心円文	181
7	1	SI8 P2	堆積土	弥生	平行沈線	174	14	1		混乱	弥生	縄文RL	180

第 39 図 その他の出土遺物 (2)

のに類似する。第 38 図 2 は 2 区表土より出土した石鏃である。頁岩製で、先端部及び基部が破損している。第 39 図は弥生土器である。弥生土器は主に 1 区の遺構内外から出土したが、多くは小片で接合するものはほとんどない。弥生時代中期円田式、あるいは後期天王山式に属するものと考えられる。第 39 図 2 は表面に縄文を付した小片だが、裏面（土器の内面）に長さ約 7 mm、幅約 4 mm、深さ約 3 mm の植物種子の圧痕が認められる。圧痕の表面には約 1.5mm 間隔で縦方向の条が認められ、さらに条間には 12～15 本の微細な縦条と、縦条と直行する微細な横条がみられる。こうした特徴はイネ穎果にみられるものであることから、この圧痕はイネのものと考えられる。

第V章 考 察

今回の調査によって検出した遺構及び出土遺物を分析し、考察を加える。なお、今回の発掘調査では3つの調査区を設定したが、これらは同一の遺跡範囲内にあるとはいえ、位置・立地などがまちまちで検出遺構・出土遺物にも差異が認められることから、調査区ごとに考察を行うものとする。また、3区については検討材料に乏しいため割愛する。

1. 1区

1区において検出した遺構は竪穴住居跡9軒、溝跡5条、土坑9基である。また、遺構内外から弥生土器、土師器、土製品、石器、石製品、金属製品、鉄滓が出土している。出土遺物の主体を占めるのは竪穴住居跡出土の土師器である。各竪穴住居跡の出土遺物は、床面・床面直上・貯蔵穴内などから出土の住居に伴うと考えられる遺物も、堆積土等出土の遺物も同様の特徴を有している点、堆積土出土遺物のほとんどは床面に近い下層部から出土している点、竪穴住居跡と重複している土坑からの出土遺物は弥生土器であり、完全に分別することが可能である点、竪穴住居跡と重複する溝跡からの出土遺物も竪穴住居跡出土遺物と特徴を一にし、溝埋没時に竪穴住居跡内の遺物が混入したものと考えられる点から、各竪穴住居跡出土の遺物は、その出土層位にかかわらずおおむね住居跡機能時のものと捉えて差し支えないと判断したため、細分類に関しては、主として各竪穴住居跡出土の遺物出土について、出土層位によらず第IV章で図示したものを中心に進めることによって全体的な遺物様相を把握し、その後、遺構の機能時期に関しては遺構に伴うと考えられる遺物に限定して考察する。

(1) 遺物の分析

①土師器の分類

出土した土師器の器種は坏・高坏・鉢・台付鉢・小型壺・壺・甗・甑である。以下、器種ごとに細分類を試みる。

[坏] 主に体部から口縁部にかけての形態で細分できる。

I：平底で、体部が内弯し、口縁部が屈曲して短く外反するもの。屈曲の内面に明確な稜が認められる。

II：丸底で、体部が内弯し、口縁部が屈曲して外反するもの。屈曲の内面にゆるい稜が認められる。

III：平底で、体部が内弯気味に立ち上り、そのまま口縁にいたるもの。

[高坏] 坏体部から口縁部にかけての形態、坏外面下端部の形態、脚柱部の形態、脚柱部と裾部との接合部の形態の各々について細分できる。

○坏体部～口縁部の形態

I：坏体部が直線的に外傾し、そのまま口縁にいたるもの。

II：坏体部が直線的に外傾し、口縁付近で内側に屈曲して直立気味になるもの。

III：坏体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が屈曲して短く外反するもの。坏の細分における「坏I」

[坏]



I類



II類

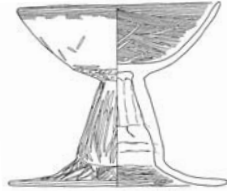


III類

[高坏]



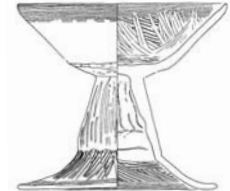
IAia類



IAib類



IBic類



IIaib類



IIIA類



IVC類



ii類

[鉢]



I類



II類



III類



IV類

[台付鉢]



[小型壺]



IA類



IIB類



C類

[壺]



IA類



IB類



II類



III類

[]



[甑]



I類

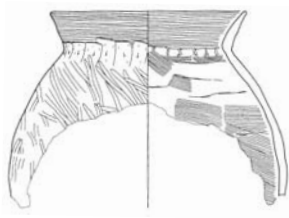


II類

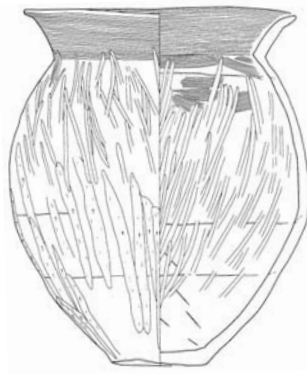
(縮尺: 1/6)

第40図 土師器分類図(1)

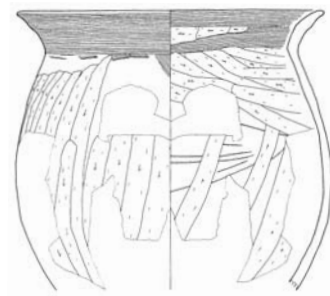
[甕]



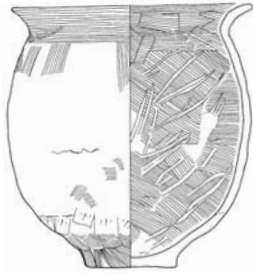
I A類



I B類



I C類



II類



III類

(縮尺：1/6)

第 41 図 土師器細分類表 (2)

と同一形状である。

IV：坯体部外面に下向きの突帯が巡るもの。突帯に対応する内面はごくゆるい屈曲が形成される。

○坯部下端外面の形態

A：単純な稜が形成されるもの。稜の直下をヘラケズリすることによって稜を作り出す。

B：稜と、その直上に段が形成されるもの。稜と段との間を横方向にヘラミガキすることによって、稜と段を際立たせている。

C：横向きの突帯が巡るもの。

○脚柱部の形態

i：中空の円錐台状で、外面調整に縦位のヘラミガキ・ナデなどが施されるもの。

ii：中空の円錐台状で、円窓を有し、外面調整は縦位の緻密なハケメが施されるもの。

○脚柱部と裾部との接合部の形態

a：明瞭な屈曲を形成するもの。

b：脚柱部の下部がわずかに内屈し、その直下に明瞭な屈曲を形成するもの

c：ゆるい屈曲が認められるもの。屈曲が曲線的で屈曲線が認められないが、器壁の角度及び調整の変化によって脚柱部と裾部とを区別することができる。

d：脚柱部下端が曲線的に広がり裾部へといたるもの。屈曲は認められず、裾部外反の開始位置と裾部調整の開始位置にも関連がなく、脚柱部と裾部とを区別することができない（本調査においては出土せず。比較のため掲載）。

e：脚柱部から連続的に外反し、ラッパ状に裾部へといたるもの（本調査においては出土せず。比較のため掲載）。

今回の調査において出土した高坏のうち 55 点について集計したところ、表 1・2 のような結果と

表 1 高坏細分類集計表

坏体部			坏下端部			脚柱部			裾接合部		
細分	個数	%	細分	個数	%	細分	個数	%	細分	個数	%
I	27	73.0	A	35	85.4	i	24	96.0	a	16	66.7
II	4	10.8	B	3	7.3	ii	1	4.0	b	6	25.0
III	2	5.4	C	3	7.3				c	2	8.3
IV	4	10.8									
計	37		計	41		計	25		計	24	

表 2 高坏坏部・脚部形態集計表

坏部形態		脚部形態	
坏体部	坏下端部	脚柱部	裾接合部
I (27)	A (24)	i (24)	a (16)
	B (3)		b (6)
II (4)	A (3)		c (2)
	? (1)	ii (1)	? (1)
III (2)	A (2)		
IV (4)	D (1)		
	? (3)		

なり、坏体部 I 類、坏下端 A 類、脚柱部 i 類、裾接合部 a 類が主体を占めることが判明した。坏部の形態では I A 類、脚部の形態では i a 類が主体的である。なお、裾接合部の形態 a 類と b 類はともに明瞭な屈曲を有するという点では共通性があり、2つを合わせると 90%以上の割合となる。全体形が判明するものでは I A i a 類が 7 点、I A i b 類が 2 点、I B i c 類が 2 点、II A i b 類が 1 点で、I A i a 類が主体となることがわかる。

[鉢] 主に体部から口縁部にかけての形態で細分できる。

- I：平底で、体部が内弯気味に立ち上がり頸部で屈曲して口縁部が外傾するもの。
- II：平底風の丸底で、体部が内弯気味に立ち上がり、そのまま口縁にいたるもの。
- III：体部が直線的に外傾し、そのまま口縁にいたるもの。やや大形の粗製品。
- IV：平底で、体部が内弯気味に立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部が外傾するもの。2重口縁。

[台付鉢] 1点のみ出土である。体部が内弯気味に立ち上がり、そのまま口縁にいたるもので、底部に円盤状の台が付く。丹精な造りで胎土も良質である。

[小型壺] 口縁部の形態、底面及び体部の形態の各々について細分できる。

○口縁部の形態

- I：直線的に外傾し、そのまま口縁にいたるもの。口縁部高と体部高がほぼ等しいか、やや口縁部高が大きくなる。
- II：直線的に外傾し、口縁付近で内側に屈曲して直立気味になるもの。口縁部高と体部高とでは、やや口縁部高が小さくなる。

○底面及び体部の形態

- A：平底で、球状のもの。
- B：平底で、扁球状のもの。
- C：丸底で、下膨れ扁球状のもの。

今回の調査において出土した小型壺のうち口縁部と体部の組み合わせが判明するものは 7 点で、組み合わせは I A 類（3 点）及び 2 B 類（4 点）の 2 通りが認められる。

[壺] 全体の形状により細分できる。

- I：体部が扁球形で、口縁部が長く直線的に外反するもの。底面及び体部の形態によりさらに細分で

②各遺構の土師器出土状況

①で分類した土師器を遺構ごとにまとめた結果は表3のとおりである。表の下端は細分類を検討する際に対象とした遺物、上段は床面・床面直上・貯蔵穴内など、その竪穴住居跡に伴うと考えられる遺物の数である。削平・攪乱などにより全体的に残存状態が悪い遺構が多く、器種の欠損等があるものと考えられるが、全体としては以下のような特徴を見出すことができる。

○坏・高坏が共伴し、その比率はほぼ同率か、高坏が高率である。高坏が高率で出土する竪穴住居跡は10軒中7軒と主体的である。

○坏はⅡ類が主体的で、Ⅰ類がそれに次ぐ。Ⅲ～Ⅵ類は各1点と客体的である。なお、坏Ⅰ類とⅡ類との違いは口縁部の屈曲に対応する内面の稜の強弱であり、外見的には同様の特徴を有するものと考えられることができる。この場合、Ⅰ類及びⅡ類の合算比率は73.6%と高率で、全ての竪穴住居跡において出土が認められることになる。

○高坏は坏体部Ⅰ類、坏底部A類、脚柱部ⅰ類が主体となり、どの竪穴住居跡でもこれらの出土が認められる。その他の細分類に該当するものはいずれも客体的で、主体となる高坏がある程度多数出土している遺構においてのみ出土する傾向がある。

○小形壺が出土する竪穴住居跡はSⅠ1・2・3・4・5・6・7で、出土しない竪穴住居跡はSⅠ8・9である。出土している竪穴住居跡においても、複数出土しているのはSⅠ1・4のみで、他は1点のみである。

○壺Ⅰ類のうち全体形が把握できるものはすべて、体部最大径と口縁部最大径、体部高と口縁部高がそれぞれほぼ等しいものである。

○甕Ⅰ類は体部形状が縦長楕円形であるものが主体となり、球形のものはごく少数である。

③出土土師器の編年的位置付け

これらの土師器は、その器種構成や器形の特徴から古墳時代中期南小泉式期のものと位置付けられる。南小泉式は、昭和28年度の伊東信雄氏による仙台市遠見塚古墳概況調査報告において、隣接する南小泉遺跡から関東地方の和泉式に相当する土師器として紹介され（伊東：1954）、氏家和典氏によって東北地方出土土師器の第二型式土器群（南小泉Ⅱ式）として示された（氏家：1957）ものである。その後、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡の発掘調査成果から、氏家氏が示した南小泉式と後続する引田式と区別不能とし、両者一括して南小泉式とする見解が示された（白鳥・加藤：1974）。以降、この見解は県内の古墳時代中期の土器型式に関する基本的な視点として広く用いられるようになり、多くの調査報告等でこの見解に基づいた該期の理解が試みられることとなる。一方、この時期は竪穴住居の構造上最大級の変化であるカマドが出現する時期であり、土器様相にも大きな変化が読み取れることから、該期の土器様相を、南小泉式1型式をもって説明することに無理があるとする意見も出されたが、詳細な議論を経ることなく、現在までのところおおむね該期の土器様相の変化については南小泉式を細分することによって把握されている。近年では資料の蓄積に伴い、「南小泉式」「引田式」という型式名に拘らず、広く古墳時代中期の土器様相の変化について検討を加える試みもなされている（高橋：1999・吾妻：2003）。この件に関してはこれまで多くの研究者が詳細を記していることからこれ以上記すことはせず、該期の土器様相の変化に関するおおまかな認識を挙げ、それに基づいて論

を進めていくこととする。

[古墳時代中期の土器様相変化の認識]

- 基本的な器種構成は坏・高坏・鉢・小形壺・壺・甑・甕である。
- 坏は俯瞰すると多様な形態のものが混在する。古い時期には種類が少なく客体的な存在であるが、時期の下降に伴い種類が増加し、主体的となる。
- 高坏は本考察における高坏 I A i a 類を基本形とし、各部形態に変異が認められる。古い時期では主体的な器種であるが、時期の下降に伴い客体化する。この出土量の変移はおおむね坏のそれと反比例的な関係にある。
- 小形壺は古い時期にのみ存在する。
- 壺は本考察における壺 I 類が主体となる。古い時期の壺 I 類は体部扁球形で、体部径と口縁部径、体部高と口縁部高のそれぞれがほぼ等しいが、時期の下降に伴い口縁部径・口縁部高ともに小さくなる。
- 甕は古い時期では球胴形のものが主体的だが、時期の下降に伴い縦長球胴形になる。
- 甑は本考察における甑 I 類が古い時期から存在する。甑 I 類は古墳時代前期塩釜式においても形態に変異なく確認される器形である。時代が下降すると、器高が高く体部が直立気味になり、口縁部が屈曲して外反する無底のものが現れる。

本調査区における出土遺物の特徴は前述のとおりであり、該期でも古い段階のものであると理解することができる。該期の遺物を伴う例としては、多賀城市山王遺跡八幡地区 S I 5288 B・5306 竪穴住居跡（千葉：1992）、同 S X 230 遺物包含層（菅原・吾妻：1994）、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡第 1・2 号竪穴住居跡（前掲）が挙げられる。蔵王町内では塩沢北遺跡第 2 溝跡（小川：1980）、都遺跡 S I 2 竪穴住居跡（佐藤・小泉：2005）などに類例を求めることができる。これらはいずれも南小泉式期でも古い段階のものと考えられているが、その様相には違いが見られ、下記のように時期差として理解されている。なお、山王遺跡八幡地区の竪穴住居跡と遺物包含層は隣接しており、集落とそのゴミ捨て場という関係であり、一括して考えることが可能である。

（旧段階）山王遺跡八幡地区集落、塩沢北遺跡第 2 溝跡

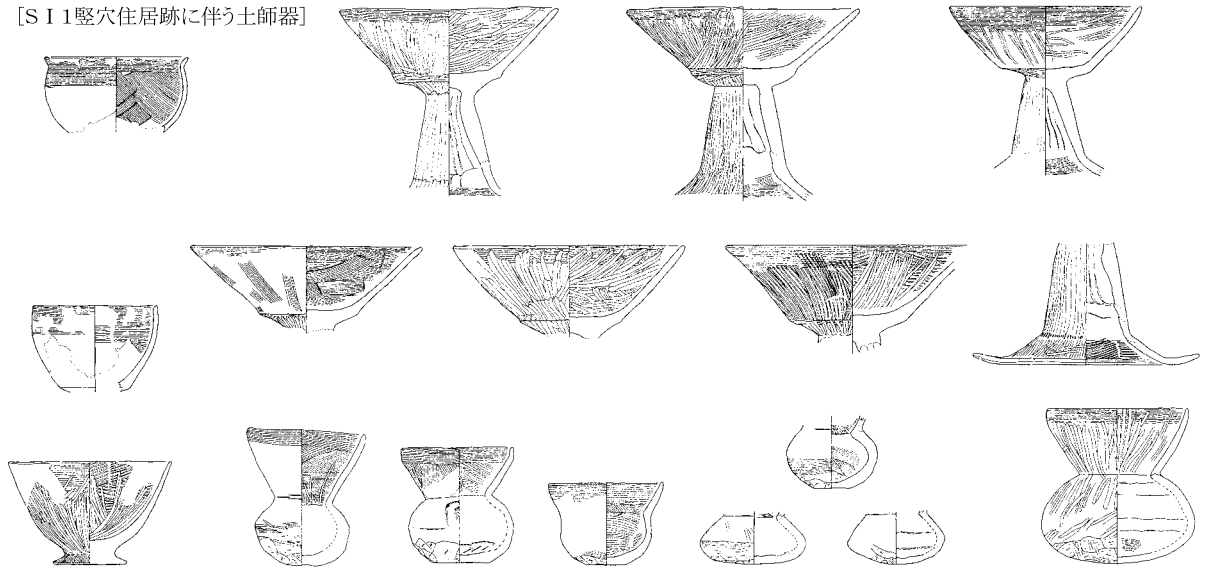
（新段階）岩切鴻ノ巣遺跡第 1・2 号竪穴住居跡、都遺跡 S I 2 竪穴住居跡

これらの二つの段階における様相の変化とは、坏の種類と数量増加と、それと反比例的に高坏が減少する点、小形壺が消失する点、壺（I 類）の口縁部が縮小化する点、甕の体部において球状のものが漸減し、縦長球状のものが徐々に増加する点に要約される。このような点を踏まえた上で、住居に伴うと考えられる遺物数が比較的多い S I 1・4 竪穴住居跡について比較検討を行う。

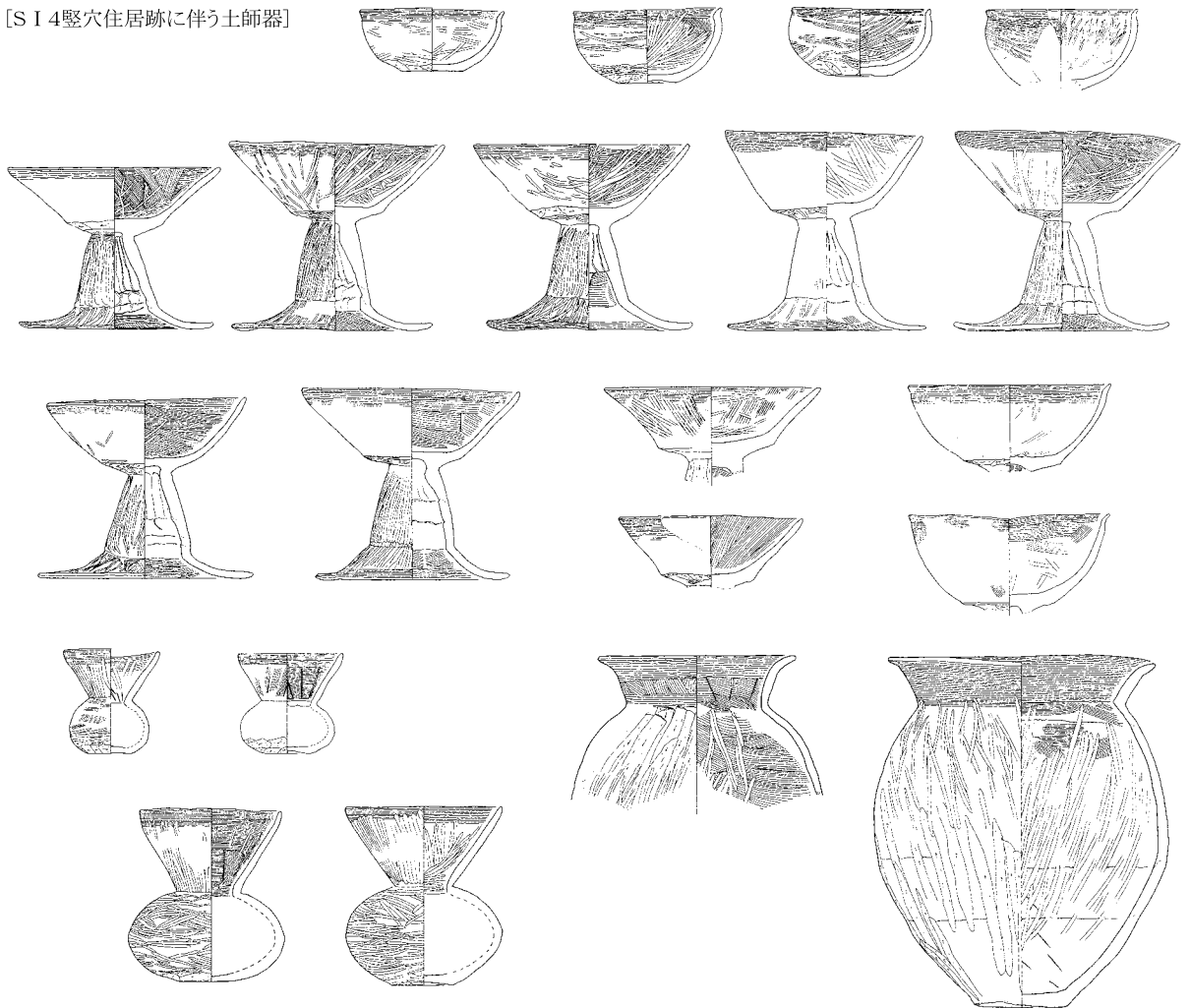
[S I 1 竪穴住居跡]

S I 1 に伴う遺物は 19 点で、坏 II（1）、高坏 I A i a（1）・I B i c（2）・I A（3）・i a（1）、台付鉢（1）、小形壺 I A（1）・II B（3）・A（1）・B（2）・C（2）、壺 I A（1）である。基本的な器種構成から鉢・甑・甕を欠く。特に甕はどの遺構でも普遍的に伴う器種であるため、これ

[S I 1 竪穴住居跡に伴う土師器]



[S I 4 竪穴住居跡に伴う土師器]



(縮尺：1/6)

第 42 図 S I 1・4 竪穴住居跡に伴う土師器

を欠くということは相当の理由があるものと思われる。本住居跡は火災住居と考えられており、住居廃絶時の土器持ち去りという要素を考えにくい状況である。強く削平を受けている部分があるものの、他の遺物の出土数を考慮すると、特定器種が選択的に少なくなる理由にはならないだろう。小形壺が多数出土している点、精製土器と考えられる台付鉢が出土している点から、もともと器種構成が小形器種・精製器種に偏っている可能性もある。坏と高坏の比率は明確に高坏が高率で、小形壺を含み、壺Ⅰ類の口縁部には縮小化が認められないことから、本住居は上記２段階の中でも旧段階に該当するものであると考えられる。

[SⅠ4 竪穴住居跡]

SⅠ4に伴う遺物は21点で、坏Ⅰ(4)、高坏ⅠA i a(5)・ⅠA i b(2)・ⅠA(2)・ⅢA(2)、小形壺ⅠA(1)・ⅡB(1)、壺ⅠA(1)・ⅠB(1)、甕ⅠB(2)である。基本的な器種構成から鉢・甕を欠く。坏と高坏の比率は明確に高坏が高率で、小形壺を含み、壺Ⅰ類の口縁部には縮小化が認められないことから、本住居もSⅠ1と同様、旧段階に該当するものと考えられる。ただし、本住居跡出土の甕の体部はやや縦長球状を呈しており、球状のものが認められない点も特徴として挙げられる。

次に、これらの竪穴住居跡出土遺物を古段階の遺物群と詳細に比較してみる。比較対象は山王遺跡八幡地区集落出土土器群(以下山王遺跡土器群)と、SⅠ1・4両竪穴住居跡に伴う土器をまとめた計40点(以下本遺跡土器群)である。

器種は上記のとおりで、坏に関しては本遺跡土器群がⅠ・Ⅱ類が認められるのに対して山王遺跡土器群ではⅠ・Ⅱ類のほか、本遺跡では確認されない形態が4種認められる。

高坏に関しては、本遺跡土器群では全体形が把握できるものはⅠA i a類が6点と主体を占める。坏部形態に限定すればⅠA類が13点、ⅠB類が2点、ⅢA類が2点とⅠA類基調が明確で、ⅠA類とⅠB類の比率は6.5:1である。一方、山王遺跡土器群では、高坏坏部形態ⅠA類が主体となり、ⅠB類がそれに次ぐ。その数量はⅠA類が28点、ⅠB類が16点、その他7点で、ⅠA類とⅠB類の比率は1.75:1となる。また、山王遺跡土器群における高坏坏部形態の特徴として、坏下端部外面に稜・段・突帯などの区画を持つもの(本考察における高坏分類のA~D類)が主体を占めるが、区画のないものが若干認められるという点が挙げられる。これは本遺跡土器群には見られない特徴である。高坏脚部は本遺跡土器群ではi a類が7点、i b・i c類が各2点と、i a類基調が明確であるが、山王遺跡土器群でもi a類46点、i c類5点と、ほぼ同様の様相を呈する。ただし、山王遺跡土器群ではi d・e類が少数ながら確認されるのに対して、本遺跡土器群ではこれが認められない点、逆に本遺跡土器群において認められるi b類が山王遺跡土器群では認められない点に違いが認められる。なお、i b類については蔵王町塩沢北遺跡第2溝跡の出土遺物に多く認められるが、これ以外の遺跡ではあまり認められない形態である。円田盆地周辺のみ地域的特徴の可能性もあるが、今後の検討課題としておきたい。以上のように、高坏についてはおおむね様相を等しくするものの、坏下端外面の区画の有無、及び脚柱部と裾部との屈曲の有無において、本遺跡土器群に比して山王遺跡土器群では無区画・無屈曲化する傾向が見て取れる。

小形壺に関しては、本遺跡土器群ではⅠA類2点、ⅡB類4点、体部のみのものでA類が1点、B・

C類が各2点認められ、II B類主体であるといえる。これは山王遺跡土器群でも同様で、II B類が主体となり、体部のみC類が認められる。他に、山王遺跡土器群では口縁部が半ばで屈折する形態のものが見られるが、これは本遺跡土器群では認められないものである。

壺I類に関しては、本遺跡土器群ではIA類が2点、IB類が1点認められる。山王遺跡出土遺物群でもほぼ同様で、IA・IB類ともに認められる。小形壺同様に、口縁部が半ばで屈折する形態のものが山王遺跡土器群にのみ認められる。

甕に関しては、本遺跡土器群ではIB類が2点認められる。甕I類は体部形状が球状・縦長球状の両方を含む細分類であるが、この2点はいずれも縦長球状である。本遺跡全体でも、甕体部は球状・縦長球状の両者が認められるが、後者が主体的である。一方山王遺跡土器群では体部球状のものが大半を占める。口縁部形態は、本遺跡土器群はB類のみで、遺跡全体に拡大してもやはりB類が主体を占め、A類が客体となるが、山王遺跡出土土器群では逆にA類が主体的で、B類はごく少数認められるに過ぎない。

その他、本遺跡土器群では台付鉢が認められるが、山王遺跡土器群には認められない点、本遺跡土器群では認められず、本調査区全体でも破片のみ確認されるに過ぎない壺III類が山王遺跡土器群では相当数認められる点などの差異を挙げることができる。なお、参考までに本調査区全体の様相について補足すると、上記に加え、本調査区では甑I・II類が出土しているが、山王遺跡土器群ではII類のみ出土している(SI 5288 B)点、両者ともに甕が出土している点などが挙げられる。

以上、本遺跡土器群と山王遺跡土器群との比較を行った結果、特に高坏脚部の形態と甕体部の形態のそれぞれについて、様相に違いが見られた。高坏脚部形態については、時期が下降するのに従って脚柱部が円錐形から円柱状に変化し、裾部との境に明瞭な屈曲線が認められる傾向が指摘されている。さらに、脚部全体が連続的に外反する形態のものは南小泉式の前段階である塩釜式の高坏脚部の形態を継承するものであり、より古相を呈するものであるという見解もある。また、甕体部の形態でいえば、前述のとおり縦長球状化は時期の下降とともに表出することが判明している。これらの見解を全て容れれば、本遺跡土器群は山王遺跡土器群と比較してわずかながら新相を呈するものと理解することができる。しかし、南小泉式へと移行した時点でほぼ完全な形で出現する「坏体部が外反してそのまま口縁部にいたり、坏部下端外面に稜を持ち、脚柱部が円錐台状で、明確に屈曲して裾部を形成する」高坏(本考察における高坏IAi a類)が、前型式からの変異の結果であるとは理解しがたい部分である。仮に、南小泉式期への移行に伴い、高坏IAi a類などを中心とする器種構成・形態の変化とは別に、それと並行して前段階からの器種・形態がわずかに継承されたとすれば、南小泉式期の初期段階においてのみ前型式からの器種・形態の遺物が共伴する可能性はある。しかしこの現象は該期の普遍的な現象として捉えることはできず、その地域において南小泉式期の土器が採用された際にどの程度前期的要素からの影響力が残されたのかをはじめ、さまざまな地域的事実が影響してくるものと思われる。前期的様相が色濃いことがすなわち南小泉式期でもより古相を呈することに異論はないが、前期的様相が認められないことを理由に、より新相を呈すると言い切ることは躊躇を覚えるものである。高坏脚部の様相に関する私見であったが、本遺跡土器群を理解するうえで重要な要素となりうる件であるため提示した。その上で、現段階においては積極的に否定する材料も見当たらないことから、本遺跡土器群と山王遺跡土器群との関係は時期差による可能性があり、そうであれば前者が後者

に比してより新相を呈する可能性があるとして述べておくこととする。

なお、本遺跡における他の竪穴住居跡に関しても、遺物の様相に変化が見られないことから S I 1・4 とほぼ同時期のものと考えることができよう。

[S I 5 竪穴住居跡出土遺物について]

S I 5 は本遺跡の竪穴住居跡にあって、唯一遺物の出土状況に違いが認められる住居跡である。すなわち、堆積土中の遺物がきわめて多く、その反面床面・床面直上の遺物がきわめて少ないという様相を呈するというもので、若干の考察を要するものと判断した。

本住居跡出土遺物は表 4 のとおりである。検討対象とした遺物はほとんど全てが堆積土中のものである。遺物には坏 I 類、高坏 I A・A i a 類、小形壺 B・C 類、壺 I B 類、甑 II 類、甕 I A・I B・III 類が出土している。また、床面から頸部以上を欠くが、残存器高 15.6cm の、体部球状の壺が出土している。床面出土で本住居に伴うと考えられるのはこの壺のみである。土師器以外の出土遺物では、床面から鉄滓が、床面直上から鉄鏝が、堆積土から砥石が出土している。鉄滓は確実に本住居に伴うもので、鉄鏝及び砥石は出土位置・状況から本住居に伴うと考えられるものである。

堆積土から出土した土師器は多量で、未接合段階でコンテナ 3 箱分、ほとんどが小片である。接合し、ある程度まとまった形になるものも多く、そうしたものを抽出して図示・掲載した。本住居跡は残存状況が良く、最大壁高は床面から 50cm であるが、遺構確認面付近の堆積土上層でも遺物量は多く、やはり接合してまとまった形になるものが見られる。一方、床面及び床面直上の遺物量は少ない。堆積土中の遺物を概観すると、坏が複数種出土する点、高坏 II 類が出土する点、鉢 IV 類が出土する点、甑 II 類が出土する点の他は、本遺跡内の他の住居跡に伴う遺物と様相に違いは認められない。高坏 II 類に関しては付近の S I 6 に伴う形で出土していることから、あるいは何らかの関連があるものかもしれない。また、鉢・甑に関しては元々比率的に頻出する器種ではないことから大きな問題点とはならないであろう。全体的にみて、やはり他の住居跡と同じ様相を呈するものと把握すべきである。

このような様相から、本住居は廃絶後に集落のごみ捨て場的な使われ方をしたということが考えられる。堆積土中の遺物がある程度接合するも完形となるものがないこと、堆積土上層までまとまった遺物の出土量があり、ある程度接合可能なものもあること、堆積土中の遺物と周囲の住居跡の遺物との様相に違いが見出せないことなども説明できる。なお、この場合、「集落の形成→S I 5 の建築→S I 5 の廃絶→S I 5 をごみ捨て場として利用→他住居の廃絶→集落の廃絶」という過程を大枠としてたどることが可能だが、各住居跡出土遺物間で土器様相に違いを見出せず、S I 5 以外の遺構堆積土や表土などからも様相を異にする遺物を確認することができないことから、集落の形成から集落の廃絶までの全過程がひとつの土器様相のまとまりという、比較的短い時間枠の中で行われたことが伺える。

(2) 遺構の分析

①各遺構の年代

遺物の分析の項で述べたとおり、1 区において検出した竪穴住居跡から出土する土師器は全て様相を等しくするもので、古墳時代中期南小泉式期の最初期段階に位置付けられるものである。吾妻俊典

氏は、該期土器の編年案と東北南部のカマド出現期の土器様相に関する論巧において、須恵器編年と年輪年代の成果に照らし、土器組成ごとの暦年代の推定を試みている（吾妻：前掲）。それによると山王遺跡 S X 230 出土土器群は吾妻氏編年案の中期土器組成 1 に該当する土器群で、5 世紀前葉頃のものとして想定している。また、岩切鴻ノ巣遺跡第 1・2 号竪穴住居跡出土土器群は土器組成 2 に該当し、5 世紀中葉と想定している。本調査区の竪穴住居跡出土土器については山王遺跡 S X 230 と並行か、もしくはわずかに新しい可能性があるため、その年代を 5 世紀前葉～前葉後半と位置付けることができよう。

また、竪穴住居跡以外の遺構の年代であるが、S D 3 溝跡については、堆積土下層から竪穴住居跡出土遺物と様相を等しくする遺物がまとまって出土することから、竪穴住居跡とほぼ同時期以降のものと考えられる。土坑は遺物が出土しないものも多く、機能時期を推測する材料に乏しいが、S K 7・8・9 は竪穴住居跡と重複し、それより古いことから古墳時代中期以前のものであることは確実である。さらに S K 7 は堆積土から弥生土器の破片がある程度まとまって出土することから弥生時代の遺構である可能性がある。

②古墳時代中期の集落の様相

本調査区において検出した竪穴住居跡は計 9 軒である。立地は円田盆地東辺部にある舌状の張り出し頂部で、緩い西斜面上である。調査区の北東部はやや切り立った斜面で、急速に標高を減じて沢地へとつながる。一方南西部は調査区縁から 20 m 程度までは同じような緩斜面が続き、その後傾斜がきつくなる。従ってこれら竪穴住居跡が構成する集落は、調査範囲よりさらに西側に広がる可能性がある。S I 4・8・9 の西縁を結ぶラインは丘陵の尾根線とほぼ一致しており、このラインより東側では竪穴住居跡が確認されないため、このラインが集落の東縁である可能性がある。また、S I 1 より北西でも竪穴住居跡が確認されないため、S I 1 が集落の北西縁にあたる可能性があり、これらを加味すると丘陵尾根線より西側の緩斜面に帯状に集落が存在していたことが伺える。

集落内の竪穴住居跡はどれもほぼ同じ方向で建築されている。9 軒の住居跡は全てが同時存在していたものではなく、堆積土内の遺物の状況から少なくとも S I 5 は集落廃絶以前に廃絶され、ごみ捨て場的な用途に供されていたものと思われる。また、S I 3 と S I 4 は、重複はしていないものの 2 軒の間隔は約 80cm で、同時に存在していたと考えにくい。さらに、S I 3・8 は、それ以外の住居では見られないカマドを有していることから、集落内でも比較的新しい建物である可能性がある。以上のように、重複関係はないものの、これら竪穴住居跡の機能時期に時間差を見出さなければ説明できない点がいくつかある。一方、出土遺物に様相の変化が認められないことから、集落自体の存続期間がごく短いものであったことがわかっている。これらを総合すると、集落の形成から廃絶までの時間幅は小さいものの、その間に住居の廃絶と新規建築が行われたものと考えられる。

S I 3・8 竪穴住居跡にはカマドが設けられている。県内における同時期の竪穴住居跡でカマドを伴う例は、仙台市南小泉遺跡第 13 次調査第 1 号竪穴住居跡に見られるのみであり、県内のカマド出現期のものとして位置付けられていることから、S I 3・8 においても詳細に検討しなければならないところである。しかし、両住居とも伴う遺物が少なく、その機能時期を精密に決定することができない。堆積土等からのものも含めた土器全体の様相が本調査区内の他の住居跡に伴う遺物と変化が認められ

ないことから、同時期のものと類推することができるのみである。

S I 5 床面から鉄滓が、床面直上から鉄鏝が、堆積土から砥石が出土している。床面には小規模な焼面が複数認められる。これらを考え合わせると本住居では小鍛冶が行われていた可能性がある。県内における同時期の鍛冶遺構の例としては山王遺跡八幡地区 S I 5226 が挙げられる（千葉・鈴木：1997）。この住居跡では小形の碗形鍛冶滓と高坏脚転用の鞆羽口などが出土しており、鍛冶工房と考えられている。S I 5 においては鉄滓の存在と床の焼面以外に鍛冶を行ったことを伺わせる情報は得られず、専用の工房として機能したものは不明であるが、該期集落内における金属加工の様相を伺うことができる。

2.2区

2区において検出した遺構は竪穴住居跡1軒、溜池状遺構1基である。また、遺構内外から弥生土器、土師器、ロクロ土師器、須恵器、中世陶器、剥片が出土しており、主体を占めるのは竪穴住居跡出土のロクロ土師器である。遺構数・遺物量ともに少なく、特に遺物は凶化できたものもほぼ皆無であるので、ここでは遺構ごとにその出土遺物の特徴を述べ、可能な限り検討していくこととする。

[S I 10 竪穴住居跡]

床面・貯蔵穴内・住居堆積土などから土師器・ロクロ土師器・須恵器が出土している。凶化できたものはない。主体を占めるのはロクロ土師器で、坏と甕が確認できる。須恵器は甕の肩部から頸部にかけての破片である。機能時期はロクロ土師器が出土することから平安時代と考えられるが、遺物からの情報が乏しくこれ以上詳細な検討は不可能である。

本住居はカマドの作り替えがあることから相当の期間機能したものと考えられる。立地は沢地の東側の段丘上で、他に同時期のものと思われる遺構は存在しないことから、集落ではなく単独で存在していたものと思われる。

[S X 1 溜池状遺構]

堆積土から土師器・ロクロ土師器・須恵器・中世陶器が出土している。中世陶器は常滑産と考えられる。機能時期については出土遺物から中世を中心とした時期としておく。

堆積土の状況から沼地のような埋没をしたものと思われ、埋没過程が相当長期間であったことを伺わせる。掘り直しや清掃の痕跡は観察されなかった。底面から2ヶ所の落ち込みを確認した。堆積土の状況からS X 1 自体の成立時から存在したものであるが、その機能を説明できる材料はない。また、今回調査した範囲では上手側の入水路も下手側の出水路も確認されなかった。調査区外に位置していた可能性もあるが、水源に関しては、沢床に位置することから湧水を利用していた可能性もある。

第Ⅵ章 ま と め

1. 中沢 A 遺跡は、宮城県南部、刈田郡蔵王町大字平沢字中沢に所在する。遺跡は円田盆地の南東辺縁部の愛宕山丘陵に位置する。愛宕山丘陵は東部の丘陵頂部から西の円田盆地に向って流入する複数の沢地によっていくつもの舌状の張り出しが発達しており、本遺跡もそのような地形上に立地する。

2. 今回の発掘調査は町道立目場線改良事業・ふるさと緊急農道整備事業（東根北部線農道改良事業）を原因として実施した。調査区は 3 区に別れ、調査面積は計約 2,250 m²である。

3. 1 区は円田盆地に舌状に張り出した西向き緩斜面上に位置する。竪穴住居跡 9 軒・溝跡 5 条・土坑 9 基が検出された。竪穴住居跡はいずれも古墳時代中期南小泉式期のものである。その機能年代は 5 世紀前葉～前葉後半と考えられ、南小泉式期の中でも最初期段階に位置付けられる。また、竪穴住居跡からの出土遺物はどれも同じ様相を呈していることから、この集落の存続期間が短いことが判明した。

出土遺物は弥生土器・土師器・石器（スクレイパー・石鏃）・土製品（勾玉状）・石製品（勾玉・白玉）・金属製品（鉄鏃）・鉄滓などで、主体を占めるのは古墳時代中期の土師器である。

4. 2 区は 1 区の北東側の沢地に位置する。竪穴住居跡 1 軒・溜池状遺構 1 基が検出された。竪穴住居跡は平安時代、溜池状遺構は中世を中心とした時期のものである。竪穴住居跡は周辺に同時期の遺構が認められないことから単独で存在していたものと考えられる。

出土遺物は弥生土器・土師器・ロクロ土師器・須恵器・中世陶器・剥片などで、主体を占めるのはロクロ土師器である。出土量は少量である。

5. 3 区は遺跡範囲西端部の円田盆地辺縁部に位置する。溝跡 4 条・土坑 2 基・柱穴少数が検出された。これらの機能時期・用途は不明である。また、3 区からは遺物は出土しなかった。

6. 円田盆地は県内における古墳時代前期の最初期段階にあたる集落である大橋遺跡をはじめ、多くの該期集落が営まれた地域であり、比較的早い段階から古墳文化を享受した地域であることが知られている。今回の調査で、本遺跡 1 区の集落が県内における古墳時代中期の最初期段階にあたる集落であることが判明したことにより、少なくとも古墳時代前半期においては、近隣地域の中でも先行して新しい文化・様式が導入された地域であった可能性がある。

引用・参考文献（発表年次順）

- 伊東信雄（1954）「遠見塚古墳」 宮城県文化財調査報告書第1集 宮城県教育委員会
- 氏家和典（1957）「東北土師器の型式分類とその編年」 歴史第14輯 東北史学会
- 白鳥良一・加藤道男（1974）「岩切鴻ノ渠遺跡」－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ 宮城県文化財調査報告書第35集 宮城県教育委員会
- 小川淳一（1980）「塩沢北遺跡」－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第69集 宮城県教育委員会
- 丹羽茂（1983）「宮前遺跡」－朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡 宮城県文化財調査報告書第96集 宮城県教育委員会
- 佐藤甲二・小野寺和幸他（1985）「南小泉遺跡第12次発掘調査報告書」 仙台市文化財報告書第80集 仙台市教育委員会
- 鎌田芳宏・佐藤智雄（1987）「宮城県仙台市南小泉遺跡」 埋蔵文化財発掘調査研究所報告集第4集 南小泉遺跡調査団
- 蔵王町史編纂委員会（1987）「蔵王町史 資料編Ⅰ」 蔵王町史編纂委員会
- 佐藤 洋（1987）「南小泉遺跡第14次発掘調査報告書」 仙台市文化財報告書第109集 仙台市教育委員会
- 鎌田芳宏・遊佐和子（1988）「宮城県仙台市南小泉遺跡」 埋蔵文化財発掘調査研究所報告集第11集 南小泉遺跡調査団
- 加藤道男（1989）「宮城県における土師器研究の現状」－考古学論叢Ⅱ 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 鈴木真一郎・木皿直幸（1990）「白山遺跡ほか」－寂光寺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第135集 宮城県教育委員会
- 佐藤 洋（1990）「南小泉遺跡第16～18次発掘調査報告書」 仙台市文化財報告書第140集 仙台市教育委員会
- 阿部 恵・須田良平・岩見和泰（1991）「新峯崎遺跡」 村田町文化財調査報告書第9集 村田町教育委員会
- 岩見和泰・佐藤憲幸（1991）「合戦原遺跡」－合戦原遺跡ほか 宮城県文化財調査報告書第140集 宮城県教育委員会
- 工藤哲司（1991）「南小泉遺跡第20次発掘調査報告書」 仙台市文化財報告書第153集 仙台市教育委員会
- 高倉敏明（1991）「山王遺跡・市川橋遺跡」－多賀城市史4 多賀城市史編纂委員会
- 古川一明・白鳥良一（1991）「土師器の編年 東北」 古墳時代の研究6 雄山閣
- 真山 悟（1991）「藤田新田遺跡」 宮城県文化財調査報告書第142集 宮城県教育委員会
- 千葉孝弥（1992）「山王遺跡－第12次調査概報－」 多賀城市文化財調査報告書30集 多賀城市教育委員会
- 藤沢 敦（1992）「引田式再論」 歴史第79輯 東北史学会
- 後藤秀一他（1994）「山王遺跡八幡地区の調査」 宮城県文化財調査報告書第162集 宮城県教育委員会
- 後藤秀一・村田晃一・岩見和泰（1994）「藤田新田遺跡」 宮城県文化財調査報告書第163集 宮城県教育委員会
- 菅原弘樹・吾妻俊典他（1994）「山王遺跡Ⅰ－古墳時代中期遺物包含層編－」 宮城県文化財調査報告書第161集 宮城県教育委員会
- 多賀城市教育委員会（1997）「山王遺跡Ⅰ」 多賀城市文化財調査報告書45集 多賀城市教育委員会
- 五十嵐康洋（1998）「南小泉遺跡第26次調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第225集 仙台市教育委員会
- 高橋誠明（1999）「宮城県における古墳時代中期の土器様相」－東国土器研究第5号 東国土器研究会
- 後藤秀一・村田晃一他（2001）「山王遺跡八幡地区の調査2」－県道泉～塩釜線関連調査報告書Ⅳ 宮城県文化財調査報告書第186集 宮城県教育委員会
- 吾妻俊典（2003）「陸奥南部におけるカマド出現期の土器」－宮城考古学第5号 宮城県考古学会
- 佐川正敏・鈴木 雅・安倍奈々子（2005）「宮城県賀籠沢遺跡 2005年度発掘調査の成果」－第19回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集 東北日本の旧石器文化を語る会
- 佐藤洋一・小泉博明（2005）「都遺跡ほか」 蔵王町文化財調査報告書第3集 蔵王町教育委員会

写 真 图 版



1. 遺跡遠景



2. 1区全景（南東から）



1. SI1 竪穴住居跡
(北西から)



2. SI1 床面
遺物出土状況
(西から)



3. SI2 竪穴住居跡
(西南から)



1. S13 竪穴住居跡
(南西から)



2. S13 床面
勾玉状石製品出土状況
(北西から)



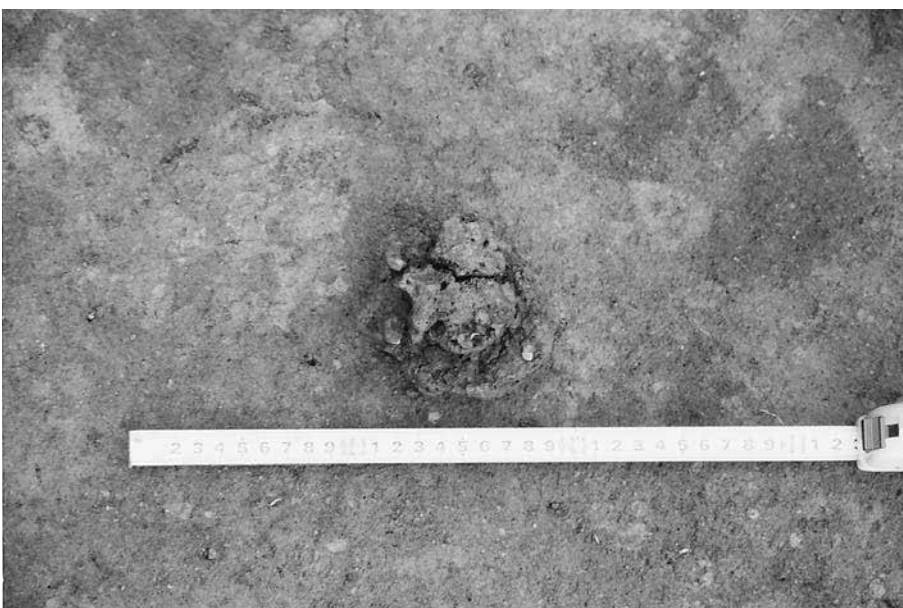
3. S14 竪穴住居跡
(南西から)



1. SI4貯蔵穴付近
(南西から)



2. SI15竪穴住居跡
(北西から)



3. SI15床面
鉄滓出土状況



1. S16 竪穴住居跡
(南東から)



2. S17 竪穴住居跡
(北東から)



3. S18 竪穴住居跡
(北西から)



1. S19竪穴住居跡
(北東から)



1. S D3溝跡
(北東から)

1. 2区全景
(南東から)



2. S110竪穴住居跡
(西から)



3. SX1溜池状遺構
(北東から)





1. 3区全景
(南西から)



2. SD7溝跡
(南東から)



3. SD8溝跡
(南西から)



S ≒ 1/3

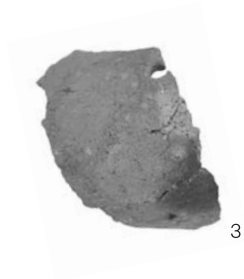
写真図版9 中沢A遺跡出土遺物
1~10: 1区 S1



S ≒ 1/3

写真図版10 中沢A遺跡出土遺物

1~6 : S12



S ≒ 1/3

写真図版11 中沢A遺跡出土遺物

1 : SI2 2, 3 : SI3 4~7 : SI4



S ≒ 1/3

写真図版12 中沢A遺跡出土遺物

1~6 : S14



写真図版13 中沢A遺跡出土遺物
1~6 : S14

S ≒ 1/3



1



2



3



4



5



6



7

S ≒ 1/3

写真図版14 中沢A遺跡出土遺物
1~7: S15



S ≒ 1/3(1~6a)
(6b縮尺任意)

写真図版15 中沢A遺跡出土遺物
1~4 : S16 5, 6 : S18



写真図版16 中沢遺跡出土遺物

1 : SI8 2 : SI9 3~5 : SD3

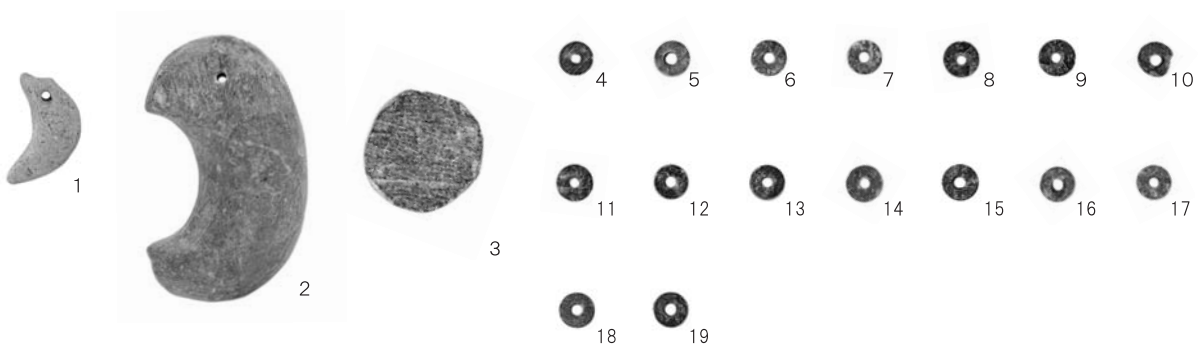
S ≒ 1/3



S \approx 1/3(1~5a)
(5b縮尺任意)

写真図版17 中沢A遺跡出土遺物

1~3 : SD3 4, 5 : SX1



写真図版18 中沢A遺跡出土遺物

1 : SK9 2、4~20 : SI3 3、21~23 : SI5 24、25 : SD3

S ≒ 2/3 (1~3, 22, 24, 25)

S ≒ 1 (4~19)

S ≒ 1/3 (20, 21, 23)

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかざわAいせき							
書名	中沢A遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第5集							
編著者名	佐藤洋一							
編集機関	蔵王町教育委員会							
所在地	〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10 TEL0224-33-3008 FAX0224-33-3831							
発行年月日	西暦2007年(平成19年)3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
中沢A遺跡	宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字中沢	43010	05045	38° 6' 9"	140° 41' 24"	2001.10 ～ 2002.09	約2,250㎡	町道立目場線改良工事・ふるさと緊急農道整備事業「東根北部線農道改良事業」に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中沢A遺跡	集落跡	弥生・古墳 中期・平安 中世	竪穴住居跡10軒、溝跡9条、溜池状遺構1基、土坑11基	弥生土器、土師器(古墳時代中期)、ロクロ土師器(平安)、須恵器(平安)、中世陶器(常滑)、石器(弥生)、土製品(勾玉状)、石製品(砥石・勾玉・白玉・円盤状石製品、金属製品(鉄鏃?))、鉄滓				

蔵王町文化財調査報告書 第5集

中 沢 A 遺 跡

2007年（平成19年）3月31日発行

発 行 蔵王町教育委員会

宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10

〒989-0892 TEL(0224)33-3008

印 刷 (株)津田印刷

宮城県柴田郡大河原町字東原町13-5
TEL(0224)52-5550
